女鑑

第拾參年第參號

明治三十六年二月一日發刊

口繪

島津公爵夫人と木戸侯爵夫人
清國武昌黄鶴樓
其他數種

重要目次

女子職業論（中） 社説
慈善及び風俗 三輪田眞佐子
黄金の山つと 濱田 文學士
我邦書籍の古今 幸田露伴
袖しぐれ 小説
御歌會始の詳況 彙報

女鑑 第拾參年 第參號 目次

口繪

島津公爵夫人田鶴子
木戸侯爵夫人壽衛子
京都博物館
京都インクライン
水戸弘道館
美濃國虎溪山

社論 …… 一
女子職業論(中)

論說 …… 五
婚姻論 …… 天野法學士
慈善及風俗 …… 三輪田眞佐子

史談 …… 一二
淀君 …… 松原廿三階堂
加藤家滅亡の原因 …… 無腸道士

學藝 …… 二三
紫式部日記講義 …… 井上頼文
通俗土佐日記(第八回) …… 兒玉彌三郎

家庭 …… 三〇
最も樂しき生活 ……
老人の看病(承前) 後閑菊野
挿花の話 …… 小畑いく子
裁縫 …… 中村むめ子
惣菜種々 …… 石井泰次郎

雜錄 …… 四六
清國見聞談(續き) 阿多廣介
新思潮と新事實 佐藤天風

百人一首及歌賀留多の由來……櫻井雲軒
黄金の山つと……濱田文學士
卌六年の六の數に就いて　林六々居士
我邦書籍の古今　幸田露伴

小說……六九
袖ぁぐれ……紫泉作　橘村補

文林……七五
節分……伯爵東久世通禧外
長歌……下田春興

敎の庭……七八
野若菜(和歌)……宇都よし子外
始めて鶯を聞く(文)……宇高松子外

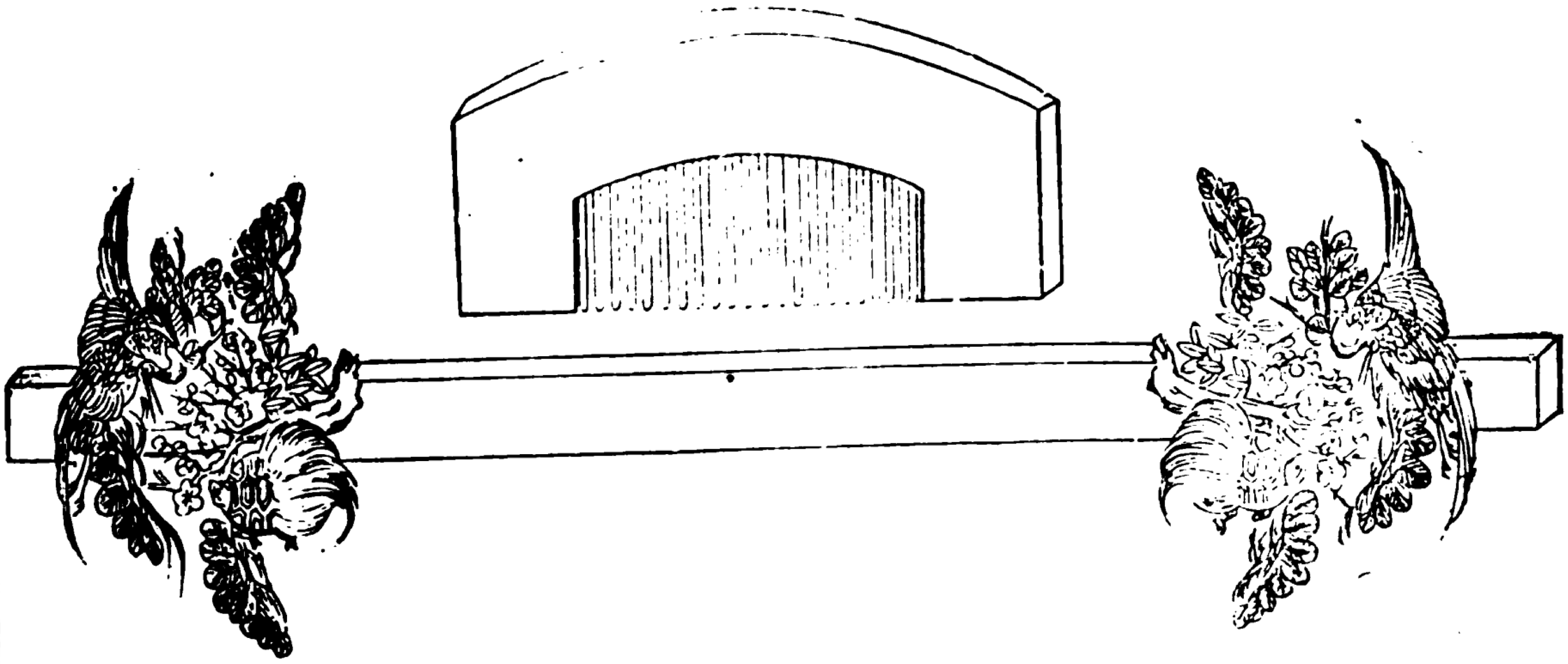
彙報……八七
●歌御會始
其他數十件

定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　前金五拾七錢
十二册半年分　前金壹圓拾錢
廿四册一年分　前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十六年一月卅一日印刷
明治三十六年二月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　渡邊棠一
印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地　並木亘雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御祝儀用櫛笄

上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て隨一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からず此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生せず浮を出さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

本鼈甲製（金三十圓　五十圓　七十五圓　一百圓
一組之價（百五十圓　二百圓　二百五十圓以上
四方張製（金八圓　十圓　十五圓　十八圓　二十圓
一組之價（金二十五圓　三十圓　三十五圓以上

右の外御婦人裝飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御來車の上現品御高覽の榮を賜り度候市内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覽に可供候地方より御注文の節は御用品詳細に御認め代金御送り被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包應用致し御便利御取扱可申上候交換日數は市内一週間地方は里程の遠近に不依三週間以内は代金又は他品と御交換可致候

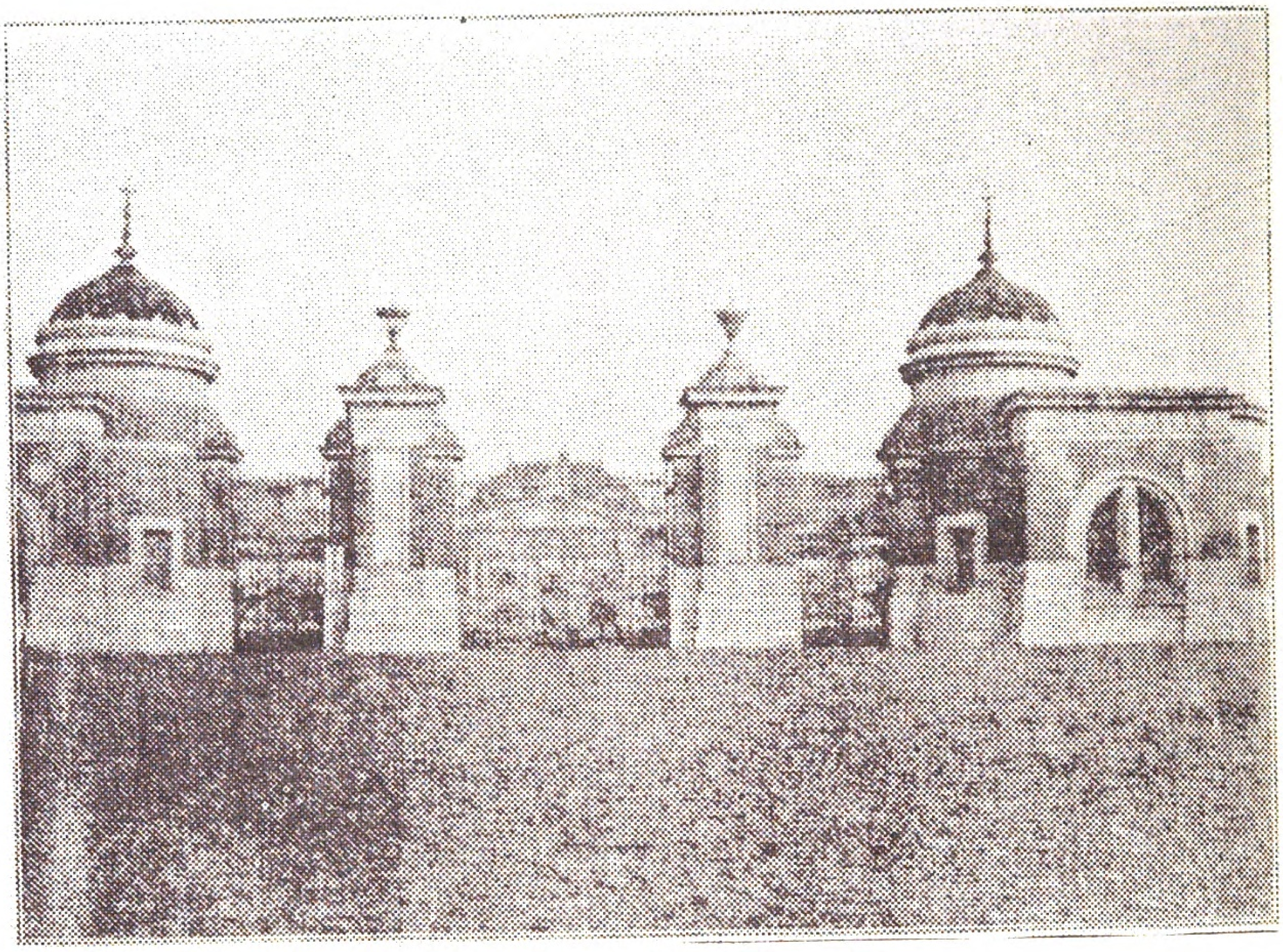
東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
店主　松田幸治郎
（特電話新橋五百五拾壹番）



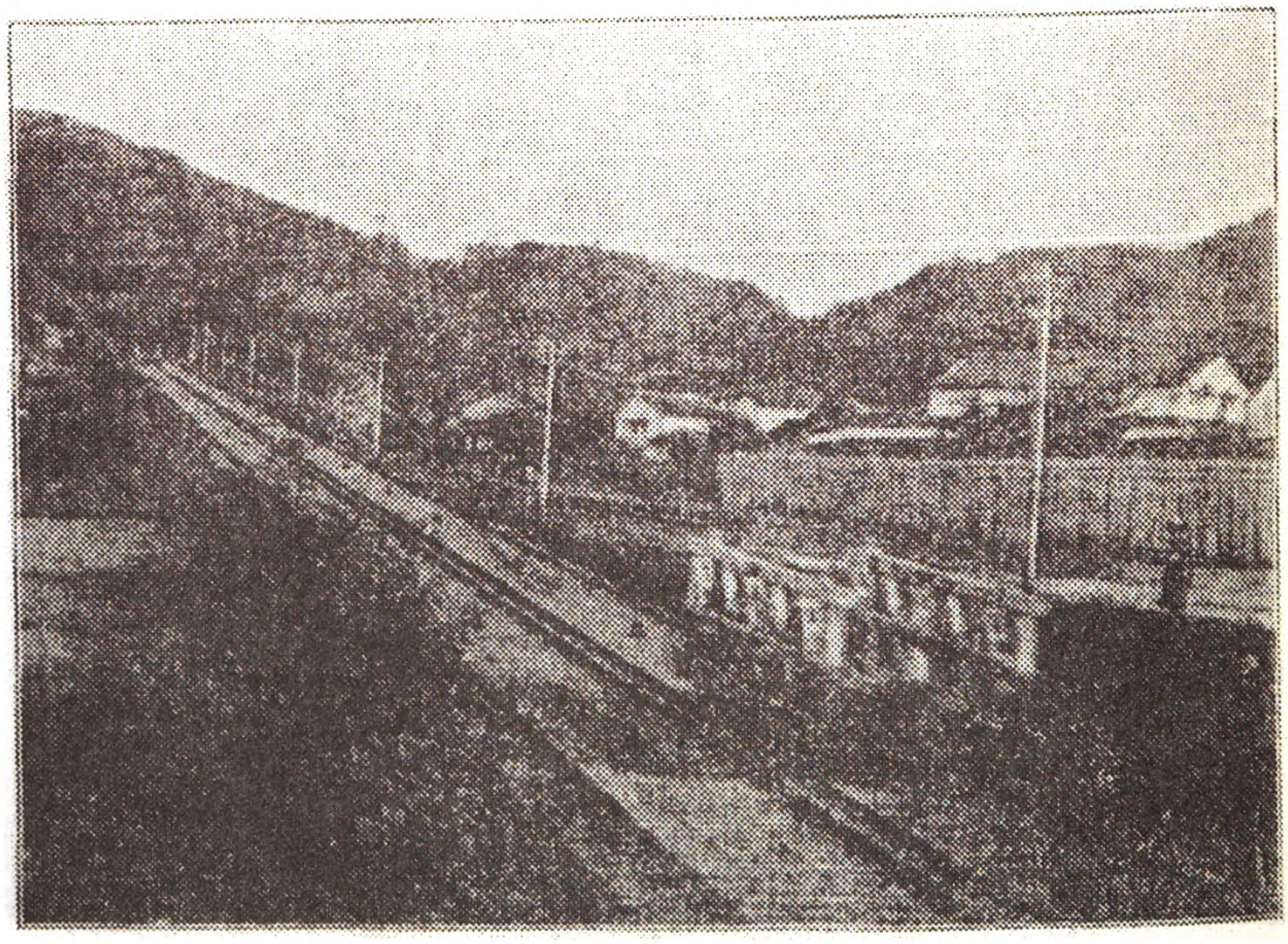
島津公爵夫人田鶴子



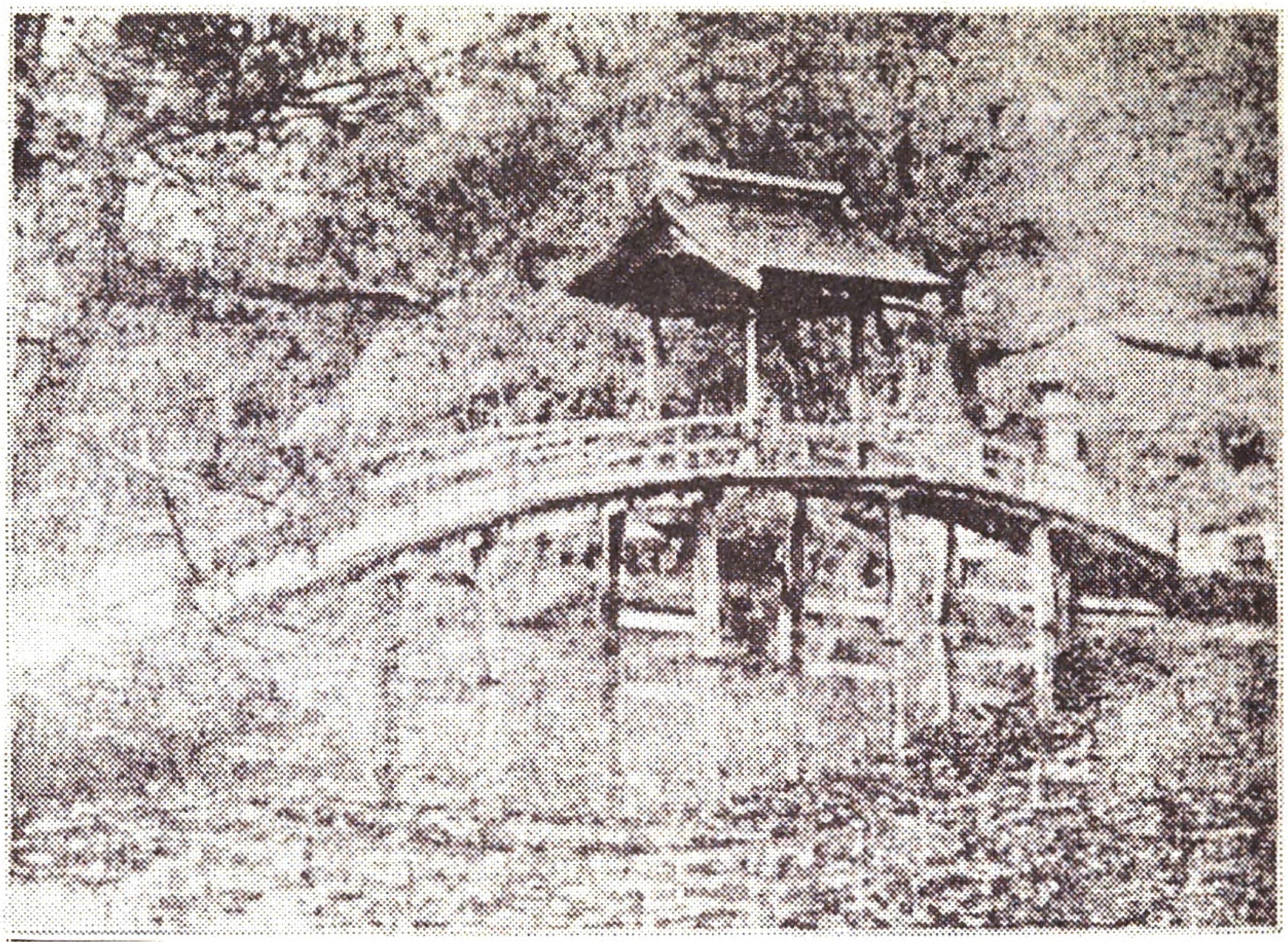
木戸侯爵夫人壽衛子



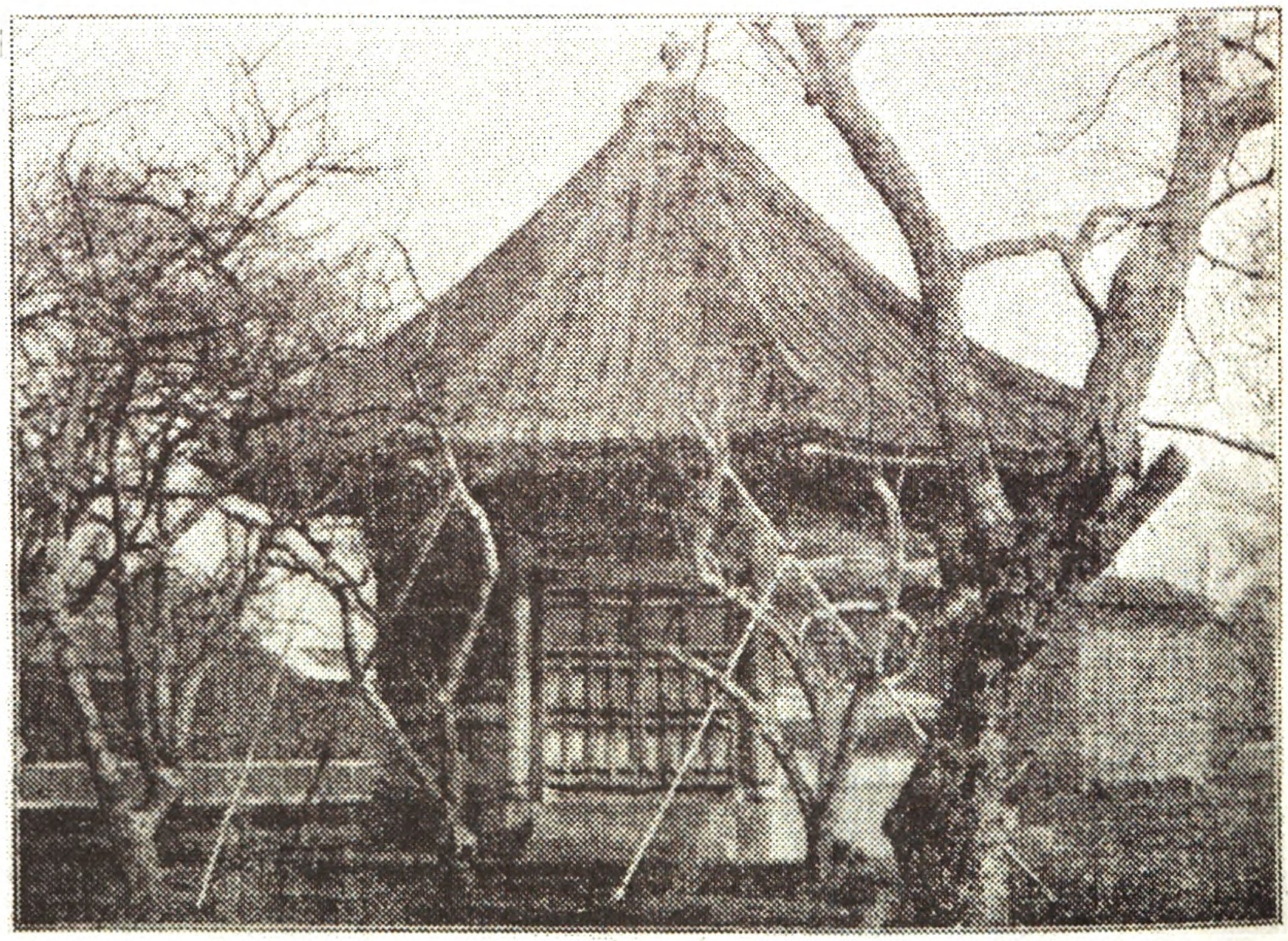
京都博物館



京都インクライン



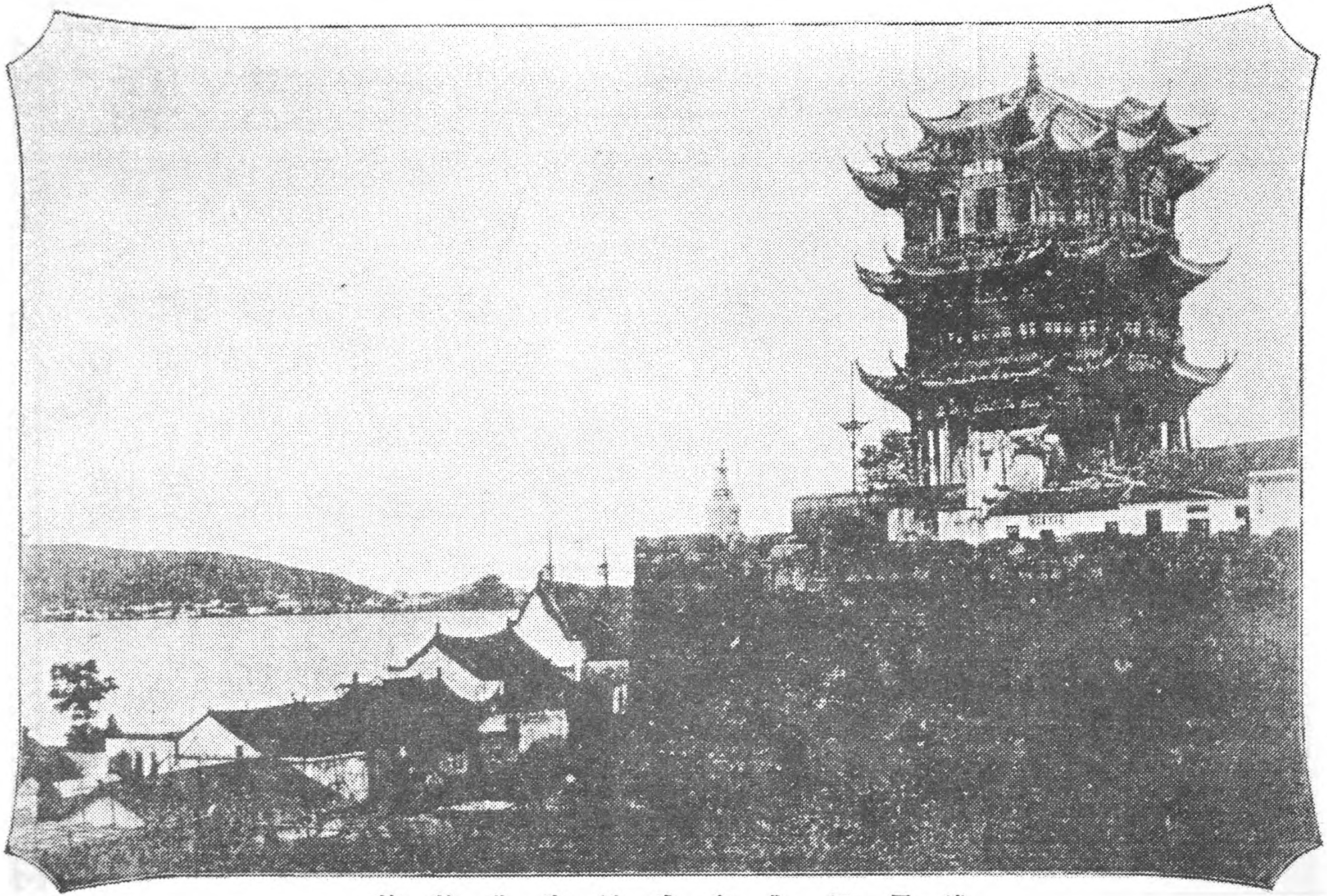
美濃虎溪山



水戸弘道館

昔人已乘黃鶴去。此地空餘黃鶴樓。黃鶴一去不復還。白雲千載空悠々。晴川歷々漢陽樹。方草凄々鸚鵡洲。日暮鄉關何處是。烟波江上使人愁

崔顥



清國湖北省武昌府黃鶴樓

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

▲毎夕新聞は今日の事を今日に知る全國唯一の新聞なり

▲毎夕新聞は米、株、商品市場の商況を即日即報し且つ奇敏なる評論を加ふ……

毎夕新聞

定價一ヶ月　前金貳拾貳錢

仝　三ヶ月　前金六拾錢

郵税　市内金八錢　市外金拾三錢

▲毎夕新聞は他新聞の號外と同様に迅速にして政治實業家の好伴侶なり……

發行所　東京市日本橋區蠣殼町壹丁目（電話浪花七二七）

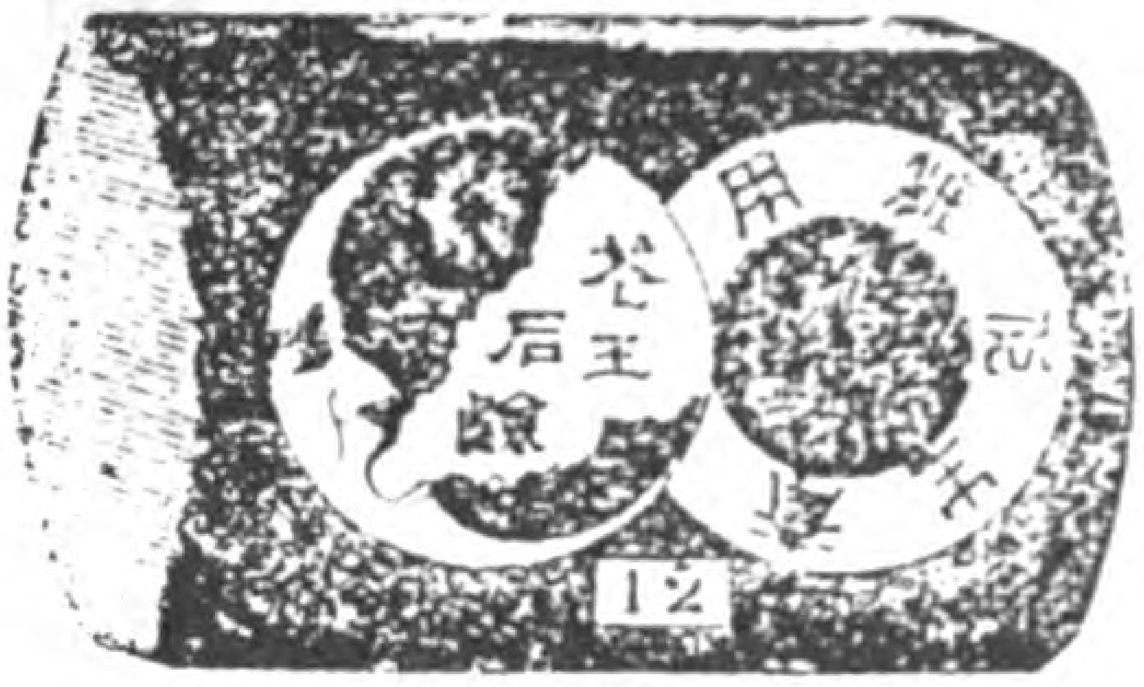
毎夕新聞社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひゞ●すべて肌のあれおしろい下に用ゐて尤もよし

又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり（中瓶一本十五錢）

登録商標



本品縮圖

花王石鹸

◉品質ノ善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シ洽ク好評ヲ博シタル佳品ナリ



發賣本舖
東京日本橋區馬喰町二丁目
長瀬富郎
（電話特浪花九二二）

女子職業論（中）

歐米人種なればとて、一も二もなく賞讃を拂ふ程の價値なきは云ふまでもなけれど、たゞ其の獨立有爲の氣象に富み、忍耐不撓の氣風を有し、自助自活、敢て他人に依賴して、重きを爲すの卑劣心なきは吾が國民の遠く及ばざる所、豈に欽羨するに足らずとせむや。而して此の氣象や、此の氣風や、啻に男子のみならざる也。有髯の丈夫のみならざる也。牙籌を握る商人のみならざる也。纖手細腰、綾羅の衣にも堪へざる、ルビ、黃金、珊瑚、ダイヤモンドを以て全身を飾れる上流婦人より、垢首蓬頭、鶉衣藿食一盞の肉、一片の麵麭にだも飽く能はざる下流の女子に至るまで、獨立の氣象、忍耐の氣風を有せざるはなき也。之を家に在りては父母の養を受くるを以て足れりとし、嫁しては、その夫にかしづきて、たゞ朝夕の世話と、子供を育つるのみを以て能事とせる我國の女流に比較し來らば、豈に同日を以て論ずべけむや。

蓋し男子には、男子に相應せる勇敢にして活達、粗豪にして強硬なる事業あるが如くに、女性には女

性に適當せる細緻にして柔軟、温摯にして濃密なる職業たるべからず。古への謂ゆる陰陽相和し、剛柔善く適ふといふもの、豈に啻だ氣候、風土、道德、性情の上に就てのみいはむや。又以て男女兩性各々その天質の職分を盡して、一家内若くは社會の事業を圓滿に進捗し、完全に執行するの道を敎へたるなり。今試に婦人の職業領域内に屬すと認むべきものを種別せば、公業としては、敎育、音樂、詩歌保母、産婆、看護業、婦人並に小兒科醫業等の如きあり。私業としては、裁縫、編物、刺繡、繪畫、造花、圖案等の如きあり。是等の職業の中には或は男子の援助を待つて、始めて全うすべき者なきにあらずと雖も、若し現今の婦人の狀態をして、今幾層の進歩と發達とを遂げしめば、全然男子の手を藉らずして、婦人專有の職業とならんも亦知るべからざる傾向なきにあらず。故に如上臚陳せる公私の職業を擧げて悉く婦人領域内に屬すといふも強ち過言にはあらざるべし、縱し又是等は遠き將來に至るまで女子專有の職業とする能はざるものとするも、之を女子職業中のものなりと云ふに於て何の妨かあらん。否な現今の女子なるもの、之を自個職業中の一に數ふるのみならず、終に之を女子領域内專有の職業とするの覺悟なくんばあるべからず。何となれば、細緻にして柔軟、温摯にして濃密なるを要する如上の職業は、女性に適應せる職業なるが故に、乃ち奪りて以て、己が掌中に把握し、その領域内の物たらしむるは、女子がその天分を全うする所以の道なれば也。

故に歐米の婦女が、早くより意を此に用ゐ、その獨立の氣象に富めるよりして、何等か相應せる職業を擇び、その忍耐の氣風を有するよりして、一たびその職業を擇ぶや、之を守りて一生の計となし、嫁して一家の主婦となるも、家を守りて獨立の生活を營むも、其間亳も易ることなきは甚だ感賞すべきなり。是を以て家に不慮の災害ありと雖も、流離顚沛の悲慘を見ること少く、夫に先だゝれて、寡婦となるも、子女をして饑寒に號ばしむるの患あること甚だ稀なるは一層の賞讃に價せずんばあらざる也。今左に最近の調査に係る歐米各國婦人有職業者の百分比例を掲げて、如何に歐米の婦人が、職業を重んじて之に從事せるかの證左とせん。

國名	有業者	被雇者	百分比例
諾威	一五、八	四三、九	五九、七
墺太利	四七、七	三、五	五一、二
伊太利	四〇、八	三、一	四三、九
佛蘭西	二四、一	五、四	二九、五
瑞西	二三、八	五、三	二九、一
英吉利	一七、三	九、六	二六、九
愛蘭土	一七、七	九、二	二六、九

國名	有業者	被雇者	百分比例
蘇格土	一七、六	九、一	二六、七
獨逸	二〇、〇	五、〇	二五、〇
白耳義	二〇、〇	四、八	二四、八
丁抹	一〇、一	一〇、三	二〇、四
瑞典	一〇、三	八、六	一八、九
北米合衆國	六、九	三、八	一〇、七

右は皆な千八百九十五年以前の調査に係るが故に數年後の今日にありては、世の進運に伴うて、年々有

業者の數を增加し、今は幾倍の增率を來したるは勿論なるべく、而して此の調査は、侍婢下女其他之に類する奉公人を除きたるものなれば、若し是等をも婦人職業の中に數へ得べくんば、有業者の數は、殆んど倍蓰するの多數を現するなるべし。

翻つて我國の婦人を見るに、專門の職業を有する者果して幾人かありや。而して有職業者を以て無職業者に比較せば、其割合は、恐らく百分の五以上を出づる能はざるべし。養蠶製絲の如き、紡績機織の如き、全國中幾萬の婦人を收容して職業を授くるものなきに非ずと雖も、是はたゞ有數篤志の婦人を除きては、貧困の餘り、一時の糊口に有付かんが爲めに集まれる者、隨つて集まれば隨つて散ずるの有樣ありて、業を習ひ、職に就くものとはいふ能はざるの憾あり。又夫の敎師、保母其他の業務及び郵便、電信等の官業に從事するものゝ如きは、近來漸やく其數を加ふるの勢ありと雖も、一たび良緣の迎ふるあれば、その業務を棄つると、恰も敝履を脫するが如く、一顧念だも費やさゞる也。故に之に從事する間こそ職業と云はゞ云へ、之を以て一身の業務也、一生の計也と謂ひ難かるべし。少數有業者の狀態すら斯の如しとせば、吾國婦人たるもの又何の面目ありて歐米の婦女子に見ゆるを得んや。

（靑眼子稿）



婚姻論

（前號の續き）

法學士　天野弘一

而して、古代に於ては、血統團體盛にして、從て祖先敬盛なりしかば、家の觀念も亦盛なりしが、今や血統團體は漸く衰へ、前段に述ぶる如く、主義目的を同じうするもの相結合して、所謂目的團體なるものを組織するに至りし、敬祖先敬の觀念は次第に薄らぎ、從て家の觀念も亦漸々薄らぐに至つたのであり升、現に西洋諸國に於ては、家の觀念は今や、地を拂つて絶無となるに至つたのであり升。

吾邦に於ては、前述べたるが如く、往古氏なるものがあつて其氏から中世家といふものが生じたのであります、然しながら其氏から家となつた引續きを説明いたしますと、少し長くなりますから、茲には略しますが、先づ兎も角も、氏も家も一つ事だと思うて差支はありませぬ、扨て其氏若くは家には、それぞれ格式があつて、其執る所の職業も、各異なつて居ります、所謂門閥世襲とは之をいふのであります、即ち家柄のよい内に生れたものは、どんなに馬鹿でも弱虫でも、代々高位高官に就くことが出來、之に反して、家柄の惡い内に生れたものは、どんな學者でも豪傑でも、立身出世は出來なかつたのであります、例へば物部氏

は代々兵馬を司り祭祀の事は、齋部氏の特權たるが如き、一に門閥に依て世襲の職業を有して居つたのであります、されば此時代に於ては、氏若くは家そのものが、國家の基礎となつて居つたのでありまして、其家族は殆ど其人格を認められて居らなかつたのであります、即ち家そのものに格式が付いて居るのであつて、其家族個人個人に格式が付いて居るのではありませぬ、語を換へていへば、此時代に於ては、家の家格なるものを認めて、各個人の人格を認めなかつたのでありますそれであるから、家が集まつて國やら社會やらを組織して居るのでありまして、各個人が集まつて國家社會を組織して居つたのではありませぬ、即ち國家社會を組織する分子、若くは單位は家であつて、各個人ではなかつたのである、猶少しく法律的にいへば、家は家として、權利を有し、義務を負ひ、各個人は權利義務の主體として、認められて居らなかつたのであります、されば官職に就き軍事に從ひ、財產を有するは、獨り家長一人ののみ其權利を有し、家族は之に與ることを得なかつたのである、是れ實に今より三十五年以前まで行はれ來つた所の制度であります、然るに維新の改革に於ては夙に此制度を打破し、遂に今日の有樣を爲すに至つたのであります、現に今日、日比谷原頭巍々として屹立する帝國議會にかん〳〵諤諤として國家の大政を論議する堂々たる代議士は皆決して各家の戶主のみではありませぬ、又日清戰役、若くは北淸事變に從軍し、赫々たる威名を揚げ、燦爛たる勳章を輝かす所の軍人兵士は概ね皆各家の家族子弟であります、されば伊藤侯爵の憲法義解にも日本臣民は法律命令の定むる所の資格に應じ均く文武官に任せられ及其の他の公務に

就くことを得といふ條文の解釋に
文武官に登任し及其の他の公務に就くは門閥に拘らず是を維新改革の美果の一とす往昔門地を以て品流を差別せし時に當ては官を以て家に屬し族に依て職を襲き賤類に出る者は才能ありと雖顯要に登用せらるゝことを得ず維新の後陋習を一洗して門閥の弊を除き爵位の等級は一も就官の平等たるに妨くることなし此れ乃憲法の之を本條に保明する所なり云々
といはれて居るのであります。

之を要するに我邦に於ては古家族制度盛にして近く明治維新に至るまで繼續したりしが、其改革と共に頗る其特質を減滅し、一方に於て個人制度發達するに至り、今や吾邦は其過度の時代に屬して居るのであります。

以上を以て家の沿革の說明を終りました。

第三 戸主權若くは家父權

家長權

戸主權の何物たるかは、畧ぼ前段に申述べたるとを以て御わかりにならうと存じます、今本段に於ては、簡單に其沿革を說明いたしたいと考へます。

扨て戸主權なるものは、讀むで字の如く、戸主が家族に對する權利であります、今の詞でこそ戸主權と申しますが、學術上の語としては、家父權若くは家長權など申ます、何れも同じことであります、されど一言にしていへば此權利の盛衰は、一に家族制度の盛衰に伴ふといふことを得るものでありまして、古は何れの國に於ても、此權利は盛なるものでありました。

今私は茲に羅馬に於る戸主權の沿革を簡單に述べやうと存じます、一言にしていへば、古代に於きましては、家父(即ち戸主)は家子(即ち家族)に

對して、所謂生殺與奪の權利を有して居つたのであります、即ち家父は家子を生かさうと、殺さうと、賣らうと、くれやうと、勝手氣儘に出來たのであります、それは家父なるものが家族の裁判を司つて居りますから、家子が惡事を爲す時は、家父が之を罰するのである、それゆゑ生殺權を有すといふのであります、又與奪の權はいかなる場合に行なはるゝかと申まするに、家子が他人に損害を加へたる時は、家父は、其の子を勝手に成敗せよとて、之を被害者に與ふれば、自己の責任はまぬかるゝのである、又他家に養子にやる時の如きは、養父たるべきものに其子を賣るのであります、かくの如く羅馬の古代に於ては、家父は家子に對して、所謂生殺與奪の權を有して居つたのであります、然るに紀元前四百五十年頃、かの有名なる十二銅表の記す處を見れば、此時には最早よほど戸主權は衰へてまゐりました、而して後世に於ては、父は子を殺すことを得なかつた、若し之をころさば嚴罰に處せらるゝのであります、又父が子を賣るの風は漸々廢せられて、つひに全く禁せらるゝに至り、子を被害者に與へて、家父の責をまぬかるゝの方法も、亦禁せらるゝに至りました又家族は自己の名に於て、財産を所有することは出來なかつたのでありますが、後世家子の特有財産なるものを、認むるに至りました。

ギリシヤ、印度に於ても、猶かくの如くであります、吾邦に於ては、前段少しく說明したるが如く維新の改革に於て、頓に戸主の權利をそぎ、現今に於ては、唯わづかに其跡を留むるに過ぎませぬ。

以上を以て戸主權の說明を終り、之と同時に緒論を終りました。

（完）

慈善及び風俗

三輪田眞佐子

今少し早く出やうと存じて、時間のことを申上げて置きましたが、今日は據ない臨時の用が出來まして、それも三十分も繰上げましたが、心ならずも遲くなりまして申譯がござりませぬ、誠にイツも〱ドナタへ出ましても多忙と申して、御斷りを申す様でございますが、矢張り今日も多忙で御斷りを申上げやうと存じて居りましたが、實は此同情會と云ふ御會は私は疾から承はッて居りまして、イッか皆さんに御目に懸ッたら結構と存じて大變御懷かしう存じて參りました、右様の考ですから先達て御出でを戴いたり、御手紙を戴きましたことのあるし遂に御請を致しましたが、ドウも善きことを考へる暇もございませなかつた、それに嫁が出産を致しましてアトが少々病氣でわッて取込んで居りまして……誠に御聽苦しうございますが、今日は皆様に唯御目に懸ッてかた〲皆さんの御話をも承りたいとも存じ、先づ御免を蒙りて、少々御話を致しましよう。

それで私はドッ云ふことを御話いたしたら宜からうかと考へましたが、ドウも宜しき御話もございませぬ、此間此御會の規約を拜見いたしました所が、第二條に斯う云ふとがございます、『當會ハ社會改善ノ爲慈善事業ヲ賛同シ且ツ會員互ノ風俗ヲ正シ交情ヲ温ムルコトヲ目的トス』とございます、それに據りまして題を慈善及風俗と斯う致しまして、少々私が感じましたことを述べて見やうと存じます、第一慈善と申すのは如何あるものかと云ふことを考へて見ますると、同情即ち弱い者とか貧い者とか或は病氣の者とか云ふ者に

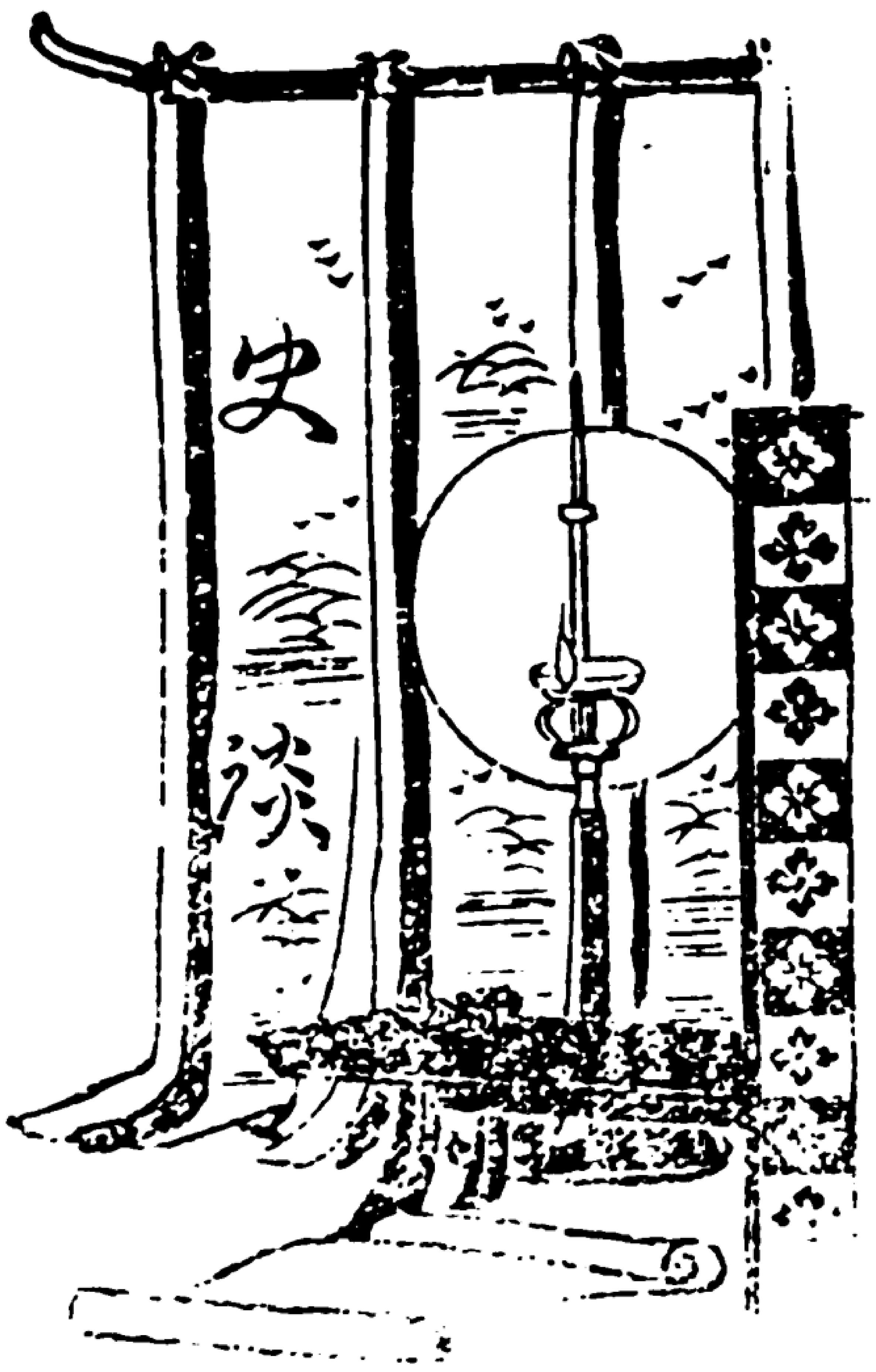
對して惻隱の心が現れます、此間も既に精神病者を助くると云ふことで發起人に賴まれましたが、

私は發起人と云ふことを歡んで賛成いたしたのでございます、實際今日の此社會にあります所の慈善と申すものを大別いたしますと二種になります、一つは心が慈悲なること、一つは行ひが慈善なること、斯う二つでございます、元來慈善の慈善たる所以は心に存することで、漢字の字義を申すとヲカシウございますが、恩惠の「恩」と云ふ字は、心に依るとかきてございます、又慈悲の慈と言ふ字は茲に志すと書きてございます、是は昔支那で字を拵へた時分に慈惠は心を主とすると言ふを現はしたのでしよう、併し慈善は心のみで實の擧らぬことがございます、勿論心でばかりドッか慈善がしたいと存じて居りましても實際用に立たなくては仕方がない、誠に其實の擧らぬことが多いのでございます、私なども能く考へますけれども、中々一分通りも其實が擧りませぬから、イッも後悔いたして居ます、毎度種々の慈善事業に發起人になッて賛成をせよと仰つしやられましても實が擧りませぬから御斷りを申上げるばかりでございます、唯氣の毒なと申すばかりでなく涙を滴して見たり、又悲しむ人も澤山ございます、蓋し氣の毒な憐れなと斯う申しましても、心ばかりで救ふことが出來ませぬとか澤山でございます、それから又其反對に心は兎も角行ひが國家から申しますと慈善となることがございます、即ち其精神から申しますと案外感心するに足らぬことがでざいます、之を例へて申さばドの會にも或はドノ神社佛閣にも寄附を澤山して慈善家であると云ふ名を知られやう、名譽を求めやうと云ふことがでざいます、又社交上義理上本意なくも寄附などを

致して人を救つて見たり、又モウ一つは廣告的に慈善事業を助けることがございます、唯今申したやうなものは心から申しますと誠に價値が無いものでございます、自分の身勝手なやうなもので價値がございませぬが、其結果は眞の慈悲者と同樣になつて居ります。それで僞善者と云ふのが澤山ございます、併し能く考へますると是も又社會の一種の美風に趣きまする階段、即ち梯子になつて參ります、是でも慈善事業を冷淡にして顧ませぬより百段も優つて居ります、自分が之をして名譽を取らうと云ふのですから感心は出來ぬが、唯心で思つて居つて事實が擧らぬ人よりも結果は慈善になります、マア大畧申しますと慈善心は惻隱の心が内に滿ちておのづから發して行となる者でなくてはならぬ、又我慾を割きまして人に同情を表するとが必要でございます、さう考へて見ますると内心と事實とが一致いたしまするとが肝要でございます、表に涙を滴すのを押隱しても慈悲心が深と、其人が自分の慾を割きまして人に同情を表する事實が擧ります、是は即ち情の最上等でございます、御承知の通り禮記にも嗟來の食は乞食でも食べませぬとあり、亦俗に犬にでも骨を抛げてやるものでないと申します、それと同じ理であつて心の眞實より出ませぬ所の人は人を慰め人を感動させて有難からせることが出來ませぬ。

（未完）





淀君（つゞき）

松原廿三階堂

これまでの事柄は専ら淀君の前生涯に就てのお話でありますが、それからは後の生涯に就て申しませう。

關ケ原の戰爭までは天下の主たる豐臣の家に正室の味方と、側室の味方と兩方の權柄の爭がありましたが、戰爭後は最早このやうなあらそひはなくなつて、豐臣の家は淀君の者となりましたがその代り天下の主たる資格を喪つて仕舞ひました、まさかに斯うならうとは誰れしも思ひ懸けぬ事で況して、才に發けた、意志の強い淀君が斯くまでの運命に及ぶとは思ひ懸けなかつたであらう。尋常の人でさへ殘念に思ふであらうのに、況てや他人に後を取りたくない、負けず魂の淀君、その殘念さは何と譬へやうもあからう。併し實力の上でもう德川には勝てないとおもつたので忍びしのんで悠々と時節を待たれたのが、十五年といふ長の月日、慶長十九年の冬に至つて積年の憤慨が一時に發して大阪の籠城となりました。

太閤記をお讀になつた方々は能く御存じて御座いませう。淀君は月も耻かしいほどの美人で女の才智と美貌にかけては當時一天下に双ぶものはあるま

いとの評判で太閤も側室に擧げられたほどの淀君その淀君が太閤晩年の頃或る曉、鏡臺に對ひて御自分の面影をうつされ、倩々と御覽じて獨言せられましたその言葉に、マア口惜しい事、どうしたのであらぞ妾も近頃のもの思ひがてうじて、あのうるはしかつた容顔がこのやうに肉も落ち色も靑ざめました、これではもしや今も太閤樣が御他界遊ばしたらば、どうして諸侯を味方に引入ることがならうか、諸侯を味方に引入れて威權を振ふのは唯この容貌一つであるのに、さても〳〵口惜しい事ぢやと仰せられました。國を傾くるほどの美人が鏡面に向ふての述懐としてはさもあるべき事でせう、それから淀君は日瞬と申す異國の醫博士に診察をして貰うて龍の肉を取りて御自身の脾の肉と入れ代へられたのぞその爲めに、衰へかゝつた容貌が日毎に麗はしうなつて以前の花顏に立ちかへり、肌の膩のつやゝかな事は宛ながら櫻の花のつゆを含んだやうで見るものは皆恍惚として心を蕩かすやうになつたとしてありますが、龍の肉などいふ事は元よりあらう譯もないからこれは今時行はれる。西洋の化粧術のやうな秘術でも施されたのでせう。何にせよ淀の御臺所が四十過ぎて化粧を施されたのは確かな事柄で、大阪陣の戰爭の最中でも上樣は毎日御化粧遊ばして軍評定の場所へ御出向き遊ばしたと、淀君御附の女中山口茂右衞門の娘菊といふものゝ實歷談にも記されてありますから容貌で以て勇將を引き入れ、月の顏、芙蓉のまなじりで英雄の心を籠絡したのは淀君の奥の手でありましたらう。

京都方廣寺鐘銘の事から、ゆくりなくも豐臣徳川の間に悶着が起りまして、關東方の量見ではこれを機會に大阪を潰して仕舞ふもくろみでしたから

反間苦肉の策をめぐらして種々の難題を申し出た、すると氣象の勝つた淀君の事であるから、火のやうに憤つてとう〳〵示談が破れました。

衰へても、大阪は太閤の跡である、城は日本の名城、金銀は山のやうに蓄へてある、兵糧は五年十年を持支へる。彈藥、武器は倉にうなつてゐる。嫉妬心のもゆるやうな淀君、權勢を掌裡に入れたい淀君、天下の群雄を膝元に列べさせたい淀君、太閤存生中の榮耀が夢まぼろしに見てゐる淀君、どうして關東の御無理、御尤が聞いて居られませう。況てや衰ろへたとは言ひながら、元と太閤の恩誼を受けた諸侯はまだ日本の國々に儼然として城を搆へてゐる。どうして徳川の理不盡が遂げさせられやう。

おのれ家康、太閤樣御他界あそばした節秀賴卿に對して毛頭如才はないと申しながら、今では天下を我ものにして誓ひを反古にしたのみか、今この身を關東へ下して枕の塵を拂はせうとは何事ぞ、吾身かりそめにも太閤の妾とはいへ、秀賴の生の母とあつて織田右大臣の姪である。これより此の儘この城中に母子共々枕を駢べて討死すともいかでをめ〳〵關東の恥辱を受くるものぞと、絶世の佳人はきり〳〵と齒をくひしめて、柳眉を逆立てました。

大阪が籠城といふ噂を聞いて諸方から集つて來た浪人は大層なもので、兜の緒をしめた者ばかりで九千人といふ數、雜兵を併せて十萬人と唱へました。これは專ら關ヶ原の落武者でもありませうが中には大名の潰された爲め食邑を亡して浪人したものもあれば、天下に志を得損なうて天晴れ勇者の零落れたものもありました。その中で一方の大將となつた人は後藤又兵衛基次に、眞田幸村、

長曾我部盛親、塙團右衞門、毛利勝永、仙石宗也明石守重、松浦彌左衞門などいふ面々で、關ケ原以來世上の日陰者となつて諸方に蟄伏してゐたのを秀頼卿が御教書によつて續々大阪へ招き寄せたのであります。その中でも眞田、長曾我部は門閥の人、後藤、塙といへば器量絶群の人物で、亂世に出て働らいたらば見事十萬石、三十萬石の諸侯にもなつた人でせう。その外は豫々城中に居て奥向をつとめました人達た、秀頼卿擁護の爲めに太閤樣時代から附け置かれた七組の隊長、これはいづれも忠義金鐵のごとく、武勇絶倫の侍大將で年が若くて風采が立派で、そして氣節の高い木村長門守、好男子で、才があつて、淀君の寵愛を得た大野修理進兄弟、この一城に集つた人物をいろ別にすれば種々であつたが一時はなか〳〵の勢で。それで淀君が軍評定の席へ出て萬般の指圖をされる。城中の御本尊と奉られた秀頼公は弱年に似合ぬ英邁な御方で、よく諸將の心を收攬されたから一と頃の軍氣はなか〳〵盛んなものでありました。

寄手は三十萬、東國、北國、西國の諸大名が悉くこの一城に落ち合ひまして三方から寄せ攻めをする。前將軍家康は茶臼山に、當將軍秀忠は岡山に各々本陣を据へて全軍の指揮をされる。眞田、後藤、毛利、長曾我部の面々いづれも、各の持口を堅めて、敵に驅け合ひましたが、軍はいつも互角で、勝敗の數は容易に知れませんかつた。然るに時節は冬の極寒でありましたから、敵の方は此の寒さに苦しんで久しく對陣をし兼ねましたから、一時の策略で和議を申し込みました。折しも此の方では城の天主閣へ大砲を向けられて、棟瓦を打碎かれた爲めに、奥御殿につとめて居る女中

どもか大變に驚ろいて、それからといふものは臆病神につきまとはれたやうで何事も手につきません。流石男勝れの淀君も此の體爲を見ては行末の事が氣になつて參りましたから、大野修理進をすゝめて和睦のなるやうにと相談をさせました。これが抑のあやまりで、落城の鍵を敵の手に渡したも同樣でありました。

和睦とは一時の策略、うま〳〵と敵の計略に落ちて城壕を埋められる、城壁を壞される、譬へば爪をむしられた蟹のやうになつて仕舞ひました、それから翌年夏再擧を圖りましたけれども、軍の歩調は以前のやうに揃ひません、可惜名將も諸所の戰に討死して元和元年五月七日の日の入り時にとう〳〵この天下の名城は落ちて仕舞ひました。太閤秀吉全盛の時天下の諸侯に仰せ付けて、國々の山から大木、大石を運ばせて築きあげられた子孫萬代の爲めの此の堅城も、一婦人の迷ひから一朝にして敢ない落城を遂げたのは、誠に惜しい事と言はねばなりません。

淀君の性質は伯父の右大臣に似て氣象の勝ッた、權式の高い、そして英邁の稟賦であッたが、惜しい事には嫉妬心が强くて、事を誤り易い、勝ち氣で權が高いから誰れも彼れも自分の眼下に見て仕舞れました。それで何時でも心に思うて居られたのは、太閤樣全盛時代の榮華の夢で、我が家の恩顧の諸侯は申すに及ばず日本六十餘州の大名小名を皆な自分の膝下に呼び集めて朝夕伺候させねば滿足が出來なかつた、それ故、どうにかしてもう一度豊臣の天下を取り還して日頃の理想を實行したい關ヶ原の合戰に過分の望みをかけて居たのもそれが爲めである。勝つた曉には石田を執權にして大名を押へつけて見事尼將軍の地位に立とう

と、人は兎もあれ自分ではその通り極めて居られたのである。然るに關ケ原の敗軍で豐臣の威光は遽かに薄くなッて大阪の勢力は秋の日蔭のやうに段々と沈んで行くばかり人一倍嫉妬心の燃へてゐる淀君の事であるから關原の利運を見て中々落ついて居る事が出來ませんかッた。大阪の奥御殿で日がな毎日散樂や亂舞をまはせて長夜の宴を張りて不斷の心を慰めて居られたけれども押へ切る事は出來ませんかッた。

それからして到々こんな大仕事を惹起しましたのも一つは野心のある諸將の奬め、一擲千金の冒險氣に富んだ浪士の勸告から起ッた事とは言ひながらも、そも〳〵は淀君の胸中に充ちて居た不斷の嫉妬心が城中を支配したからである。秀頼卿は弱年であるからまだそれほどの野心はない。唯々太閤の天下が日蔭になッたのは家の爲めに歎かはしい、一時四海を保ッた秀吉の生子として阿々關東の制を受けるのは腑甲斐のない事である。よしや城を枕に討死するとも此の儘降ッて他の臣下とあるは父上の御名を辱しむるとの健氣な心。それを酌取ッた、七組の隊長の忠肝義膽。浪人どもまたそこに心を併せたのである。遉に淀君は婦人である、殿中へ丸の飛ぶのが恐ろしくて狼狽する女房の顔色を見て急に和議の心を起されたけれど秀頼卿は中々御承知されません、今日和議を納れるほどならば、先日片桐の諫を聞くのであッた、武將に二言ない、この大阪の城に對して、又父上に對して何の面目があらうと母親を慰められたほどである。眞田幸村、後藤又兵衛は此の言葉を聞いて天晴武將の器、太閤樣の面影がしのばれると、そゞろ感涙を催したとの事。

けれども城中には獅子身中の虫と言はれた大野治

長兄弟が居て諸將の足手を束縛する、淀君の心も一體變り易い、迷ひ易い、軈ては迷心、亂心の有樣となッて、魔がさしたやうな振舞をされるやうになッたから始めは金鐵の如くに誓ッた諸大將の自然と壞れて、よしや戰場で花々しい働らきをしても殿中の有樣を見ては、心密に長嘆されて運命は疾くに豐臣の家を去ッて仕舞ふたものと諦らめましたが、これが抑も武運の盡と申すものでありませう。

大阪方が不成功に終ッたのは、つまり天下の同情を喪ふたからでせう。その原因は第一最初淀樣が重望ある恩顧の諸將を袖にして人望のない石田一黨を近づけたのと後に忠實な片桐を斥けて大野治長などの輕擧に乘られたからである。關ケ原で敗れたのは詮方もないが、大阪で事を擧げたらば、太閤舊恩の諸大名が多少加勢もして呉れるであらうと思つて居たのに大名と名のつくもの誰一人として味方をするものが無かッたので淀樣も聊か意外な感であッたらう。これでは如何に金城湯池の護りが堅くても落城せずには居れません。もしも恩顧の諸將に人望があつたならば、大阪は落城の前に見事仲裁か入ッて太閤の祀は全ふされたのであらう。しかし淀君の性質として、攝河泉七十萬石に滿足して居る事は出來ませんかつたでせう。ですからかうなるのは天の約束で、太閤秀吉公の御家に運のあかつのでありませう。(をはり)

加藤家滅亡の原因

無腸道士

夫人の嫉妬大禍を釀す

肥後一國五十一萬九千石を領して鬼上官の名は

海の內外に轟き其身は德川幕府と重緣の姻戚なればば家門繁榮、子孫長久、千秋萬歳の末迄も變りあるまじと見えたる加藤肥後守清正の家が、僅に二代にして寛永九年六月三日其子肥後守忠廣は出羽國庄內へ、其孫豐後守光正は飛彈國へ御預けとなりて、一生を憂愁悲慘の中に送りし原因を繹ぬれば、全く一婦人の嫉妬より事起りしなり、一點の火能く千萬戸を燒きて烏有となす、其よりも猶恐るべきは婦人の胸に焚く嫉妬の焰にてぞ、今其事の概畧を左に記述すべし。

加藤肥後守忠廣の夫人と申すは、蒲生飛彈守秀行の娘なるが、其母は大將軍德川秀忠の女、東照公の御孫にて其腹に生れたる忠廣の夫人こそは、大將軍の孫女なれば、當時に所謂御守殿樣にて、其威權は顯赫にして燃ゆる火の如くにもありつらむ、之に對しては主計公以來百戰を經たる猛將勇卒さへも辟易して逡巡せしならむ、ましてや泰平の世に生れ、婦人の手に人となりたる忠廣に於ては以ての外恐怖せしなるべし。殊に此婦人並々ならぬ嫉妬家と見えたれば忠廣の困頓は一層甚しきものありたらむ。左なきだに自己より身分尊き家より來れる權高なる女房は、亭主の懌ばぬを常とするものなるに、是は又大將軍の御孫と云ふを鼻にかけて燒立られては、流石に鬼將軍の嫡子も堪へ兼ねしか、密に妾を蓄へ其腹に男子出生せしかば忠廣の寵愛唯掌中の玉の如し。斯る場合には、本妻と妾を離間し、双方の氣に入る事を言うて嫉妬の焰に油を灌ぎ双方より恩賞を貪りて、自己の利を謀らんとする小人姦物は、何れの世にも少なからぬ事とて、今此の有樣を窺ひて、奇貨居くべしとなし、夫人に向ひ殿樣には愛妾の毒舌に惑はされ、其腹に出生せる男子を御跡目に直さんと

の思召あり。其母は勿體なくも若君豐後守様（光正は本妻腹なり）を呪詛調伏致す趣きなりと、讒言せしかば、さなきだに疑心の暗鬼に責められて常識を失へる夫人は大に怒り憤り、人我に慘ければ、我亦人に慘からむと遂に手を廻して彼母子を殺害せんと思ひ立れける、斯る有様なれば肥後守夫婦の間は彌益不和となり各自の心中に刄を研がぬ日とてはなし。斯て忠廣參勤の期滿ちて歸國せんとせしが、右の次第にて江戸邸中に此の母子を留め置かんには必定毒手にかゝるべく、さありては如何にも不便なりとて、隱密に今年二歳になる妾腹の男子と愛妾とを伴うて歸國せり、是ぞ肥後五十萬石を失ふの基なりし。

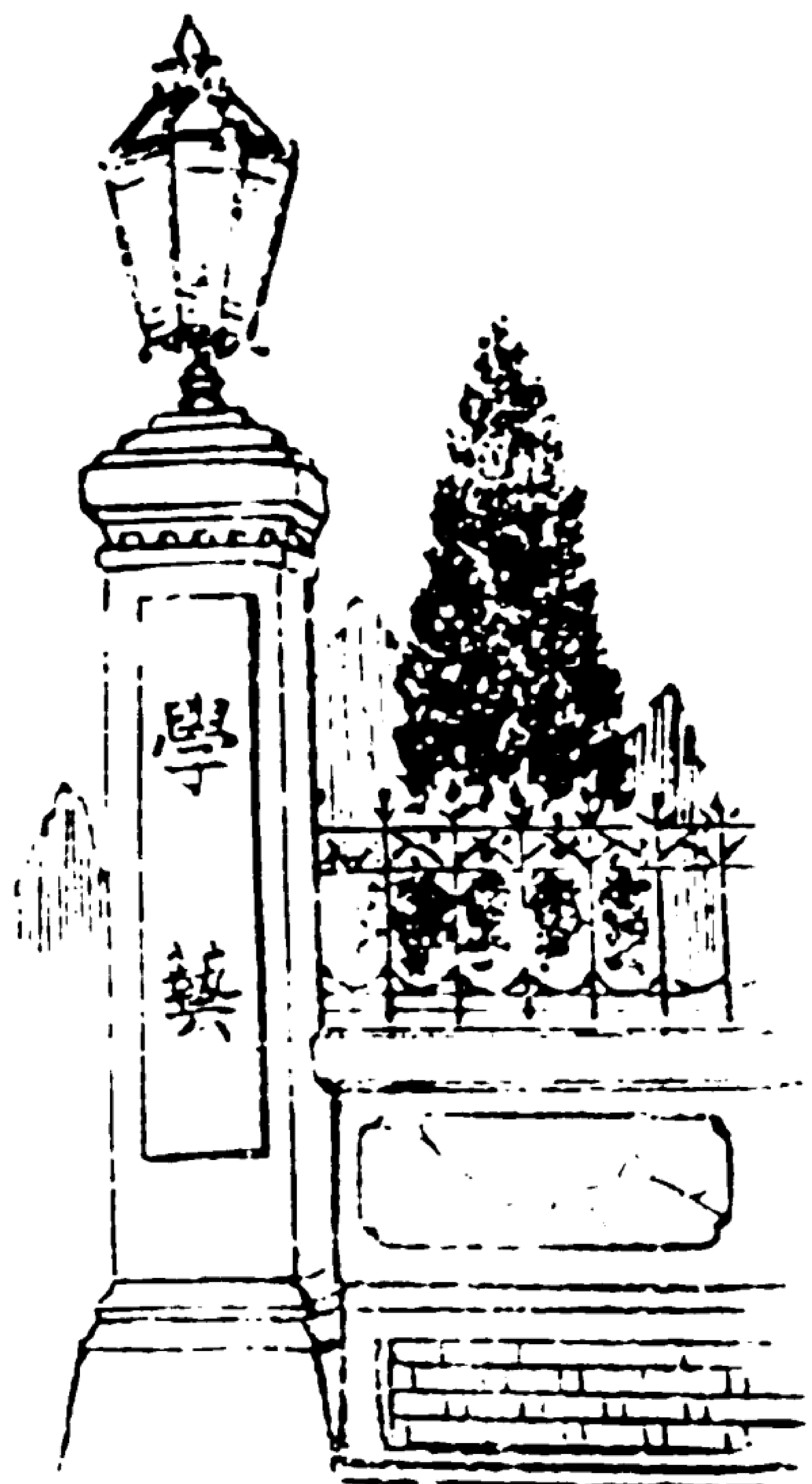
幕府時代の制度として大小の諸侯は皆其妻妾子女を人質として江戸屋敷にさし置き、他意なきを表すること前代よりの大法にして許可なくては國元へ同行するを得ず、何人にても之を犯す時は謀叛を以て論ぜられ、改易除封の罪を免がるゝことなし。忠廣之を知らざるにはあるまじけれど、夫人の嫉妬の餘り激しきに愛妾母子の身の上を憐れに思ふ所より、前後の辨別もなく之を國元へ同道せしものと見ゆ、（其夫人は幕府の近親故愛妾同道の許可を請ふ事も出來兼ねしならむ）鬼上官の子息としては稍不似合の感あれど、親子の至情より察すれば亦實に憐れむべきなり。加藤家改易の時忠廣へ仰せ渡されたる罪狀書とて細川家記に出でたる其文中に「江戸にて生れ候子母並に御代替の砌御理を不申上、國元へ遣し候儀公儀をかるしめ曲事に被思召候」とあるは此事を指したるものにて、其母子を密に肥後へ同道せし由は江戸城年錄武功雜記、松閣雜記、等に見えたり、畢竟するに夫人が胸に焚きし嫉妬一點の火は肥後一國五十一

萬九千石の大封と鬼上官以來の名譽を燒盡くして一片の烟となしたるなり。恐るべきの至りならずや。

扨又忠廣の賢愚に付ては諸事の記する所同じからず、或は愚とし或は賢とす、其最も愚とせしは雨夜の燈にて『忠廣或夜近習の人々に物語せしには「我は大力になりたく思ふなり、大力ならば具足二領を打重ね着て軍に出でなば、鐵砲の恐ろしき事あるまじと云はれしを、飯田覺兵衛之を聞き、若御家中の士心たに離れなば、譬へ百領千領の御具足を重ね着に召され候とも何の御用に立申可きや、歎かはしき思召にて候と、苦々敷申て先殿程には有まじけれども、われほどにはおとらせまじと、聲をあげて泣き立出けるとぞ」とあり又武家盛衰記に云ふ、忠廣は金銀を好み、家士國民へ辛く當り、不義非法の事多きゆゑ民苦み家士衰ふ、依之佞奸の者は時を得て出頭し、忠臣義士は外樣遠の者となる云々。是等に據る時は忠廣は愚にして且つ惡行ありし人の如し。

然るに諸家大秘錄には誠に忠廣文武を志し生得寛々として直なり、尤詩歌に心を寄せ威儀正しく士卒を勵まし民を憐み、行迹穩なりしとあり、丸で前の武家盛衰記とは反對なり。又細川三齋の書翰に云ふ、忠廣配所へ被參候に、下人共走候に付、鎗を持せ可被參候事も不成候を、鐵砲の者の内五人此度の事に候間何方までも供可仕と申候其内一人鎗を持て參り候由、か丶る奇特なる者も御入候やと感涙を催す事に候云々。是等に據る時は忠廣は頗る賢明の君主にて能く士卒の歡心を得たるものに似たり、然らざれば此の危急の時に際して何方迄も供すべしと云ふの小卒あるべしとも思はれず。鬼に角良夫人を得ず、牝鷄頻りに晨して

家庭に雍和の樂を缺ける事一の動機となり、延て閨門の修らざるを致し遂に滅亡に至りしは眞に不幸と謂ふべし。



國文學講義

紫式部日記講義（四十四）

井上頼文

歌どもあり、女房『さかづきなど、あるをり、いかゞは、いふべき』など、くちぐ思ひこゝろみる。

めづらしき　ひかりさしそふ　さかつきは
もちながらこそ　千代もめぐらめ

『四條大納言にさしいでんほど、うたをば、さる物にて、こわづかひ、よういひのべじ』など、さざめきあらそふほどに、ことおほくて、夜いたうふけぬればにや、とりわきてもさゝで、まかで給ふ。

ろくども、かんだちめには、女のさうぞく、御ぞ御むつきや、そひたらん。

殿上の四位は、あはせ、一かさね、六位は、はかま、一ぐぞみえし。

○女房　女房の下に集りゐていへるは、といふ詞を含めて心得べし○さかづきなどあるをり　歌よませんとて、盃などを差し給はゞとの意○いかゞいふべき　如何様に歌を詠みたらばよからんとの意○くちぐ　女房たちが、皆、口々

になり○思ひこゝろみるか　ゝる體によまんか、など、みな〳〵歌を詠み試みるなり。此の時、式部は、次ぎ見えたるめづらしきひかりさしそふ云々の歌をば詠みたるあり○めづらしき云々千代もめぐらめ　此の歌は、後拾遺集、賀の部に、後一條院、うまれさせ給ひて、七夜に人々まゐりあひて、女房、さかつきをいだせと侍りければ、紫式部、と、はしがきして入りたり。詞書の、こゝに見えたるさまとたがひたるは、撰者のしわざなるべし、かゝる類は撰集に最も多し、注意すべきことなり。されば、たゞしく歌を評せんには、各自に記せる家々の家集によらざれば、眞意はわかり難きものなり。撰集には、撰者が心のまゝに、ことばがきを替へもし、つくりもし、甚しきは、歌の上の句に下の句をのこらず、引きなはしたるもあるなり○四條大納言　公任卿なり、卿は、

小野の宮左大臣實頼公の二男、三條關白賴忠公の長男にて、母は、代明親王の御女あり。治安四年致仕し、萬壽三年出家。長元二年正月一日薨す、年七十三歳なり。世に四納言と稱せられし一人にて、きはめて、多藝ある人なりき。當時の四納言とは、藤原の行成、藤原の公任、源の齊信、源の俊賢なり○さしいでんほど　公任卿に呼ばれて、前にいでん時にの意○うたをば、さるものにて　公任卿は、歌の名人なれば、歌につきて、及ばざること勿論なり。されば、歌は歌として置きての意○こわづかひ　公任卿に對しての詞遣ひなり○よう、いひのべし　すら〳〵と、能く話すことは、出來まじとの意なり。公任卿は、多藝の人ゆゑ、如何なる事を言ひ懸けて困らすかわからずと女房たちの恐れたるさまなり○さゝめき　ナイショ話をすること○ことおはくて　攤

をうち、歌をよむことなど、遊びごとの多きをいへり○とりわきて　歌よめと、わざ〳〵なり○さゝで　盃をさゝずしての意○まかで　退出なり○みぞ　御衣なり○そひたらん　添はりてありしならんとの意○あはせ一かさね　袷一重なり○はかま一ぐ　袴一具なり○みえし給ひたるを見たりとの意なり

さて、この條を、榮花物語、初花の巻に記せる、いと、よく似たり。

歌などあり。

されど、物さわがしさにまぎれたる、尋ねれど、しどけなう、ことしげゝれば、えぞ、かきつけはべらぬ。

女房、さかづきなどある程に、いかゞはと思ひやすらはる。

　めづらしき光さしそふさかづきは

　もちなからこそ千代もめくらめ

とぞ、紫(式部)さゝめきおもふに、四條大納言(公任)みすのもとに居たまへれば、歌よりも、いひいでん程のこわづかひ、はづかしさをぞ思ふべかめる。

かくて、ことゞもはてゝ、上達部には女の裝束に、大袿などそへたり。

殿上の四位には、袷、一襲、袴、五位には、袿、一襲、六位には袴、一具なり。

と、あるを參考すべし。

譯解

また、歌の宴もありたり、

歌の宴には、女房たち集り居て、公任卿がもしも歌よません、とて、

盃など差し給はゞ、如何なる歌をよみたらばよからん

など、人々、口々に案じ試みる。
其の時、式部は、
皇子の御降誕を祝ひたてまつるとて、ひとしほ、めでたき月のひかりの増し加はるさかづき（盃に榮月をかけたり）は、手にもち（持に望をかけたり）ながら、たのしくて、おぼえず、知らず、千代もめぐるらん。
げに、この皇子の御降誕は、月のひかりの増したるがごとく、その滿月のかけたる處なきがごとく、こよひ、群臣が祝ひたてまつりて汲みかはす盃の數々めぐるがごとく、ひさかたの空ゆく月のめぐりてつきざるがごとく、皇子は、そのまゝ何千年も、御覺えあそばすならん
と、いふ歌をよみいでぬ。
女房たちは、
四條大納言公任卿の前に呼びいだされて、さしいでたる時は如何にせん。大納言は、歌の名人ゆゑ、歌につきて及ばぬことは、勿論のことながら、多藝の人なれば、如何なるムツカシキ事を言ひかけられんも測られず、卿に對して、すら〳〵と、能く談話することは、できまじ
など、いひて、さゝやきばなしする程に、攤うち歌よむなど、あそぶことの多くて、夜は、甚、更けぬればにやあらん。公任卿はとりわけても、女房たちに、歌よめと、盃を指さで退出したまふ。
今夜、賜りたる、祿どもは、上達部の人々には、女の裝束に、御衣をたまはる。これには、御襁褓も添ひたるならん。
また、殿上をゆるされたる四位の人々には、袷、

一重をたまひ、六位の人々には、袴、一具づゝ賜ひたるを見たりき。

通俗土佐日記　（第八回）

廣島商業學校教諭　兒玉淵三郎

是ならず多かれど書かず、是れ等を人の笑ふを聞きて、海は荒るれど心は少し和ぎぬ、

○是れならず多かれど云々　とは此の歌のみあらず他にも多くの歌ありしも、さのみはとて此の餘は書かずといふにて、當座の興に此の一つは書きたるも、其の實、此の歌は、女の辛き目をして其の功もなく徒勞に屬して音を泣くといふ處を憐れに思ひやりて紀氏自身に引き比べて、此歌のみ特に耳に留まりしなるべし、

○是れ等とは、此の歌並びに書き漏らしたる歌共なり、

○人の笑ふを云々　此の歌、詞遣ひ、鄙びたるが故に、人々聞きて笑へるなり、此の餘の歌も之れに似て鄙びたるものなりしならん、人の笑ふと書けるは、自ら同情を表したることを明白にせざらんが爲めなり、

○心は少し和ぎぬ　とは海の荒るゝにつれて、心に恐ろしく思ひ居たりしも是れ等を人の笑ふを聞きて、其の心少しく慰みたるなり、

斯く行き暮らして、泊りに到りて、翁人一人、老婦一人、在るがなかに、心地悪しみして、物ものし給はで潜まりぬ。

○斯く行き暮らして　とは今朝大湊を漕ぎ出でたるよりのことに立ち返りて言ふ詞にて、畢竟

上文は目にして此處は綱なり、故に上文に夜更けなどありて、此處に行き暮らしてとあるも怪しむべきにあらず、文章に此の法を用ゐること其の例少なからず、

○泊り　は奈半の泊りなり、

○翁人一人　とは紀氏のことなり、

○たうめ　は和名抄に「日本紀曰、專領二字讀太宇女平左女、今案、專訓毛波良、專一之義也、太宇女者毛波良之古語也、今呼二老女一爲二太宇女一、故次二於負耳」とあり、此は紀氏の室を指せるなるべし。

紀氏夫婦のなやみは元來亡兒の歎きより來れるものなるを、今日の舟醉に託して書けるなり、海は稍荒れたれど、豫定の如く目的地に着し、且つ舟人等の歌を歌ひしなどを以て察するも、風は順風なりしことと知るべし、亡兒の歎きも、今日に限れることにはあらざれど、前日は日々送別の人など多かりし故に、其の歎き、紛るとにもあらねど遠慮もありて抑へ得たりしに、今日は地かたを漕ぎ離れて、來る人もなく、心落ち着きたるより、其の歎き出で、惱みしなるべし、然れども、兒を亡ひしは土佐にて起りしことなれば、土佐の任彌〻不平を增せり、之れを今日海荒れたるが爲め舟醉して心地惡しみせしなりと見ゆる樣にとて、前文に海荒れて恐ろしかりしことを書き、而して此の惱みを書きたるは熟達の筆力なり、

○あるがなかに　とは舟中人多きが中にといふなり、誰とても心地惡しくて善しといふことはなけれども、舟中、君と仰げる二人といふ心を例の女の記者の筆に托して書けるなり、

○物もものし給はで　とは食物を喰はざりしてとなり、

○潛まりぬ　は舟中の人、悉く心を痛めて、物言ふ者もなかりし樣をいふなり、

十日、今日は此の奈半の泊りに留まりぬ。

○此の段、今日は天氣も好ければ舟出すべきに昨夜來、紀氏夫婦の惱み甚だしくして、今日も尚は快からねば留まれる由をいへるなり、

十一日、曉に舟を出して室津を追ふ

○曉に舟を出して　とあるにて、昨日來天氣好かりしこと及び紀氏夫婦の惱みも稍輕くなりしことを知るべし、

○室津　は今の室戸あり、土佐國安藝郡に在り。

人皆未だ寢たれば、海の有樣も見えず唯月を見てぞ西東をば知りける

○人皆とは、從者等なるべし、

○海の有樣も見えず　人皆寢たりとて、海の有樣の見えざる理はなけれど、此は省略せるにて、從者等未だ起き出でざる程の早朝なれば、苫なども明けず、從つて海上も見えぬなり、

○月を見てぞとは、苫又は戸などの隙よりさし入る影を見てといふなり、

斯かる間に、皆、夜明けて、手洗ひ、例の事どもして、晝になりぬ、

○皆は　從者等を指すにて、夜明けてに續くにはあらず、手洗ひ云々に續くにて、夜明けての一句は挿めるなり、

○手洗ひ例の事どもし　とは手洗ふことをのみ記して、餘の事は例の事といふに含めたるなり。

○晝になりぬ　とは日の高く昇れるにて、正午にはあらず、正午をひるといふは俚言なり、

今し、羽根といふ處に來ぬ、幼き童、

此の處の名を聞きて、羽根といふ處は、鳥の羽の樣にやあるといふ、未だ幼き童の言なれば、人々笑ふ、時に、在りける女童なむ、此の歌を讀める、

眞にて名に聞く處羽根ならば飛ぶ
が如くに都へもがな、

とぞいへる、男も女も、いかで疾く都へもがなと思ふ心あれば、此の歌善しとにはあらねど、實にと思ひて、人々忘れず、

○今しのしは助辭なり、指す意ありて上の詞を強むる詞なり、

○羽根も安藝郡に在り、奈半より三里許り東南なり、

○幼き童の言なれば の下に聞く人さる理なきことあらんやなど嘲けりもせでといふ程の意を入れて見るべし、

○在りける女童 とは其處に居合はせたる女童なり、

○眞にて名に聞く處云々 今名に聞く所の羽根といふ地、眞の鳥の羽にてあらばの意なり、所謂名は實の賓の意に思ひ合はすべし、

○飛ぶが如くに とは舟出せしより、數日を經たる歎きにつれて、舟の疾からんことを望めるなり、

○都へもがな とは都へ行く樣にありたしとの心にて、もがなは願望の詞なり、

○一首の意は、是れまで、はや數日の船中に倦みたる情を讀めるなり、而して此の地名の羽根といふより、此の舟飛ぶが如く都へ行けがしとのみ讀みて、舟に倦める由を言はざるは妙手と

○潜まりぬ は舟中の人、悉く心を痛めて、物言ふ者もなかりし樣をいふなり、

十日、今日は此の奈半の泊りに留まりぬ。

○此の段、今日は天氣も好ければ舟出すべきに昨夜來、紀氏夫婦の惱み甚だしくして、今日も尚ほ快からねば留まれる由をいへるなり、

十一日、曉に舟を出して室津を追ふ

○曉に舟を出して とあるにて、昨日來天氣好かりしこと及び紀氏夫婦の惱みも稍輕くなりしことを知るべし、

○室津 は今の室戸あり、土佐國安藝郡に在り。

人皆未だ寢たれば、海の有樣も見えず唯月を見てぞ西東をば知りける

○人皆とは、從者等なるべし、

○海の有樣も見えず 人皆寢たりとて、海の有樣の見えざる理はなけれど、此は省略せるにて、從者等未だ起き出でざる程の早朝なれば、苫なども明けず、從つて海上も見えぬなり、

○月を見てぞとは、苫又は戶などの隙よりさし入る影を見てといふなり、

斯かる間に、皆、夜明けて、手洗ひ、例の事どもして、晝になりぬ、

○皆は 從者等を指すにて、夜明けてに續くにはあらず、手洗ひ云々に續くにて、夜明けての一句は挿めるなり、

○手洗ひ例の事どもし とは手洗ふことをのみ記して、餘の事は例の事といふに含めたるなり。

○晝になりぬ とは日の高く昇れるにて、正午にはあらず、正午をひるといふは俚言なり、

今し、羽根といふ處に來ぬ、幼き童、

此の處の名を聞きて、羽根といふ處は、鳥の羽の樣にやあるといふ、未だ幼き童の言なれば、人々笑ふ、時に、在りける女童なむ、此の歌を讀める、

　眞にて名に聞く處羽根ならば飛ぶ
　が如くに都へもがな、

とぞいへる、男も女も、いかで疾く都へもがなと思ふ心あれば、此の歌善しとにはあらねど、實にと思ひて、人々忘れず、

○今しのしは助辭なり、指す意ありて上の詞を強むる詞なり、

○羽根も安藝郡に在り、奈半より三里許り東南なり、

○幼き童の言なれば の下に聞く人さる理なきことあらんやなど嘲けりもせでといふ程の意を入れて見るべし、

○在りける女童 とは其處に居合はせたる女童なり、

○眞にて名に聞く處云々 今名に聞く所の羽根といふ地、眞の鳥の羽にてあらばの意なり、所謂名は實の賓の意に思ひ合はすべし、

○飛ぶが如くに とは舟出せしより、數日を經たる歎きにつれて、舟の疾からんことを望めるなり、

○都へもがな とは都へ行く樣にありたしとの心にて、もがなは願望の詞なり、

○一首の意は、是れまで、はや數日の船中に倦みたる情を讀めるなり、而して此の地名の羽根といふより、此の舟飛ぶが如く都へ行けがしとのみ讀みて、舟に倦める由を言はざるは妙手と

家庭

いふべし童女の歌とあれど、上句の置き樣などより推すも、實は紀氏の作なるべし、此の歌善しとにはあらねどなどあるは謙辭と思はる、

○男も女もとは船中、從者などをも總ていふなり、

○いかでは俚言のどうぞしてといふ詞なり、

婀娜たる貞婦は上帝の完全なる妙作なり天使の眞正なる光榮なり地上の珍奇なる靈怪なり世界の單一ある佳品なり

（ハームス）

なほさりて折つるものを梅の花こき香に我や衣そめてん

後撰和歌集

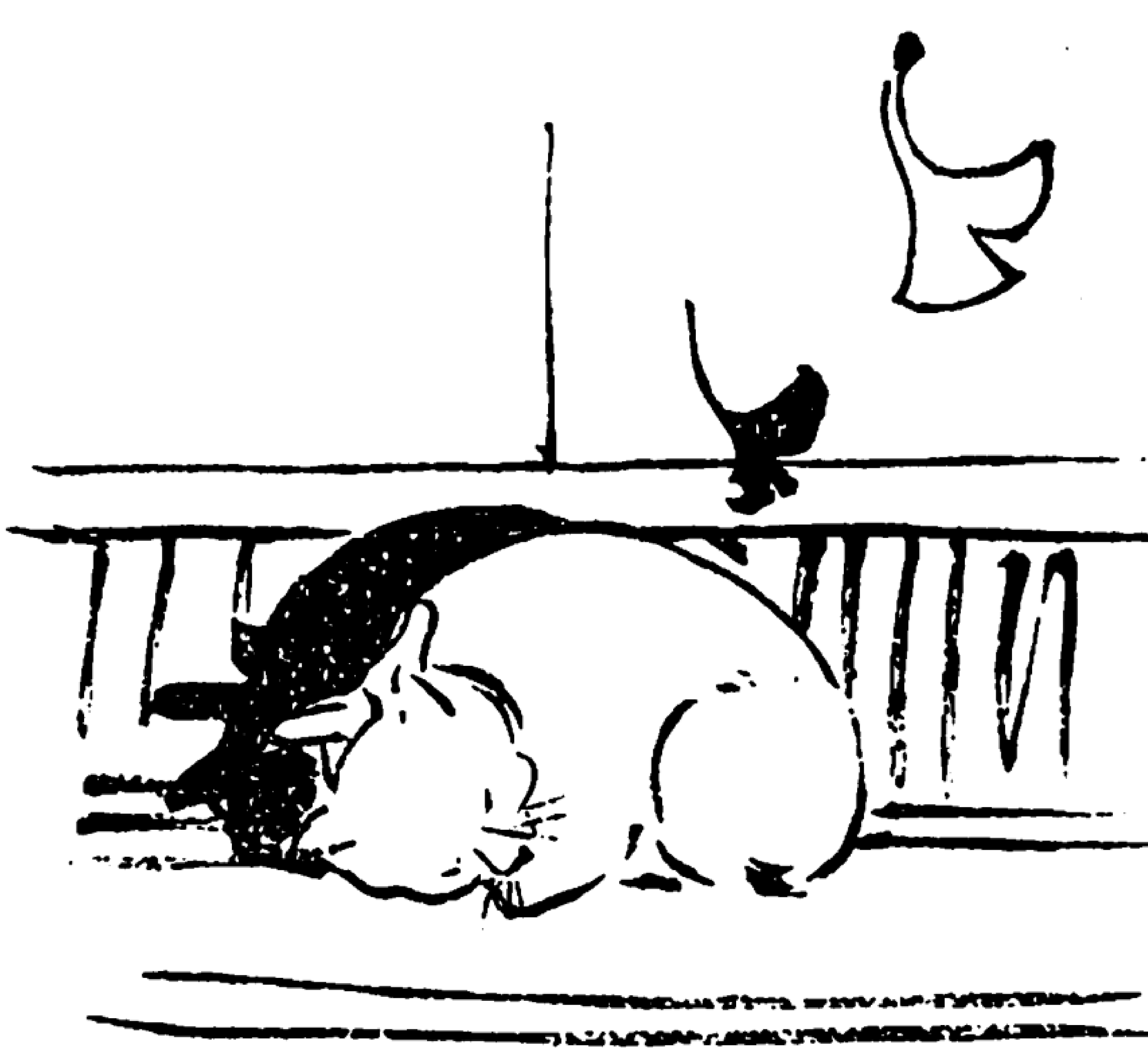


最も樂しき生活

都府の生活と田舍の生活と孰れが愉快にして且つ便利なりやとの問題は英國倫敦に於て識士の考慮するところなりしが此頃元と倫敦の新聞記者たりし或人が種々研究の末「デイリー、メール」紙上に公にせるものは移して以て我國の人々の參考に資すべきものあり茲に之を紹介せん。

▲愉快と苦痛　彼の謂へるには倫敦に生活せんは如何に節約するも一箇年二百七十三圓を費さゞるべからず然かも此の二百七十三圓を得る事は即ち一箇年間毫も斷間なく苦痛を感ぜざるべからざるを意味せるものにして其の愉快を求めて勞作し消費するときは影の形に隨ふ如く苦痛も終始相離れざるものなれば差引其の人は零なるものにて全く無意味の生活と謂ふの外なし

▲幸福の生活　加之一箇年二百七十三圓の費用を支へ得んも倫敦の生活は單調子にして寧ろ苦痛を感ずること多ければ宜しく田舍に退きて幸福なる生計を營むに如かざるべし而して田舍に退きたる身は如何にすべきやといふに其の人は己が田園を求め自ら働き自ら生活すべし此くせば假令家を築くに佛蘭西の釘、食卓を飾るに甘き塩、書簡を認むるに光澤ある紙を得る無からんも田園は多く必需品を殖やし夏來らば新鮮なる蔬菜夥しく生じ馬鈴薯葱等を冬の用意に納屋に貯ふべきのみならず美しき菓物、豆類は潤澤に味はれ且つ戸外の生活は人の壽命を長くし食物も田園に產する物を最も適當とすべきにより屠獸場より運ばるゝ肉類の支拂も不必要と爲らん



▲賑かな田園　田園生活の副座物として家禽は歌ひ兎は小屋に躍り小山羊は鳴き小羊は戯れ鳩、鵲、鷓鴣の類亦た養はれ池には鰻を捕ふべく此

くて都大路の市場に人工を經し乳酪、干酪、牛乳等を購はずとも肉も乳も卵も十分に樂しき食卓に堆かく供せられ倫敦にて味ふことの出來ぬものさへ少なからず口にすべく且つ數年ならずして都にて勉めて猶は購ふ能はざりしシルクハットを戴き禮服を着くるの資を剩すべし

▲樂しき結婚　無論此の生活にも多少の經驗を要せん然かも勞働の問題は只だ一にして良好の手段は此の田園の生活に歸へらんと希望する都大路の勞働者と交代して己が身は他日再び倫敦新聞の編輯局に復り田園の福音を世に告ぐるに在り而して終りに家庭問題の解決のため貞淑の女と樂しき結婚を爲さんか



老人の看病（承前）

女子高等師範學校教諭　後閑菊野

次は寢床のこと、衣服のことを申しませう寢所は普通用ゐます處の綿の這入りました蒲團でよろしうございますが、其綿は十分に入れてしかも軟らかで塊りのないやうに氣を付けねばなりませぬ、若し平生寢て居る蒲團で十分でないと思ひますれば其上にもう一つフックリした綿の這入った蒲團を重ねるか、さもなければ當り前の蒲團の下に藁蒲團を敷いて厚くして置くのが宜しうございます、長く寢て居る病人に對してさう困りませぬ家で薄い蒲團一枚で其儘置くことは實に心無いことであります、若し綿が古くなつて居つて塊りがあります其塊りの所に當る身體の一部は大層押されますから直ぐ蓐瘡が出來ます、蓐瘡といふものは

甚だ苦痛なものでありまして、ヒドくなりますと本病のある上に思ひがけぬ苦しみをうけることになりますこれのできる場所は龜の尾の所、臂の關節、肩及び腿の關節の處、足の黑節、さう云ふ所の皮がわッて中に筋肉が無く直ぐ骨のある所に出來ます、普通のは初めその部の皮膚が赤くなり、終にはたゞれて赤肌になるのでありますが、たちの惡いのは紫のやうな黑いやうな色になりますこれは其所の血液の循環が弱くなるので、終に其一部分が壞れて死んで仕舞ふのでございましてそれは大變難義なものでございますから、かやうのことの起らぬやうにせねばありませぬ、病院などでは病人に蓐瘡が出來ては看護婦の耻であるとして居ります、故に一家でもこれ等は心得ねばなりませぬ、若し既に蓐瘡が出來た場合には布の細長い嚢を作り其内に綿を充たし其兩端を縫合せて、釜敷やうの物を作り、其輪の中の處を蓐瘡の出來て居る所に當てますか、又は場所によつては小枕のやうなものを拵へて當てるともあります、それは何れも赤肌になッて居る所が床に附かぬやうにする爲でございます、瘦せて居る人は殊に蓐瘡が出來易うございますから氣を附けねばなりませぬ、それから又蒲團が常に潤つて居るといふとも原因となりますから、之をさけしめねばなりませぬ、すべて着物を着換へさせる時など能く氣を付けて、蓐瘡の出來たか出來ないかを見て、赤くなつて居つたら早く用心せねばなりませぬ、又長く寢て居る病人は或時は右を下にし、又或る時は左を下に或は仰向にといふやうに始終寢る位置を換へさせるやうに心付けるがよろしうございます、それも蓐瘡を防ぐ方法であります、中には夢中で一向何も分らぬ病人もありますが、さう云ふ者は自分では致さ

れませぬから、看護する人が氣を付けて度々換へてやらねばなりませぬ。

此外蒲團と疊との間は餘り長く其儘にして置きまると病人の身體から出る蒸發氣と床下から上る濕氣とで蒲團の下の方と疊とが黴びてしまふことがありますから、ソンなことの無いやうに一室のうちでもコチラにあつたものをアチラに換へると云ふやうに、寢床の位置をかへることも必要であります、又病人の好みに依り或は病氣の種類に依て寢臺を用ゐるもよろしう在います、怪我人には繃帶を掛換へたりするに寢臺の方が便利であります、繃帶もかけよくありますし、下の方に繃帶の古いのを置いたり、油紙や膿の附いたものを置いたりする、ソンな時には寢臺の方が宜しうございます、もし寢臺を求めますならば鐵の格子か、或は網になッて居るのが宜い、木の箱になッて居るのは空氣の流通が悪くていけませぬ、なるべくは鐵でそして足に車の附いて居るのが移したりするに便利でございます。

次は衣服でありますが、病人の衣服は着換へさせにくいものでありますが、やはり着換へさせねばなりませぬ、衣服を着換へますと皮膚が清潔になります、乾浴と稱へまして皮膚の汗、蒸發氣、垢などの不潔物を着物が取ッてくれますから身體がきれいになります、それで湯に度々這入れませぬ病人にはことに入用であります、サバ〳〵したものと始終取換へねばなりませぬ、それは起上る病人なら譯はありませぬ、唯寒い時は温めて着換へさせるやうにし、着換させる時刻も朝夕の寒い時でなく日中を撰ぶといふやうにすれば宜いのでございます、又上半身だけ扶け起すことの出來る者は先づ上半身だけ着換へ直に之を仰向にねかせて

後、足の方に回ッてよく前を合せ着物を伸して十分工合よく整へ、それから細い帯を締めさせます、シャツや股引のやうな窮屈のものは一切脫がせねばなりませぬ、成るべくユックリしたものでさうして糊氣が無く輕く暖いものでなくてはいけませぬ、肌着は木綿かフランネルが宜うございますが、其上にきるものは粗末なのでも絹物が宜しうございます、老人は身體の力が衰へて居りますから、輕いものが宜いのでございます、又少しも起上ることの出來ない病人は左右半身づつに看換へさせます先づ右とか左とか一方の古い着物を脫して新らしい着物を着せ、次に他の一方を着せかへるやうにいたします、それから又汗を



掻いた後はサッパリしたものと着せかへるがよろしうございます、さもないと皮膚に汗が潤ッて居ッて氣分が惡く、殊に風を引きやすい。

それから夜具は輕く軟くて暖いものがよろしう在います、昔は釣夜具と申すものがございました、繪などによく畫いてありますが、身分のよい人の用ゐたもので、夜具に金物が附いて居ッて上から釣ッてあります、是等も輕くするといふことに就てはよいことで在います、前に申しました通り下の蒲團に注意して暖にしますれば、夜具の方は澤山掛けなくても宜しいのでございます、

次は食物でございますが、病人の食物と云ふもの

は分けてしますと、常食即ち普通健康の人の用ゐる食物、消化性食物即ち消化し易い食物と、それと液體食物とこの三つに分けられます、それで病氣の種類に依つて醫師がドレとか決めて命じます、老人でございますれば假令常の食で宜いとお醫者が言はれましても其常の食に氣を付けねばなりませぬ、消化力が餘ほど衰へて居るものでありますから、十分に食物を軟にせねばなりませぬ、さうして味を能く整へまして、其老人が平生好むやうにせねばなりませぬ、易消化性の食物は細かく刻んだ牛肉とか鳥肉とか刺身とか半熟の鷄卵とか粥とかそれ等の類であります、それも今申しました通り常の食と同じやうに調理に十分注意するのでございます、それから液體食物は牛乳とか粥汁とか葛湯とか水飴とか生鷄卵とか云ふものであります、それ等も醫者の言に從つて其範圍を超えないやうに致します、それからソップは是は世間の人が牛乳と同じやうな滋養品と思つて居りますが、是はさうでございませぬ、ソップは唯食氣を付ける目的でお醫者が與へます、即ち此ソップを飲みますと病人の食氣が進んで來て腸胃の働きがよくなるといふ效があります、そこで一緒に用ゐた他の食品の消化が宜くなりますので其爲に用ゐるのであります、勿論それも必要でありますから、お醫者の差圖に從つて相當に與へねばなりませぬ、所が老人には牛乳の嫌ひの人が多い、病氣の種類によりては唯一の食物であるのにそれを嫌つて誠に困る、ソンな折は與へないでも宜いかと申しますにそれはいけませぬ、平生は勿論嫌ひな人にすゝめるには及びませぬが彼樣な折はどうかして飲まさねばなりませぬ、それには珈琲とか又は紅茶などを入れます、それから夏ならば氷の

缺けを二三回入れます、さう云ふやうに致しますと大層飲み能くなりますから、大抵の人は飲むものであります、食事の度數は三回と限ッたことはございませぬ、少しづゝ一回でも五回でも用ゐさせて宜い、すべて面倒を厭はず、しなければなりませぬ、例へば怪我などをした時で別に身體の悪くない折などは、香の物が食べたいなど云はれる、ソンな時に刻むとかたゝくとかドウか口にあふやうにしてすゝめる、只これほどのことで老人は大層喜んで其心遣ひを嬉しく思ひます、病氣のときの食物の世話は大切でありますから、常のことは下女にさせましても、病人のことは主婦とか娘とか云ふ者が手を下して別に拵へねばなりませぬ、さうして食物の温度も餘り熱過ぎませぬやう又冷えすぎぬやう氣をつけねばなりませぬ、これは食物の消化の上からも大切でありますし又折角病床に持ッて行ッても熱ッくて口が附けられぬやうでは病人がガッカりします、時間は外の人の食事時間より先きにしまして、晝ならば十一時頃に病人に上げて御世話をして其後に外の者が食べるやうにするが宜しうございます、さうして食事の折には起上る者は能く扶けて起上らせて白い、清いきれを胸から丁度子供の油屋さんの様に掛けて、假令食物を滴しても着物を汚さぬやうに用意をしておくが宜しうございます、又ズッと寝て居ッて起上れない者には口が長くなッて居る吸飲みがありますそれを用ゐます、さもなくば急須のやうなものを代用しても宜いのでございます、或はコップに牛乳などを入れて硝子の管で吸はせるやうなこともあります、或は看護する人が匙でたべさせてあげることもあります、其時は少し横を向かせねばなりませぬ、氣道に食物が這入ると大變であります、

もし肺にでも這入りますと肺炎が起りますから、さう云ふことのないやうに氣を付けねばなりませぬ。

（未　完）

挿花の話

小細いく子

今に初めぬ事ながら、月日の立つは早きもので、其折々の花につきて御話致し來りました事も、數多度重りましたが、まだなか〳〵盡きませぬが、いつしか年も暮れて、はや新き年をむかふる事となりました、ところで今度は少し新年の花につきて少し述べやうと存じます。

一體新年の花と申すと、やはり「祝義の花」の一部である流義などによると口傳とか何とか申して別段に傳授料を取る樣な都合になりて居りますが口傳など丶申た處で、別な事もない、唯めでたく行末の榮えを祝ふ心持を見せる丈の事に過ぎないので、花の種類には松、槙其他眞木などの樣な常盤木より草では萬年青の樣な、ときはにかはらぬものや、瑞祥なものと世に認められた梅や竹の如きものを多く撰び、形式は眞行草の眞ともいふべき本花を上乘とする迄の事であります、而して挿すのにも無理のないやうに、多少の麁忽な障害に出會ひましても直に倒れたり、くづれたりせぬ樣に丈夫に挿し、なるべく大ならぬ方が保存の上に宜しうござゐます。全體床の上の花には、懸軸と大に、關係がありますから是に注意を要します事は此話の初に於きまして度々申した事でありまして、大約それほどの事は誰れでも知らぬ人はないのであります。それを口傳とするのは誠に可笑い事と存じます。

そこで祝義に用ひます花は前申す通りいろ〳〵ありますが、時候のものでありますから、先づ梅について御話し致さうと思ひます。

新年の床飾に苔むした古木の白梅を挿して、長閑けき人の心より笑ひ初めたかと思ふ樣に、若き枝の蕾か二三輪咲きましたのを、程よくあしらひたるなどは、所謂、香冷にして塵埃を隔つる趣が見えて、恰も高節の士に接する感があります。

梅

梅は百花の魁、雪中の君子または好文木など、昔より種々詞を盡して賞揚してある木でありますが實に霜雪の苦に堪へて凜然、清香を放つ所は、他に比類なき名木であります。花といひ香といひ、殊に枝ぶりの面白き事、氣品は高く、變化は多く挿花の方に於きましても、是程の材料は多くありませぬ。

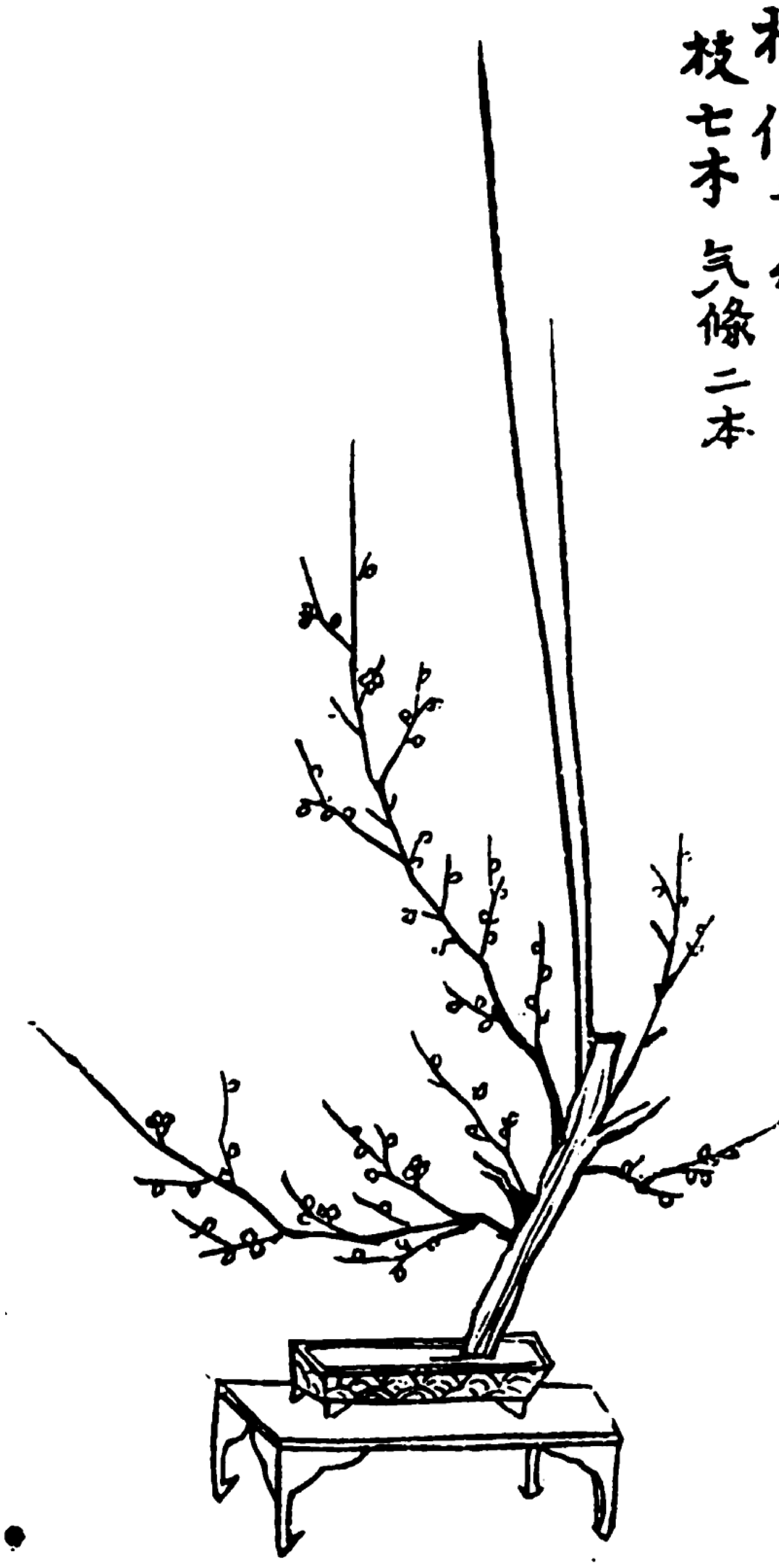
是は天然の變化の多き木でありますだけ、挿花の形式に於ても、あらゆる變體に用ひて適せぬと申す事はありませぬ。本花は勿論諸種のながし、二種挿、三種挿、水潜などいふ形もありまして、實に珍らしき好材料であります。

凡て挿花の法は何にでも同じ事でありますが、殊に梅は天性風韻ある木でありますから、可成天然に出來たる枝を撰び、人爲を加へても其痕跡の見えぬ樣、其氣骨ある特點を損せぬ樣にと、人工の枝を以て之を補足する事につとめねばなりませぬ其内にも白梅と紅梅、老木、若木とによりて又多少の注意など必要であります。

若木は枝がのび〳〵と勢よく、老木は其氣骨稜々たる所に特有を存じて居り、白梅の清きと、紅梅の艶かなるなどは、枝の振りまで明なる差別

を見出せるのであります。そこで氣品の點をいへば、老木の白梅に過るものはありませぬ。さればとて若木の紅梅も艶麗なる所が味ありて、決して捨てたものではありませぬ。前者が白髯の君子ならば、後者は窈窕たる處女の趣があります、そこで挿方にも此心持で挿さねばなりませぬ。又次に述べたきは、氣條であります、氣條とは能く梅の木の大きな枝の所より突然と芽が出まして、長さは一間以上にも及ぶものであります。此氣條はよく利用すれば極めて趣味あるものであります。少しく立て難き感はありますが、それも熟練すれば譯もない事で、氣條を長く用ゆる程が手際であります。然しこれは大木を挿す時で小さき時に用ひてはなりませぬ。それを自然に背く嫌があります。又これを用ゆるは二本殆んど平行に眞直に立つるのが、從來の慣例であります。必ずしもそれに從はねばならぬ理もありませぬが、併し是れは經驗上最もよろしき

梅　低なかし
枝七本　気條二本



形式であります。梅は前にも申した通り、いづれの形式にもなりますが、特に「水潜」に至りては梅以外に余り用ひませぬ形式であります。此水潜りと申すのは岸にある梅の枝が水面に垂れて、一旦水に入り、再び水面に出た形を示したものと、理屈がつけてありますが、要するに「高ながし」の枝が長過ぎて、花器に沒せらるゝ様なのを、再び水を潜らせて出したものでありませう。そこでまづ此形式は梅の特有であると見て差支へはありませぬ。

楊 布花 七本



楊

楊と柳とは倭訓では共に「やなぎ」と申しますが只今申しますのは、春風に靡きよる柳の事ではなく、芽か花か知りませぬが、兎に角白き光澤のあるものをつけた水邊に多き楊の方の事で、私共は、俗に「川やなぎ」と申し馴れて居ります。又地方によりましては、めの子柳とも、亥の子やなぎとも、猫やなぎとも申します、凡ての花に乏しき冬季、

殊に冬枯れの景色をそのまゝの枝ぶり、實に面白い然し其淋しき處に味があるのであります。まことに矯め易ひ木でありますから、初學の人の稽古には最も適して居ります。さればとて初學の人に宜しいからと申して決して挿易ひ木と申すわけではありませぬ。何分にも枝も少なく葉もなきものでありますから少しの無理も出來ませぬ。矯方などの惡しき時は實に苦見しきものでありますさて挿わげた形式は矯めのきくものでありますからどの樣にでもなりますが、矯め方に心を用ひぬと艶めかしくなりて、本性を失ひ易く、又枝との間に隙が見え、又根のしまりもわしく、容易にとまらぬもので、此花程其手際の分明る花はありませぬから、決して馬鹿に出來ない花であります。ながし物にもよろしいで、殊に二種挿には至極のものであります。此柳の枝のよく立のびたのを、篠柳と申して、全く小枝もなく只一本の篠の樣なるを切り取り挿すことがあります。是は枝もなく葉もなく、只一條を幾本も挿して花形を作るので隨分むづかしきものであります。殊に初學の人の練習になるもので、常に貯へて置きて、七本、九本、十一本と例の奇數を以て漸々に數を増して挿すやうに致しまするど、其内に自ら枝の配置長短を初め、根の切り合せ、矯方の工風など、細密なる注意を得るやうになりますから、必ずこの川柳で充分練習するやうに致し度ひものであります

（つゞく）

裁縫

横濱高等女學校教師　中村むめ子

一つ身を仕立つる寸法

袖付　三寸五分以上五寸迄　袖巾　五寸以上

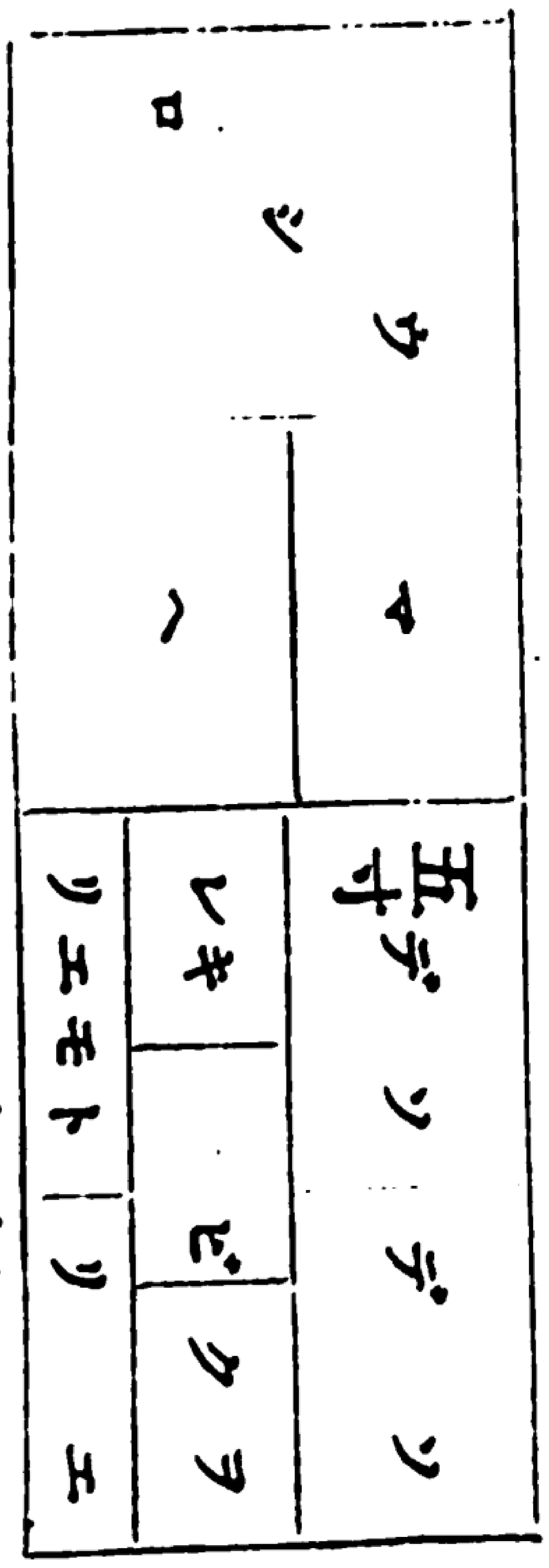
身八ツ口　二寸　身巾前後　一ぱい
抱巾　三寸五分　衽下り　二寸五分
衽巾　二寸五分より三寸迄　裾下　五寸迄
衿巾　九分內外

同單衣裁方順序

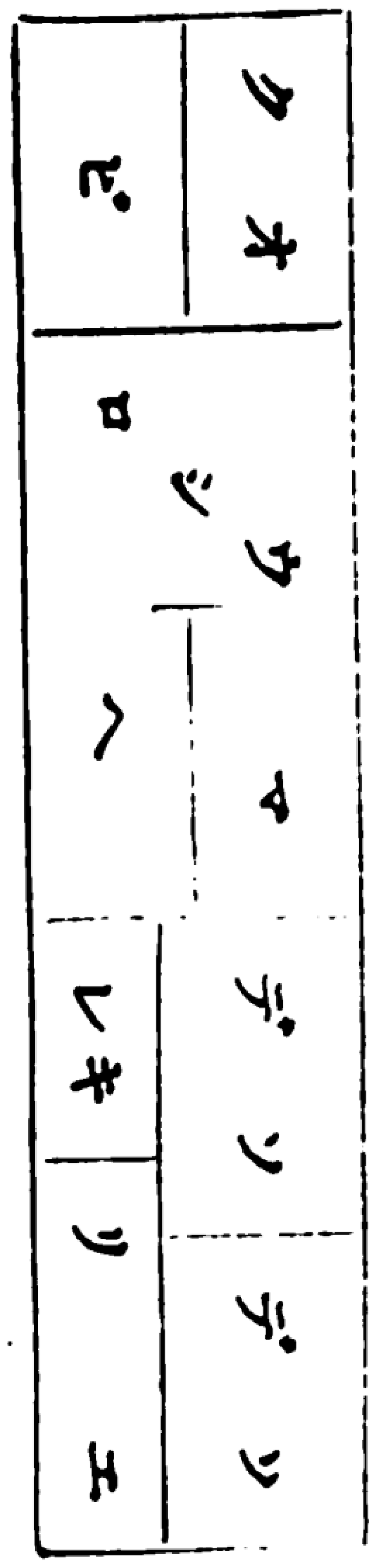
先づ袖を取りまして、袖口切を向に合せ、袖口切を少しつる加減に待針を刺しまして、其處を縫ひます、折は袖切の方に返します、次に袖下を袋縫にしまして、それから袖ふきを少し出しまして躾をかけます（袋縫を致します時に、袖口切の下になります處と、八つ口の袖巾の折ます處とは、最初縫ひ殘して置きます、これは縫端の高くならぬために致します）袖口切の絎付けます方へも躾をかけして、針目は三分位にして表に出る針目は極細かに絎付けます、出來ましたらば下に置きまして袖巾の印をつけ振を耳絎に致します、次に衽を出しまして竪褄を三つ折にして絎けます、そして衽先は卷き縫をして置くのがよろしうございます、次に身頃を取りまして、襟肩を卷縫ひにして出來ましたらば、身巾の印の通りに、上前は下から、下前は上から脇を縫ひまして、折は前身頃の方に返します、脇縫に縫込の多くあります時には、開きましてかくし綴ぢをして、其端を身頃に綴ぢ付けます、次に袖を付け折は袖の方に返し、縫込がありますれば、綴ぢます、次に前巾と抱巾の印を付け、衽と揃へて待針を刺しまして、衽はどちらも下から付けます、折は衽の方に返します、次に裾を巾二分五厘に三つ折にしまして、針目を三分位にして絎けます表に出る針目は細かにするのです、それから衿を付けまして折は衿の方に返し、衿巾の印をして衿先は、一分中を縫ひまして裏の方に返し、三つ衿に切を入れて、下前から絎けて

行きます、それで出來上つたのでありますから、疊んで置くのです。

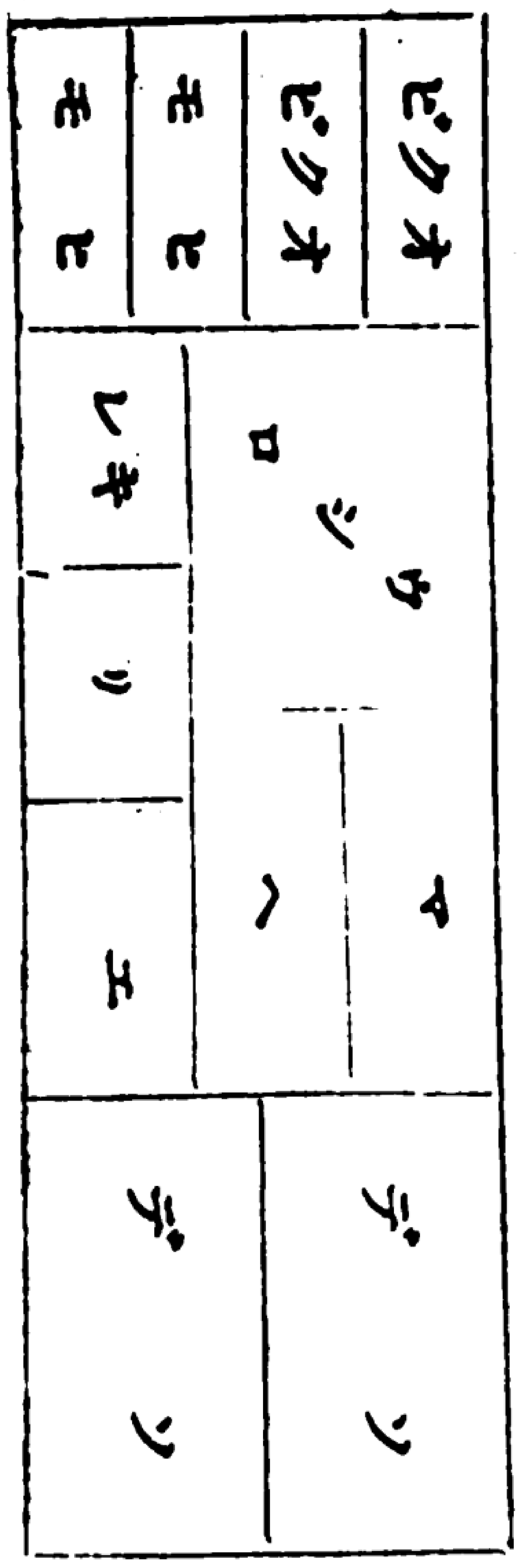
(一)並巾一丈の布を以て、一つ身の裁方



(二)常巾の布を以て、一つ身別衽裁方



(三)中巾の布を以て共紐付一つ身裁方



だいどころ

惣菜種々

石井泰次郎

◎黒豆の煮やう

黒豆の煮やうは左の手つゞきにて試むべし。

(第一)黒豆のよろしき品質をえらびて、ちりをさりて、水にて洗ひて晝夜水に漬しおくこと。又は一夜のみひたしおきてもよし。

(第二)右のひたしおきたる豆を、鍋にうつして、湯煮する事三時間以上

(第三)三時間以上したしたる豆を味をつくるにさきだちて、先水を五六度もかへて煮るがよし

(第四)さて味つくるには、砂糖を豆一升に二百匁

ほどを量として、其多少は心にまかせてよし、これにて煮てむべし

《第五》右の如く砂糖を入れ、水も三四合ほど入れて煮てむべし、時間は二時間を要す火は急火ならぬがよし

《第六》味をつけて煮たる豆へ、煮あげに至りて、鹽四匁ほどに入るべし

うづら豆は、一夜水に浸しおきて、翌日湯煮する事三時間ばかりして、味を砂糖にてつけて煮るべし、約一時間ほどにて煮らるなり

◎蠣あへ物拵方

蠣のよろしきを、むき身にして、串にさして炭火の上にかけて煮き、つぎに淡き醬油《かつを煎汁煮合せたるもの》にてざつと煮て、よく煮汁をたらして、黒胡麻を擂盆にてすりて《まへに焙烙にていりおくべし》又罌粟をもいりてすりて、これに味噌をすり、漉て合せて、山葵をすりおろして入てあへものにすべし。

◎蠣の吸物拵方

鍋に鹽をいりつかして、其鹽をとりさりて、つぎに蠣を二つ三つ鍋へ入て、木杓子にておしつぶして、他の蠣を入れ、水ひた〳〵にして一泡煮たてゝ前のいりたる鹽を加へて、又醬油少しをくはへて煮るべし、又酒少しさすべし。

◎鹽魚のかきあへ拵方

鹽鯛か鹽だらかを、能々あらひて、鹽を出して、うすく差味のやうにつくりて、水にてふたゝび洗ひて、かつをぶしをあらく削りて、ひとつにませ合せて、いり酒に酢をすこし加へて、又水を少し入てあへものとすべし、煎酒とはいろ〳〵の仕方あるものなり、其一つをあぐれば

酢に梅ぼしの肉、酒、かつを煎汁等をよきに調

合して鍋によく煮たてゝ、馬尾篩にてこして鹽を加へて、又煮かへし味を調ふるなり。

◎芋の煮やう

里芋を煮るには、始め切りて、之を煮ると、必ずぬめり出でゝ煮る時間ながくかゝるものなり、さればまづ丸のまゝ、皮をむきて鍋に入て煮るべしさて泡うけばすくひさり、又うけばすくひ去るべし、かくして湯煮したるを、串のほそきにて、さしてこゝろみて後に、やわらかくばとりわけて、それより、庖丁刀にて切形すべし、時間もかゝらずしてよく煮うるなり、これはおまりといふものもあるだらうが、こゝらが惣菜の要點でござる。





清國見聞談（承前）

阿多廣介

かくて私が上海市中で、奇異な感を起した事は、お婆さんが白粉や紅を付て花簪を挿して居つたり少き女郎は丁度顔を紙にして白粉や紅にて高き處を低くし低き處を高くし恰も繪草紙の如き飾りをなせると例の足を小くして千鳥足にて往來する裝でありました又四馬路の料理屋にまゐりますと例の官妓とか申すものが、黒塗の立派な馬車で往來し、或は四人擔の輿に乘つて、非常に立派にして參りますが、これらは知人でなければ、呼ばれ

ぬのであります、夫らが料理屋にまゐると、一時間位弦を弄して、キンキリ聲でチンプンカンを歌つて御酌も御愛嬌もせないで直ぐ歸るので無粋の私等には何等の興味も感せませぬで、ありましたが、而し日本の藝者などが、御轉婆でおしやべりで、衆人公座の前に於て、卑猥なる動作をなすよりも高尚である樣に思はれます。

又四馬路に茶館といふのがあります、其處は妓樓の引手茶屋みたやうな處であるさうですが、經驗のため見物に行つて見ましたが、之れは我邦で申せば停車場の待合や勸工場を合併したやうな有樣で、三階四階の建物のうちに遊冶郎が立錐の地なく雜沓してベンチの上に阿片を吸うて、ゴロ〱と寢て居りますと、其の間を賤業婦が通過して、御客を求める有樣でありまして、私は其の阿片の香と、醜體とを見るに忍びずしてハウ〱の體で歸りました。中以上の婦人には一朝一夕には面會も交際も出來ぬとの事で探知されませぬでしたが聞くに之等の人は余り外出もせず交際もせず夫は婬樂に耽り婦は無情を嘆じ小説を愛讀する位の事で可憐のものなりとの事であります。

米租界の内に野菜市場がありますが、其れは口繪の寫眞にある通りでして、大きな建築でありますが、午前は内外人が非常に雜沓して居りますが、晝後からは、其市場を閉ぢまして、清潔に掃除がしてありますのには感心しました。

(三)上海城内。上海縣城は一名を滬城と唱へて、むかし春申君の居城であつたさうです、黃浦江の西岸にありまして、周圍は三里位で、煉瓦を以て城壁を築き七つの門があります、毎日々沒後は門を閉ぢて、内外の交通を遮斷するのです。市街は兩側に二層の高樓が軒を接して遠方よりは

美觀でありますけれども、道路は僅かに一間半か、二間位で東京の日蔭町よりまだ狹い、店頭は晝も暗く、陰屈です、道路の上は石を敷いてありますけれども、凸凹が甚だしくて、ヲマケニ人糞やら、放尿やら、臭氣紛々として不潔なるは何とも申されませぬ而して其間を官吏は馬か輿に乘つて往來し殊に武人の行列は寫眞にある通りの不規律極まるものにて我邦の子供の戰爭のまねの方がましであります又歌妓は脂粉を凝し、轎に乘じて雜沓の間を揚々として、走らしてをります、肩摩轂擊應接に暇あらずといふ語がありますが、實に其の通りかと思はれます、且つまた苦力は、一輪車を後押して、貨物や人を運搬してをります有様は、何とも評の仕様のない可笑なことであります、それからまた城門の近邊には風水先生と唱へて賣卜者が頻に占ひをして居ります支那人は吉凶共必ず此の賣卜者に問ふて萬事を決行するそうです。

上海の人情風俗を申しますと、大概土人は勤儉で商業を重んじ、能く外國人に接し、大利を計り小利に安ぜず、汲々と營利を計つてをりますから、人情は浮薄で毫釐の事も、爭ふものですから、風俗は一般に奢侈で、虚飾を尊で、いはゆる上海ハイカラといふ仇名があります。私と同じ旅館に我邦に、留學したものだとて、一人り泊て居りましたが、甚ぞ生意氣で心あるものに擯斥されておりました。一般にそんな風ですけれども商業上極めて、秘密を尊んで、團結心が強いものですから外商に對しても、常に勝利を占るさうであります、言語は種々の言葉が混和して、一種の上海言葉といふものをなして居ります、而して上海に通ずる外國語は、主に英語でありますが、

夫れも大に轉訛してをります。

(三)十月廿九日午後五時に大東汽船會社の汽船に搭じて、黄浦江を溯り、嘉興、石門等の市街を經過して、十一月一日に杭州の武林門外の拱宸橋に着しました、其の船は二十三噸の小蒸滊船でありまして、引舟を七八艘も率いて居りました、乘客は百名もありましたが下等の支那人の船賃は八十里斗の間を七十錢で三食の賄をいたします、私は上等室を借り切りましたが、夫れでも六圓で二人乘りこみました、物價の安いことは凡それで御了解とおもひます、黄浦江の河幅は廣い所は二三百メートルもありますけれども狹い所は五六間の所もあります、處々に厘金局といふのがあつて、其處は支那内地の税關でありますが、我々外國人に對しては檢査も致しませぬが支那人には嚴重にします而して其保護の爲めに一種の軍艦が巡羅して居ります其れは長さ拾間ばかりで船の表に、元込めの大砲を据へて、青龍刀や大きな旗など列べ將軍は房内に阿片どもを呑んで、水兵がもつたいらしく櫓を漕いで行く有樣は實に滑稽であります、河の兩岸は廣濶たる水田若しくは桑園か麥畑で樹木は少く村落點々し水牛が其間に放たれ烏が角や背に止つて居る有樣は鳥獸までも大國の風があります、山と云ふ山は杭州に近いて初めて呉山と云ふ山を望みましたのみ、河は縱横に通じて南船北馬の意義即ち南清は船北清は馬にて交通するとの言は始めて實地に解決されました。(つゞく)

西洋婦人の新思潮と新事實

佐藤天風

△エダイスセラース嬢研究

セラース嬢は『老者に對する國家的設備の統計』

に於ては、現今該研究者間の大家たり、孃は曰く、妾にして、勞働によりて生活を營むの地位にあらしめば、妾は、妾が國籍を去りて、丁抹か、魯西亞か、或は墺太利に行かん、全歐洲に於て、此三國程、能く老者貧者を取扱ふべき道を知る國はなし、彼等の國に於て、家庭は實に老者を平安靜寧の地に置き、最も光榮ある最も愉快ある境遇を形作る也、丁抹は西曆千八百九十一年の法律を以て、六十才以上の老男老女は、國費を以て衣食住皆豊富なる供給を受くべしと宣告せり、是れ其老者が、壯年時代の榮譽ある勞働を表彰せんが爲めなり、之が爲めに同國の老者は、此の法律に向て、感謝と滿足の意を表したり、而して同國一人の平均生活費は、一日凡そ四十八錢餘なりといへば、英國倫敦の、尤も憐れなる勞働者の家にても、一日の生活費は平均して之れの倍し、而して猶は不幸なるは、是れ何の理由に由るか、魯西亞も大體之れと同じき也と、而してエダイス、セラース孃の此報告と、孃の描きし倫敦勞働者の家庭の圖とは、最も似つかはしき配合をなせりと傳ふ、予思ふ、婦人は最も能く同情に富めるものにして、斯の如き研究に、最も能く同情的研究をなすを得べしと。我帝國に於ける大方の婦人が、啻に慈善音樂會の類を以て滿足するなかれ。

△新聞紙孃の自傳

『新聞紙孃の自傳』とは、エリサベス、バンクス孃の近者著はせし孃の自傳なり、孃は今や齡漸く老いんとして此著あり、孃の此著述が、世界幾多の有爲なる婦人を激勵するや疑なかるべし、孃は其芳齡未だ若かりし時より、身を新聞雜誌の記者として激務に當り、今や男子も及ばぬ老練と歷史とを有するといふ、其功績と名譽とは光榮あるもの

として新舊兩大陸の間に喧傳し、婦人記者としては、最も偉大なる人ならんと噂せらる、孃の今回の該著述は、孃がタイムス新聞に送りし書と共に、能く其婦人的特質を發揮し、優雅にして愛嬌多く、實に尊重すべきものなりといふ、純粹なる亞米利加氣風の紳士淑女は、皆孃の愛讀者にして、之れ孃が、諷刺的態度を以て、而もよく流麗の質を披瀝して、社會の間に立つが故なり、『新聞紙孃』の自傳は、廿八章より成り、新舊兩大陸に於ける孃の勉勵刻苦の狀は、頗る熱血燃えんとする情筆によりて描かれ、然も全篇通じて、孃獨特の氣品を以て横溢せり而して實に孃は、今に至りて少しも幼少よりの特性を失はず、故に英米の婦人は非常なる熱心を以て該書を歡迎し、愛讀措かざるなり。是れ現婦人界の思潮が、然らしむる處なりとは云へ、亦孃の思想が、健全にして其生涯が、名譽を以て蔽はるゝ處あるを以てなり。

△歐洲列國各皇室の不幸

故白耳義國の皇后陛下が、常に皇帝陛下と不和にして、一生を不幸に送らせられしは、各新聞の傳ふる所なるが、皇后陛下崩去の際、現皇帝レオポルド陛下が、其間に生れし唯一の皇女ルシャーイ伯爵夫人(元は皇女クレメンチナ)の其棺柩に向つて哭泣せられし間、自ら拒みて、其室に入らせられざりしといふ、レオポルド陛下は、庶子數人を有せらるゝが、其承繼者たる嫡室の子孫は、クレメンチナ皇女を外にして、一人もなしといふ、皇后陛下の崩去は、昨年九月なるが、六月以後には、更に新后を迎へらるゝと傳ふ、而して記す、同皇帝陛下御齢は、現今已に六十八歲に渡らせらる、之と同じく女性に關しての各列國の皇室は、普魯西亞皇帝を除きて、皆一樣に不幸を有せらるゝ

が如し、西班牙皇帝陛下は、未だ皇后なく、魯西亞皇后は、其室に皇子なく、且つ和蘭の皇后と共に同じく、後來產兒の見込なしと、而して墺太利皇室には子孫なく、以太利皇室には一の皇女あるのみ。セルビヤ王にも王子孫なきは、一樣に奇といふべし。

△外人の帝國批評

駐暹亞米利加公使ジヨン、バレツト氏曰く、日本は、亞細亞に於ける學校教師なり、歐人は亞細亞に、獨占的利益を壟斷せんとする間に、日本はよく己れの事は己れ自ら爲し得るに至るべしとの方針を亞細亞大陸諸國に教ふと、氏は支那朝鮮暹羅に於ける實例を引證して之れを明にせり、兎に角、かゝる批評を受くるに至れるを以て、我國民も憤發する所なかるべからず、殊に近來女子留學生の支那朝鮮より來れる者も少なからざればなり。

△ダッチエスの婦人論

サヾーランドのダッチエスは、婦人を論じて曰く、吾等は新なる默示を得たり、新に來るべき救世主は、婦人と名くと、更に論歩を進めて曰く、科學的に云へば、女子は常に豫言者帝王英雄男子の母なり、故に母としての婦人は、世界文明の生命を握り、世界歷史の樞軸を制す、故に婦人は、あらゆる一切の者に始を與ゆるものなりといふべし、若し科學の天職が、調和を作り正義を企つるにありとすれば、科學がかく婦人の位地を確むるは、婦人は男子と同一なる心的發達をもてるが故なり、而して婦人の地位は、理想的社會國家の調和を保つにありと、更に又一歩を進めて曰く、今や婦人は不利の地位より去りて、正に自由の天地に飛躍すべし、自由は婦人の前に展開すべきものたらずんばあらず、男子が女子を命令するの閑日月

は、今や更に、有益なる方針に向て用ゐられざるべからず、宜しく婦人は、婦人自ら其安全を計るべし、人は恐によりて躊躇す、躊躇なく社會の上層より、婦人は下層に墮落を救ふが爲め、其偉大なる勢力を貯ふの時期は、現今より更に宜しきはなかるべし、要するに女性は、性に於て男子よりも損なる處あれども、然も我等は現今の地位は、以て甘んずべきにあらずと、之れ我國の女子には、未だ不適當なる説あれども、又一面の眞理なきにあらずと思ふ。

百人一首及歌賀留多の由來（つゞき）

櫻井雲軒

貝おほひは一に「歌貝」または「貝合せ」と申しまして、婦女子の遊戲で御座いました、平安朝の中頃から末頃にかけて起りましたので、源平北條足利代まで通して行はれたやうです、それから戰國時代へかけましては、兵馬倥偬の世で御座りましたから、一般には行はれなかつたでしようが、稀にはありましたやうです。

山家集の下の巻に

いまぞしるふたみの浦のはまぐりを、貝あはせとておほふなりけり、

と云ふ歌がありまず通り、蛤の貝を二つに剖きまして、片々つゞ歌を書いたものです、即ち片方へ上の句、片方へ下の句を書く、又贈答の歌である時には、片方へ贈の歌、片方へ答の歌を書いたもので、これを「ついまつ」と申しまして、又續松とも書きました。

山家集の歌は夫木集の雜廿五の所にも見えて居り

雜録

ます、平家物語には

をりしも御遊びのほどなりければ御前へまゐりて御かひおほひなどしてあそび給ひける云々

と見えてありますし、増鏡五巻うちの丶雪の條にも

らんこ貝おほひ、てまりへんつきなどやうのことゞも、おもひ〳〵にしつゝ日を暮し給へば云云

とあります、また貞丈雜記に、貝覆の遊其始詳ならず、源平盛衰記五の巻に、入道殿福原御下向の御留守に、君達會合して貝覆の御勝負也、云々とあるを見れば、其始りは猶昔の事なるべし、とあり猶御湯殿上記にも見えて居ります。

扨其方法は如何するものであるかと云ふに、前いふた「ついまつ」を、三百六十位集めます、勿論偶數で、先づ下の句の貝だけ集めて、誰か上の句を一つ中間に置いて、周圍に下の句を並べて置き、そして上の句と續くべき下の句を見出した時に、その貝を上の句の貝の上に被ふ、贈答の歌であれば、贈の貝に答の貝を被ふ、斯様にして其數の多いのを以て勝とするので御座ります。

大槻文彦先生は此の遊び方を次のやうに申されてあります、

三百六十の蛤殼を「地貝」(續松のこと)と稱し、悉く塲に並べて中央に空所を置き、一片の貝を「出貝」と稱し、一個づゝ出して空所に置き、衆圍み座して「出貝」と「地貝」と相合ふべきものを認めて、これを合す、合せたるもの多きを勝とす、

とあります、即ち、出貝と云ふ方は上の句なり、贈の歌なり、若しく下の句が、答の歌のでも、中央に出されるのを申すので「地貝」と申す方は被

ふせる貝の方を云ふのです、徒然草に次のやうなことが見えて居ります、

貝をおほふ人の、我まへなるをばおきて、よそを見わたして、人の袖のかげ、ひざの下まで眼をくばる間に、まへなるをば人におほはれぬ、

と云ふので見まするとと、前に述べました仕方と反對に、即ち「出貝」に「地貝」を被ふのでなくして、地貝に出貝を被ふやうです、或は斯ういふ趣向を變へた仕方もあつたのでしよう、それは丁度今日の歌加留多の仕方に、種々あると同じように、又鼻毛を拔くと云ふ事にあつたと見えます。この遊びはまた源平時代の戰略上にも應用せられたやうで、源平盛衰記などにも「ひがしの國々はみな源氏にしたがひて、あまたのつはもの貝をふせたらんやうに野山にみち」など云ふ事がありましたやうです、空穗物語にも

けだもの猶貝をふせたらんやうに、おなじ上に立ちこみたるに、同けだものと貝とふせたるやうに、道しなければわけ煩ひて

など見えるのを見ても知られます。

此の樣に平安朝の中頃から行はれ初めまして、殆んど德川の初めまではあつたやうです、其仕方などにも種々あつたものでしようが、古くは各個に單獨に行つたもので、組に分れることは、後世に發達したのでありましよう、例へば東西に分れるとか、源平に分れるとか、今日行はれる加留多取りの方法のやうなものは、全く後の方法であらうと考ます、何故に一人つゝ取るのが古風であるかと申しまするに、それは起りの目的が單獨的のものでありますからで、これは後に申します、それで又勝者敗者にはまた夫々の賞罰の制もあつたのでありましよう、何故ならば、此遊びなどに附隨

して、賭け事に類することが盛んに行はれ初めたと云ふ事を以ても知れるのであります。

右の様に鎌倉の末頃までは、一體に貝を用ゐたものでしたが、後には紙を用ひるやうになりました、けれども武田信玄の遊びの時には、まだ貝を用ゐたさうですから、二通りあつたのでしたらう、併しこれが全然紙になつた時代は、何時頃であるか明かに分りませんが、多分は織田豊臣時代でおつたらうと考へられます、紙を用ふるのは質の厚いのを□の形に切る、丁度將棊の駒の形に切りまして、これを貝の形に似せました、そして上の句下の句又は贈答の歌を書いた事は、以前のまゝで、其方法も同じであらうと考へます、この頃には多く團體として戰ふ風が起つて來たやうで御座います。



處が將棊の駒の形をした紙片が、今日のやうな□形になりましたのは、天正年間のことで御座ります、それは此頃初めて英國船が我國へ參りました時で、其中で乘組員がトランプをして居つたのを見た、それで其トランプに用ひる紙片が□形をして居るものですから、其形をとり、其をカード（Card）と申します所から、邦人の口眞似が訛つて、カルタ（Carta）となりましたので、初めの駒形の紙片も、このカード形に改まつたのであらうと思はれます、其からして加留多など、六ケしい字を書くやうになつたので、起源は即ちカルタ

と云ふ詞が舶來したと同時に、以前の紙片の形も變つて來たと見て差支ないのであります。

初め貝おほひの起りました時分を考へますと、平安朝の半ば頃で御座いましたから、世の中は一般に太平無事で、吹く風も枝を鳴さぬといふ時代、京師の大宮人は櫻かざしても春の日の暮れ易いとかこち、月に浮れては秋の夜も明けやすいと嘆じた頃でありましたから、自然に色々の技藝の發達するやうになつて、殊に遊戯の法などは盛んに閑人の間に研究されて、世に出されたことゝ思ふ、即ちこの「貝おほひ」の起りなども、それからでありました、是れは唯一片の慰み許りでなく、つまり遊びながら古歌を暗誦しやうと云ふ方便の上の目的から起つて來たのであります、其故に一方では古歌を暗誦して以て文才を練るとか、若しくは交際場裡に馳走するとは云ふこと、乃ち學術的社交的の方面からと、一方では唯ほんの慰み半分に交際の方便としての、即ち娯樂的又社交的との兩方面から起つたものであると思ふ。

でありますから、平安朝の女子の交際上の知識として要する種々の技藝は澤山ありますが、今一々上げ切れませんが、女子が盛に才能を振つて、男子すらも女性化せしめたこの平安朝の時代でありますから、凡べての遊戯法などが女子に依つて生み出されたと云ふことは明かな事實であります。

で初めは、勿論百人一首とばかり限られたものではありませんで、或は伊勢物語の歌であるとか、或は源氏物語の中の歌であるとか云ふやうなものを、前申しましたやうに、三百六十も持つて遊んだのです、尤も數には判然と規定はありませんで、此三百六十と云ふのが或は標準となつて居つたかも知れません、其が天正年間になりまして、

數の適當な所から、百人一首が盛んに行はるゝやうになつたのであります。換言して見ますれば、百人一首が歌道の大立物であつた定家の撰であるのと、數の丁度よいといふ二つの點からして行はれ初めましたので、天正年間は、歌加留多が形式に於ても、實質に於ても、何れも變遷した所の時機であります。

天正年間は今から三百二十年許り前で、信長の末頃です、信長の時には初めて西班牙人の耶蘇教宣教師が參りましたことが御座いますから、或は此時來たのでしよう、一說に寛永の頃（今から二百七十年程前）に、阿蘭陀人これを翫び、長崎港の人民が倣つて戲とした と云ふ事があります、またカルタと申します詞は、西班牙語で牌又紙といふことであるさうですから、前に述べましたカードと同じであります、兎に角舶來した言葉であると云ふことは明です。



今日の百人一首歌加留多の使用法は色々ありますが、これは讀者諸姉の御承知になつて居ることで御座いましようから、今茲にくだ〳〵しく申し述べる必要もあるまいと思ひますから省きます、

世間に伊呂波端歌加留多と云ふものがありまして、子供がよく玩んで居ります、これは歌ではなくつて、伊呂波を頭字に取つて、格言めいた俚諺を書いたもので、四十八枚はどです、此れの起源は、形式は以前からの歌加留多の系統を受けたもので、實質は極めて平民的な傾を持つて居る所から見ますれば、元祿頃から

享保頃までの間(今から二百年ばかり前)に起つたものと考へられます、又花合せと云ふ遊びもよく似て居りますが、是れは述ぶる必要がありませんから止めて置きます。

(完)

黄金の山つと(つゞき)

文學士　濱田紅於

(二)金華山の名稱に就て

金華山は陸前國牡鹿郡鮎川村に在り、地誌の傳ふる所に因れば、往古陸奥山と稱し、延喜の時黄金山と改め、後又金華山と稱して今に至ると、予ここにこの名稱に就て、愚見を披陳せんとす。

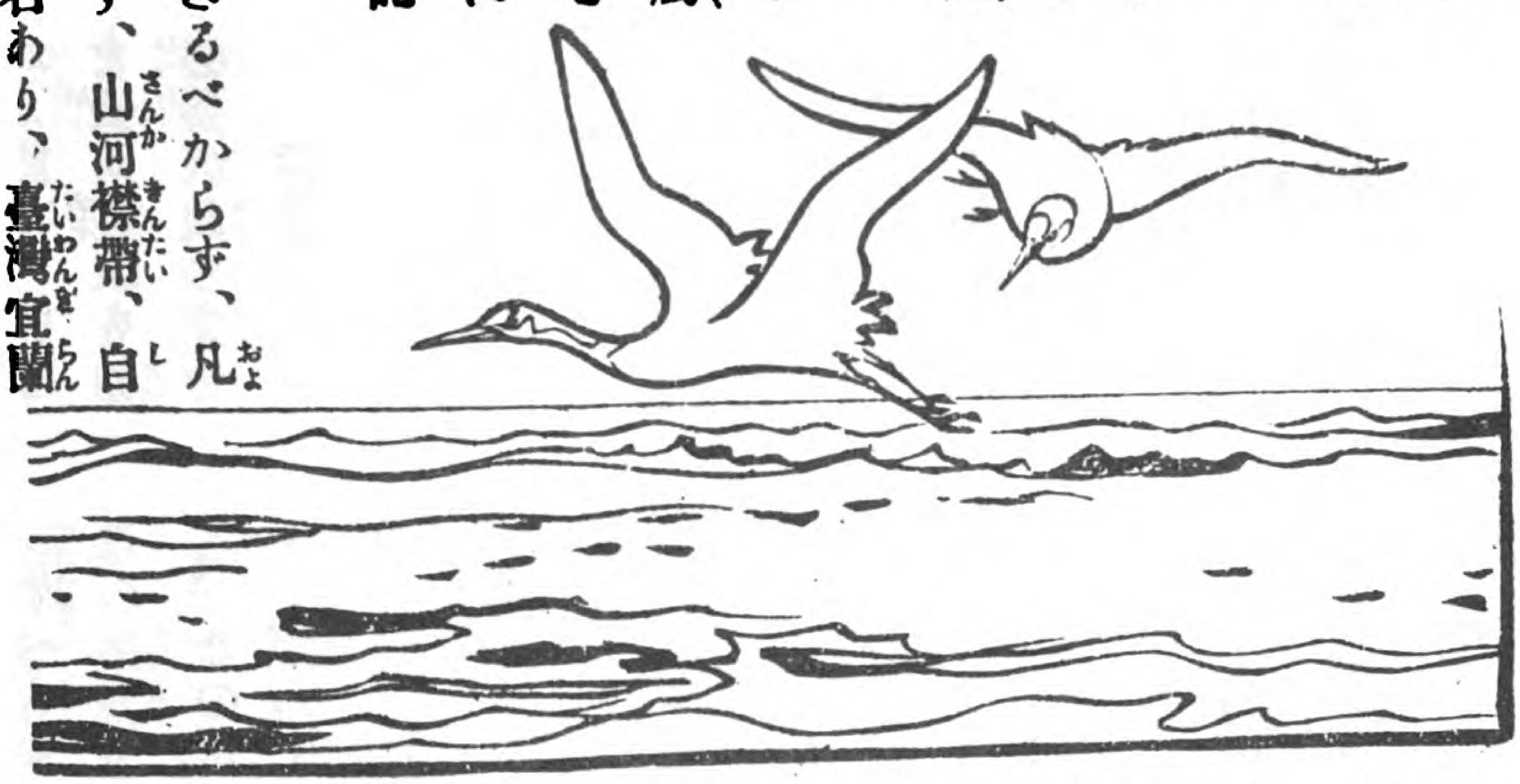
抑も往古此山を陸奥山と稱せしといふ傳説は、聖武天皇天平勝寶元年、陸奥守百濟敬福、始めて黄金を献げし時、大伴家持短歌一首を奉りて曰く、

すへらきの御代榮へんと東なる
　陸奥山に黄金花咲く

と、この短歌より起りしものならむ、然れども試みに金華山を探險せよ、その鑛坑の遺跡那邊に存ずるや、金島の名稱が因て起りし程なれば、必ずや靈跡として保存すべき筈なるに、その位地の傳説すら聞えず、疑ふべきの甚しきなり、思ふに陸奥山とは、或一つの山岳を指示せし固有名詞にあらずして、唯陸奥に在る某山と云ふ意味なるが如し、又黄金山と稱せし時は、延喜式にも黄金山神社の目あれば、信據し得べしと雖も、延喜の時代に改名せしとは肯んじ難し、既に式に此目ある以上は、その以前より斯く稱せしこと明なり、私に思ふに、家持の和歌の前書には、みちの國小田といふ山にて、始めて金を掘り出せし時とあり、古の小田は、今日の遠田郡なり、遠田郡涌谷町に黄

金山神社あり、その傳說は全く金華山のと相符合せり、日本名稱地誌には、金華山の故事の誤り傳へしものなるべしと云へど、予は反てこの山を以て、より實らしきものとなすなり、予これを鮎川村長に聽く、鮎川の北一里許にして、金坑の跡あり、今は採堀を止めて放棄せりと、鮎川は今牡鹿郡に屬すれど、古は此地も小田郡に屬せりき、只その採掘の年代を聞くに及ばざりしを恨む、姑く異聞を記するのみ。

然らば金華山の目の由來を考へざるべからず、凡そ地名は偶然に起るものにあらず、山河襟帶、自然の城郭をなすを以て、山城の名あり、臺灣宜蘭



の周圍には、芎窮繁茂するを以て、別に九芎城の名あり、金華山の濱邊に露出する水成岩には、無數の雲母附着し、日光に映じて燦爛たること、宛も金色の花の爛熳たるが如きを以て、この山の名稱も、蓋しこれより起りしにあらざるか、而して後人家持の歌に黄金花咲くとあるに附會し、以て黄金の產出所となしゝが如し。

黄金山神社の祭神は、金山彥命金山姫命にして、倶に伊弉諾神伊弉冊神の御子なり、文字の上より解釋すれば、倶に鑛山を掌る神なれど、記紀倶にその事迹を傳へず、唯一神の降誕の景況、寔に珍とすべきも

のあり、古事記に曰く、

次生ニ火之夜藝速男神一、亦名謂ニ火之炫毘古神一、亦名謂ニ火之迦具土神一、因レ生ニ此子一、美蕃登見炙而、病臥在多具理爾生神名、金山毘古神、次金山毘賣神、

と、多具理とは嘔吐なり、予の管見この二神に關する智識は、此外に有せず、頂上の奥院には、綿津見神を奉祀す、即ち海神なり、古事記に曰く、

次生海神名、大綿津見神と、この神は綿津見國君にして、彦火火出見尊笠狹岬に釣して針を失ひ、これを尋ねて綿津見國に入り、如魚鱗所造之宮室に至りて、其國君の女豊玉姫を娶り給ひしことは、紀記に載する所なり、念ふに西南海上の島嶼なるべし、亦字義を解して海上鎭護の神となし、これを山嶺に祭る、參詣者の海路安穩を祈る意に出でしなるべし。



（三）鮎川の一夜

鮎川は牡鹿郡牡鹿半島の極端に位し、荒涼たる海濱の寒郷なり、戸數百餘、わが一行の大に至るを聞て、里人目を瞠り、口耳相私語するを見る、村廳を訪はんと欲して、野徑をたどるとき、村學の豎子一人あり、予を橋上に要して長揖す、噫鄙人樸直仁に近し、黄塵萬丈の都門、上を凌がざるもの幾かある、若し予に煩累なければ、速に僑を脱俗の郷に遷さむ、かくて村長を見て名勝を求むれども、ゆかしげなるものもなきまゝに、肋骨先生と共に野もせを行吟す、秋風しげみ、川添柳枝短かく、

葦蘆葉枯れて、野孃連りに鮒魚を漁るあるのみ、やがて日暮れて冷月海波を照らす、一陶の村醪に微醺を沽して、赳々たる武夫と膝を一堂に交えて、談論横生詼謔百出、衣手の寒きに驚きて、夜のやう〳〵更くるを覺え、即ち寒閨に偃臥して、莊叟の跡を追はんとすれど、謖々の音、蕭々の聲、耳に充ちて眠成り難し。

都いでゝ幾日もあらぬ今宵だに
かたしきわびぬ床の秋かせ
東關紀行

といへる古歌さへ思ひ出でゝ、あはれいとゞ深し、又かの阿佛尼が歌など思ひやりて、その心ねをしのびつゝ、そゞろ涙を催しぬ、十六夜日記に、

おぼろなる月は都の空ながら
まだきかざりし浪のよる〳〵

これは子故に迷ふうき旅、われにはいまだ子なければ、燒野の雉子、夜の鶴の情は知らずて、よしなきすさびに、みちのくの山河にさすらへど、かくも子ゆゑの闇の迷ひ給ふ父母の、おはしまさぬことを思ひつゞくれば、胸ます〳〵塞がりて、涙いよ〳〵せきあへず、いそぎ夜着うちかつきて、夢路を辿りつ。

（未完）

三十六年の六の數に就いて

天地の運行は窮まり無く、事物の變化亦彊る所を知らずと雖も、茲に明治昭代の三十六年を迎ふ、謹んで按ずるに、我列聖の御治世三十六年の久しきを經たるもの、上古始めて史あるを以降、推古天皇あり、近く後花園、御土御門、光格の三天皇あるのみ、年號に至りては、唯々應永のみ三十五年を數へたるも、三十六年に亘り

たるは古來未だ曾て有らざる所なり、斯る盛世に遭い、今や六々三十六年を迎へ、此六なる數は、又不思議の關係を有するを見る、依つて試に六の數に關するもの丶思ひ出づるま丶記さん、

一月六日　　六々居士稿

我皇祖神武天皇の御即位元年は、偶々西暦紀元前六百六十年に當り、我紀元六百六十六年は西暦紀元六年に當る、故に我紀元と西暦紀元とは、毎に六百六十年の差を以て、毎に六年の相一致するを見るべし、其後景行天皇の三十六年は、我紀元七百六十六年にして、西暦百六年に、西暦百三十六年は、我紀元七百九十六年にして、成務天皇の六年に、降つて醍醐天皇の延喜六年は、我紀元千五百六十六年にして、西歷九百六年に、然も人皇六十代なり又六條天皇の御即位の年即仁安元年は我紀元千八百二十六年にして西歷千百六十六年に當れり此の如きは此外にも尙多し。

明治六年は始めて大陽歷を用ゐられし年にして、之より逆れば安政六年には五ヶ國の條約を頒たれ、嘉永六年には米艦始めて浦賀に來航し、文化六年には惠仁親王(仁孝天皇)皇太子に冊立、寛政六年には欣子內親王(後桃園天皇々女)光格天皇の皇后に、明和六年には英仁親王(後桃園天皇)皇太子に、寳永六年には六代將軍德川家宣征夷大將軍宣下あり、寛永六年には明正天皇御踐祚あり、女帝の第六に當らせらる、又遠く中古の始めより見れは、元明天皇和銅六年には諸國に詔して、風土記を作らしめ、嵯峨天皇弘仁六年には、橘嘉智子(檀林皇后)を皇后に、淳仁天皇天長六年に良岑安世(皇弟)始めて水車を作り、近衛天皇の久安六年に藤原長賴長女多子(實藤原公徃女)

を皇后に、永仁六年には後伏見天皇御踐祚あり、又紀元千三百五六十年には文武天皇御踐祚あり、紀元千四百六年には聖武天皇勅して金銅盧舍那佛を東大寺に建立せしめ、紀元千四百四十六年には桓武天皇始めて新宮太政官院に百官を朝せしめ給ひ、紀元千四百六十六年には平城天皇御即位あり、紀元千五百三十六年には陽成天皇御踐祚、紀元千六百六年には村上天皇御即位、千六百七十六年には後一條天皇御即位、千七百四十六年には堀河天皇御即位あり、又近古時代にては秀忠の江戸城を修したるは紀元二千二百六十六年にして、吉宗の將軍宣下は二千三百七十六年、孝明天皇の御踐祚は二千五百六年に當り、尚此類頗る多し。

六を數へて稱するものは六歌仙、新六歌仙、三十六歌仙、女三十六歌仙あり、

六歌仙　僧正遍照、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黑主、

新六歌仙　後京極攝政、大僧正慈圓、藤原俊成、藤原定家、藤原親隆、西行法師

三十六歌仙　（略す）

女三十六歌仙　小野小町、式子内親王、伊勢、宮内卿、中務、周防内侍、殷富門院大輔、後成卿女、右近、待賢門院堀川、右大將道綱母、宜秋門院丹後、馬内侍、嘉陽門院越前、赤染衛門、二條院讃岐、和泉式部、小侍從、藏人左近、後鳥羽院下野、紫式部、辨内侍、小式部内侍、少將内侍、淸少納言、土御門院小宰相、大貳三位、八條院高倉、齋宮女御、伊勢大輔、高内侍、後嵯峨院、中納言典侍、一宮紀伊、式乾門院御匣、相模、藻璧門院少輔

此外頗る多し今得たるまゝを擧ぐれば、

和歌六黨　藤原範永、平棟平、藤原經衡、源兼長、源賴家、源賴實、

本朝六大師　傳敎、弘法、慈覺、智證、慈惠、圓光

淨土宗六派　一條、三條、小幡、白旗、名越、藤田

法華六老僧　日照、日朗、日興、日向、日頂、日持

藤原師輔六子　伊尹、兼通、兼家、高光、爲光、公季

源義家六子　義宗、義親、義國、義忠、義時、義隆

爲義白河殿六子　賴賢、賴仲、爲宗、爲成、爲朝、爲仲

細川六侯　賴之、賴元、滿元、持元、持之、勝元
伊勢長氏六士　荒木正村、大導寺重時、山中宗清、多目長重、荒川國大、有竹銓俊
千葉六黨　千葉氏、相馬氏、武石氏、大須賀氏、國分氏、東氏、
戰國六雄　武田信玄、上杉謙信、北條氏康、毛利元就、織田信長、豊臣秀吉
毛利六家　宍戸隆家、毛利元康、毛利元政(天野相續)、毛利秀包、毛利元氏(繁澤相續)、毛利就賴(吉見相續)
浮田六老臣　園登前守、長船紀伊守、坂崎出羽守、岡越前守、花房志摩守、戸川肥後守、
浮田六花武者　花房志摩守、花木主膳、花田槇兵衛、花岡傳兵衛花澤與左衛門、花村三右衛門
假面六作　増阿彌久次、福來石王兵衛正友、春若、寶來、千種、三光坊、
瀨戸六作(信長ノ時)　宗右衛門、新兵衛、市左衛門、大平、長十、茂右衛門
六衛府　左右近衛、左右衛門、左右兵衛、
六攝家門跡　大乘院、一乘院、實相院、三寶院、隨心院、蓮華光院

我邦書籍の古今

幸田露伴

我が邦の書籍の古は猶外國の書籍の古の如く、同じく人々の手寫に成れるいとはかなきものなりし事疑ひ無く、それより漸く世の進み時の遷るに伴あひて、さま〴〵の製版の術も開け縫綴裝訂の法も具はりて今日に至れるなり。

○今試みに我が邦書籍の古今を語らば、最初は卷物のみにして綴本無かりし時なり。

○卷物の制は今猶いと古きもの丶現存するあれば就て窺ひ知るを得べし。扨其後に至り卷物の不便甚しきを厭ふより、卷物の如く莊嚴なる形狀を具備せしむるの必要無きものには、

○○薄き帖を工夫し出して、用に充てたりとおぼし。たとへば法華經とか般若經とかいふが如きもの

は、之を尊重するの情の熾盛なるよりして、おのづから其物を莊嚴ならしめんと欲するを免れねば、卷物の不便なる事は云ふまでも無けれど、猶其の不便に堪へ忍びて、讀む時は繰りひろげ、收むる時は卷き返す煩はしさをも惡み厭ひは爲ざりしなるべし。されど經論の如き尊き際にはあらぬ修法の次第といふが如き實用一方のものゝ卷物にてありたらんのことあり。たとへば虛空藏菩薩を祈り奉りて智慧を得んとすると假り定むれば、虛空藏菩薩求聞持法を修むる儀式方法を學ばざるべからざること勿論あるが、さて其の本尊を安置し奉る事よりして印を結び呪を誦し供物を献け禮拜を爲す等のさまぐの事の次第を漏無く記したるものを即ち名づけて求聞持法次第といふなれば、法を修めんには、不便をおぼゆること一ト方ならざるべければ、心長き古の人も終に卷物の煩はしきを厭ひて、別に他の形を有したるものを用ゐ初むるに至れる事なるべし修法の次第といふは、佛家にて虛空藏菩薩なり毘沙門天なり不動明王なり何にても本尊を立てゝ之を供養し奉るに當りて、其法を修むる順序次第を一々書き記し置きて錯亂顚倒せざるやうにする其の覺え書とするものは先づおのが師より其の次第を傳へ受けて其の次第に依りて法を修め願を果すなり。されば佛家にて次第といふは、平たく云へば法を修むる時の順序儀式の覺え書にて、本尊の異るにつけ、修法の目的の異るにつけ、其の次第もまた一々異れば、むづかしき法を修し大なる願を果さんといふに至りては、其の次第も愈々また複雜にして中々繁縟なるものなり。然るに是の如き用に充てらるゝ次第といふものゝ、卷物にてありたらんには、其の不便さ不都合さは何とも彼とも云ひやう無きほど

なりしなるべし。こゝに於て流石に氣の長き古の人も薄き綴本を造り出して彼の煩はしき卷物に換へ、次第に其の薄き帖のやうなるものに記さるゝことゝなれり。されど其頃の綴本は猶後世の和本といふものとは甚だ異にして、たゞ數葉の紙をもて、多く糊の力を藉りて成せりとおぼし。それより世漸く綴本の便を愛し、卷物の迂を厭ふものは、一轉して所謂

○○○やまと綴の冊子といふもの出づるに至れり。今の俗やゝもすれば誤りて練り繰り又は大白糸などをもて假り綴のやうに二ケ所にて綴ぢたるをば、やまと綴といふ習ひなれど、まことのやまと綴は今の西洋綴の本綴といふものゝ如く、數枚の紙を中央より折りて、其の折り目に孔を穿ち、絲を其の孔に通して其の一ト折を締め、又同じやうに數枚の紙を中央より折りて其の折目に孔を明けたるに前の絲を通し、さて次第々々に同じ絲をもて幾折かを絡げ締め、さて表紙をば最初と最終との紙に貼りつくる綴方を指してやまと綴とはいふなり。此の綴方は殆ど今の西洋綴と相似たれば、文字もまた西洋の書の如く紙の表にも裏にも記されしなり。今の普通の日本紙の如く薄く弱き紙にては表にも裏にも文字を書くべくはあらねども、當時用ゐられしは鳥の子紙の類の其質堅靭なるもの多く、最も麁品たるものも名塩鳥の子なんどなりければ、此の綴方も人をして不都合をおぼえしむるやうの事無かりしと見ゆ。かゝる綴方の中古の書は今猶多く世に存して、人の目に珍らしともせられざるほどなれば、くど／＼しく説くの要無からん。ただし此の類の書には、經論あり歌集あり物語あれど、いづれも皆寫本にして、板本にはかゝる綴方の書を未だ見ず。おもふに版本やうやく廣く行は

るゝに至りてやまと綴本は漸く跡を世に潜むるに至れるなるべし。やまと綴本の時代は長々しかりしが、此間は書籍といふもの是の如き物質上の事情に制せられて廣く世間に流布するといふ事の叶はざりしまゝ、卑賤のもの等は書籍を有すること能はず、たゞ僅に富貴の人々のみ學藝を私したる狀なりしは、おしなべての民庶に取りては不幸の事なりき。然るに德川氏以來世大に開け、刊本盛んにありて、

和本の形式いつとなく定まり、支那風の書籍の式をおほよそは基にして、今の人々が知る如きものなり、紙を折りて其の表にのみ文字を載せ、其の端を綴ぢ、角ぎれを被せ、表紙を付けて復絲をもて綴づるに至り、書籍は流通して牛飼ぬ馬追ひの手にも得らるゝやうになり、人智は愈々開けに開くるに及びたり。印刷の術の事は書籍の古今を語るにつけては遺れ難き問題なるが、我が邦にて始めて書を刻して之を刷りしは何時の頃なりとすべきや斷じ難し。奈良朝の末の頃、即ち寳龜元年に作られし百萬塔の中に藏められたる陀羅尼は木板印刷の始とすべきにせよ、そはたゞ木板印刷の最初とすべきのみにて、刊書の初とせんには猶聊か物足らぬ心地す。百練抄の奝然歸朝の事を記せる條に摺本の字あるを以て永延以前に刻本ありしとするも、たゞ道理ある想像として聞くべし。されど源平氏頃より木板本ある事は事實なれば、其の起源は猶甚前なる事疑ふべからず。さて其の進歩は遲々として德川氏の太平打續くに至りて初めて社會の一大勢力となれるなり。

銅鑄活字、木彫活字等の刊本、銅版其他の印刷術等の事は今姑く擱きて語らねど、是の如くにして、

明治の今日に至り、西洋の技巧一時に我が邦に入り來り、百花煥發の觀ある美しき世となり、卷物のむかしは博物館の玻瓈箱の中に藏まり、やまと綴の冊子、奈良繪入りの物語は違ひ棚の裝飾品たるに止まりて、背革金文字の立派なる洋本も、緞子表紙の上品なる和本も、心ある人の手にはいと容易く得らるゝ芽出度御世とはなりけるなり。

（をはり）





袖しぐれ

紫泉作
橘村補

（上）

悲慘の極、救くる神も無いだろうか。分ても今日は肌寒く、凩すさむ霜夜に、少女は哀れ衣單一枚、小蝶の蜘蛛に捕はれて、七重に

強く縛られたやう、珠なす肩も抜け、雪なす脛も陽。

取り〳〵の洋服、其も油に汚れた工場着、顔も手も眞黒な、二人の男は荒くれた、年の頃は何れも二十五六で。

黒羅紗の洋服の稍立優つた、それは監督とも見ゆる四十年配の男で、赫ら貌に髯の生へたのが、兩の手はポツケトに入れて、強然少女の前に構へて居る。

夜は更けた、器械の音が只此寂寞を破つてゐるばかり。

柳の枝、それはこの二人の手より下りる筈である、空に風を切る時、少女は身を振はして。

三分の暗い洋燈が、窓の棚から悲しげな光を發つ、機械の響に刻まれて、ちら〳〵する下蔭に、野菊の魂は消入らん風情。

『ヤイ、これでも未だ言はねエかい』

太い沈み入る樣な聲、一人は鞭を上げて少女が肩のあたりを。

『ド、何卒、お宥しなすつて』

絶え〳〵に鳴く、名もない虫が涙の聲、床下に音を出してゐるのは聞えないのか。

『宥せ〳〵ぢや分らない、逃げ出さうと思つた事を白狀しろ、左樣したなら宥しもしやう、勘辨もしやう、又お互に可愛がつても遣るんだ、あー今度宥して頂かうと思ふんなら、平常からよく鬼島樣の言ふ事を聞いて、此樣事はしねェー方が好んだ、女ッチョの癖に生圖々敷い、己ッ達の眼を眩惑さうたつて、さうは行かねエ、せ分つたんなら何で出やうと思やがつたか、又外の奴等とも相談したんか云つちめエ。』

及腰になつて手を兩膝に付いた一人、少女の貌

を覗き込むやう。

十六七の花ならば白菊、磨けば珠の素貌優しく梳れば雲の黑髪も、枯野の薄、煙中の玉、夏衣の少女が胸は半開けて、肉付きの能い肌が寒氣立つて、撫肩の柔軟な腕に掛けた麻繩の端がふるへてゐる。

嗽き上げ嗽下す度毎に、涙は頰より膝、膝より裾に、瀧なすばかりはふり落る、可怜な樣が目に入らないのか。

『ヤイ女魔、口がなく無つたのかい』



戀の叶はぬ意趣晴し、一人の男は邪見に顋へ手をかけて、グイと貌を上げさせたが、又霜に遇ひる野路菊の、嫋々としほだれるを、遲緩と見て取た鬼島が、

『モット、毆ちのめせ。』

と云ふ一聲に勢を得た二人、柳の鞭で滅度打ち少女は叫ぶ斷腸の涙。

『痛ッ、痛ッ、ア、何卒、どうぞ』。

右に悶え、左に苦しむ秋草の花、二人の手が少しゆるむと、

『鬼島樣、監督さん、何卒

お宥しなすつて、私が悪う御座いましたから、お詫を致します」。

『何宥して呉れ、ウム良し宥してやる、恕してやるから、是から己の云ふ事を聞くんだぞ、良いか、己のいふ事を聞いて、能く働くなら容して遣るけれど、其が契へんけりや、何時迄も辛酸い眼を見せるぞ、能か、分つたか』。

『……』何んで色慾の奴隷となる者ぞ。

『ヤイ女魔、如何したんだい、返事をしやがらねエか』。

他から又一人が

『ヲイお前如何したといふもんだ、何痛い、ム、夫りや痛いだろうよ、就ちやア今お前が容して呉れと云つたので、鬼島様は、是からお前が能く云ふ事を聞くなら宥してやると仰るんだ、早く返事をして痛い眼を見ねえやうにしたらどうだい、お梅さん、エ』。

『……』。身を斬られるとも。

此時、鬼島はツトお梅の前へ進んだかと思ふと、勿然足を上げて、脛の邊を、ドンと蹴ると、お梅は脆くも仆れ様としたが、縄に支へられて斜めになるのを

『サー、何時迄も強情張れ、今夜は此所へ、たゝき込んで置くからナ、ヲイ二人、歸つて呉れ』、と後目にくれ、身を翻へして戸の外へ。

二人も後に尾いて、

『畜生覺えて居やがれー。幾ら喚いたつて聞アせんぞ』。

先程から、此所の窓下へ忍寄て、内の様子を窺つて居た者があつた。

（下）

こんな奉公さらりとやめで

もとの姿で針仕事

何處か遠くに聞えた悲調の歌も、今は器械の音と共に聞えて了つて、謹愼室とやら、僅二間の破れ疊、所は寄宿の横手なり、掛り合を恐れて來る者も無く、風なぎ、夜は落ち、寒さはいよ〳〵骨を徹す眞夜中過ぎ、少女は笞杖の痛み、強問の口惜しさ、千行の血潮眼に流れ、獨幸なき我身の上を悲しみ歎いて居る處へ、靜かに入戸を引開ける者があるので、思はずギヨツトして見上げると、這入つて來た人は鬼島ではなく、兼て見知り合の事務員、露沼といふ好個の青年。

『お梅樣、如何したい、僕が此所を解て上げるから』と低い情の籠つた聲。

『イエ如何致しまして』。と少女は趑趄。

『君、僕は決して怪しい者ぢや無いよ、君が餘り可愛相だから、逃して上やうと思つて來たんだ、目附ると大變、サア僕と同伴に來給へ、惡いやうにはしないから、早く』。

と忙しく促す青年の手に縋りて、千重に纏はる蔓は解け、今野に出づる籠の鳥、少女は夢みし心地して。

『ドーモ有難う御座います』。

と饒多度禮を述べつ〳〵。

夢中の少女、懸命の青年、互に確と手を握り合ひ、露沼が兼て用意し置いた露次口から、垣根を越えて藪の道、轍の鮒の息吻きあへず、一向走に走つて、とある樹影に休息だ時は、少女の體は綿の樣、ヨロ〳〵と青年の胸へと轉げ込むだ。

『お梅さんマア安心したまへ』。

『有難う御座います、御恩は決して忘れません』。

ハラ〳〵と露沼の手に隕るものがあつた。

『其樣事、夫れよりか寒くつて仕方がない、之れ

でも着て居給へ』。と洋服の外套を脱いで少女の背、少女は斷て辭退したのだけれど、

紅葉かつ散る音も聞えて、世は暗黑の懷に眠つて居る、祥雲寺の墓地の中、何人かの奧城所の累々たる間、茲には樹もあれば草もある、二人は石に腰かけて、

『お梅樣のお國は何處、そして兩親もおありか』。

聲をひそめて

『私神奈川、家は今繼母一人ありますが』。

『其れぢや歸り惡いだらう』。

『ハイ歸れません』。と打しほれる。

『アヽ、其奴は困つたナ、實は僕の家へ連れて行



つてあげても宜が、喧しいのでね』。

『ハー』。と賴み少なげな調子。

『夫で何で君此方へ來たの』。

『矢張繼母が喧しいものですから東京へでも出やうと思つて居りますと、村の由井といふ人が良い處へ奉公させてやるといひますので、うかと其人に連れられて來て見ますと、こゝの工場なので、喫驚いて歸らうとおもひましたら最早七年とかの年期が這入つてあると云ふ事で、尤も初は茶屋へ奉公しろと、勸めたのですが、夫に學校にもちよと斗居りましたものですから、茶屋よりは堅氣な所が宜いと存じまして、こちらへ參りましたので…』。

『ムウー、その學校といふのは何處』。

『濱の神洲女學校です、ですから鬼島樣に彼樣事を云はれるのが嫌で〲堪りませんので、逃げやうとしましたのです、………何處へ行くと云ふあてもありませんが………』。

折から颯と降り切る時雨の雨。

○　○　○　○　○　○　○　○　○　○　○

運命の神は此所に二人の人の兒を玩んだ。少女には、密かに描いてをつた意中の人があつたのだけれど、蓄生修羅の悲愁から救はれた恩もあるのに、倍て露沼は、吾行く家の無いなれば、同じく之より家を捨やうと云はるゝ情に被羈て、草枕、敷寢の袖の村時雨、濡れたる裾は厭はじとて、赤心をもて遂に一身を青年の前に捧げたのである。

鳥羽の戀塚秋の山、明日は何處の逝頭に立つであらうか。

（完）



文林

節分　東久世通禧

家ごとになやらふこゑは絶ぬれと
さちをはうちと願ふなりけり

新年海　佐々木高行

うめのはな匂はさりせは立かへる
年のひかりも知られざらまし

早春雪　津輕承照

やまさとははるの光のおそくして

文林

また寒けにもみゆるゆきかな

霞添山色　大谷光尊

佐保姫のかすみの眉をひきしより
ゑめるすかたになれる山かな

旅中梅　宮地嚴夫

嬉しくもわかやとりたる旅やかた
のきはに梅のかほりみちたる

騎兵　荻原嚴雄

いくさ人こまを並へてはせさりぬ
砂けふりのみあとにのこして

森鶯　鎌田正夫

花もなき森のかしはら木つたひて
ものさひしけにうくひすの鳴く

梅　芝葛鎮

にはのうめさかりになりぬ文机の
窓のうちまてふかくかほりて

江春月　植松有經

よるなみの音はきこえて難波江の
葦へもみえすかすむつきかな

窓前梅　遠山英一

居なからに窓のと近くみるうめは
たゝ一もともゆかしかりけり

子日友　鍋島榮子

けふのこの子日の小まつ友として
雲かゝるよもきみはみるらむ

谷春氷　近衞貞子

さえかへる嵐にまたもこほりけむ
音せすなりぬたにかはのみつ

谷殘雪　柳原愛子

仰きみる峯のまつはらかすめとも
たにゝはいまた雪そのこれる

溪梅　岩崎寧子

くたるへき道はいつこそ尾の上迄
　溢れきにけりたにのうめか香

賴山陽　　南郷柳子

春のみつ清きなかれにかけうつる
　やまのすかたの高くもある哉

初春霞　　佐藤艶子

きえのこる尾のへの雪もさ乍らに
　霞みこめたるあさぼらけかな

初春　　中村禮子

湖かすみたちそめしより雪消えぬ
　たかねの松もはるめきにけり

伊勢海偶感　　小川直子

伊勢のうみ波たゝぬ世の静けさを
　うたふ聲さへのとけかりけり

殘氷　　服部磯子

あさこちの渡るかたのみ打とけて
　片へのこれりたにのうすらひ

徳川光圀卿　　河村重子

くにのためおもふこゝろの誠より
　あらはしにけむ大やまとふみ

若菜　　下田春興

かたまもよ　みかたまもち
ふくしもよ　みふくしもち
かたをかに　わかなつむ子ら
子らが手の　ゆひわきよらに
みかたまに　そでにつみいれ
みやこへに　もてかへりこし
はゝこ草　ちゝ子くさ
なゝくさの　けふのおものに
ちゝのみの　ちゝのみこと
はゝそはの　はゝのみことの
みをちませ　わがえいませと

教の庭

ことはかひ　うたひまつりて
たてまたす　おもの丶しろに
そでたれて　つみやもてこし
は丶こぐさち丶こぐさ

新年海

松原麗松

新玉(あらたま)の年波(としなみ)たつるわたつ海(み)も
君(きみ)が惠(めぐ)みの風(かぜ)になびきて

正誤

前號文林所載院長の職をゆづりけるときよめるうたの内にて、れもころにれぎ奉り、かしこき稜威、あさ島の、あさひと仰ぎ、この岡の、大神の、云々は誤りあれば左の通り是正す。

れもころにれぎ奉り、大神のかしこき稜威あさ島の、朝日と仰ぎこの岡の、庭の撫子露にからすな。



教の庭

二月一日兼題

樞密顧問官正三位子爵黑田清綱先生撰（先生今尚伏蓐し居らるゝに付門弟子の代選に係る）

野若菜

天

かき分けて野邊の若菜をつみ見れば
ゆきのしたにもはるはありけり

大隅國鹿屋村　宇都よし子

地

香川縣高松市四番町　横井秀子

わかせこに見せまほしとや白ゆきの
ふる野のわかなつむひとはたれ

人

肥後國熊本市東寺糸町　田代綾子

とひ火野にはるさめけふる頃はしも
わきてわかなやもえいてぬらん

甲の部

東京　椎野秀子

きえのこるゆきを若菜につみそへて
野もりやしはしはなとみるらん

肥後　田代きわ子

梅見つゝかへさの野へのはつわかな
つみてや今日のいへつとにせん

東京　高橋松江子

萌いつるわか菜にはるのいろ見えて
かすまぬ野邊ものとかなりけり

栃木　青木たま

わかなつみ雪またつねてこゝかしこ
三かさの野邊をゆきかへりつゝ

埼玉　横田音羽子

春あさみ野はまたさむしそでたれて
千代のわかなをつむはたかこそ

乙の部

百とりのわたらぬさきに野へにいてて　肥後　佐々小學子
千代のわかなをつむひとやたれ

年としに摘むものなからたのしきは　青森　松山らん子
こゝろをのへのわかなゝりけり

はるはまた遠さと小野とおもひしを　東京　平尾あさ子
わかなつむへきときは來にけり

しつの女もおやのためとや春さむみ　東京　横井かつ子
ゆきかきわけて野せりつむ見ゆ

初わかな野へにつみ得しうれしさは　伊豫　浦尾やすを子
わかたもとにもあまりけるかな

うらくと霞みわたれるはるの野に　下野　和賀非芳子
根ぜり引く子のそてかほるなり

老の身もまたわかかへるこゝちせり　山口　田村多豆子
野邊にうちむれわかなつむ日は

春の野のゆきまにもゆるはつわかな　東京　北島功子
はつかにつむもうれしかりけり

みつは草もへてふた葉も見へわける　肥後　田代艷子
またふかゝらぬはるの野つらに

うれしさは袖にあまりてはつろかな　東京　牛山竹代子
すくなき野へもにきわひにけり

をとめ子かゆきかきわけて春もなほ　東京　篠田圓子

あさゞは小野にわかなつむなり

ひかけさすのへのあたりは雪もなし　京都　東　照子
けふもつみてむいもはわかなを

やまさとはまた雪ふかし日かけさす　京都　東　宥子
小野のあさちにわかなつむなり

もつ籠にあまろまてこそうれしけれ　渡島　喜多村きさ子
かすむ野すゑにわかなつむ日は

春日野やゆき消のさわにうちむれて　埼玉　横田　秋子
わかなつむなりならのさとひと

春日野のゆきにあとありはつわかな　大隅　宇都ろい子
我れよりさきにたれかつみけん

きのふけふふろ春さめにゆききえて　大隅　大津よし子
野邊のわかなはおいやしぬらん

春の野にわか菜たつれてつむ子らの　札幌　山田ふみ子
うれしさそでにあまりぬろかな

とく摘みてゆかはや野邊のはつ若菜　横須賀名　木山勝子
病めろはゝきみいさ待ちまさん

千とせへんよはひなのにへつむ若菜　長崎　八尾いへ子
つめともつきぬ御代のはろかな

きえやらぬ野邊の白ゆきかきわけて　京都　坪内りき子
わかなつむてのさむけかりけり

なとめこか袖にみとりをうつしもて　埼玉　前野ふさ子
すそのゝわかなつみはやしけり

いそのかみ布留野の若菜わかかへり　奈良　澤田よし子
いわけなき子とつみてけろかな

たかために春をたつれてしつの女は　東京　戸賀崎治子
ゆきふる野邊にわかなつむらん

千代までも老せぬきみか手にふれて　東京　戸賀崎久子
野邊のわかなもみとりますらん

はつわかなもえ出さらばはろさむみ　松山　上原のぶ子
ゆきのふろ野をたれかとはまし

氣をぬろみ春日の野へはゆきとけつ　札幌　澤　鈴子
わか菜つみにやひとのゆくらん

けふもまたそてふりはへて少女らは　東京　林　環子
とほさと小のにわか菜つむなり

みとりさへ深く見ゆろはむらきえの　東京　吾妻とみ子
ゆき間にもゆろわか菜なりけり

若菜つむをとめのそてのかすむまて　茨城　飯田幸子
はろやきぬらしむさし野のはら

丙の部

少女子かそてをつられてかすむの　東京　三好珍子
小かはのきしにわかなつむなり

かすみさへまた立そめぬのへにまつ　東京　戸賀崎梅子
はろを見すろはわかななりけり

よひの雨にのへのしらゆきむらきえて　東京　大野賢子
もえろわかなにはろのいろみゆ

立かへろはろの野にいてゝうらわかな　肥後　佐々有鄰子
つみはやすこそたのしかりけれ

春の野に小ゆきかきわけうなゐらと　東京　北島操子
つむもうれしきすゝなすゝしろ

なさな子の引く手たよりて春の野に　美濃　吉村せい子
おいもわするゝわかなつみかな

ゆきわけて見いてし野へのはつ若菜　三河　永井さい子

すくなきものゝうれしかりけり

春日野のゆきまたつれてともとちと　安藝　和住千鶴子
わかなつむこそたのしかるらめ

初わかなつみてゆくこそたのしけれ　東京　牛山素子
野すゑのゆきにあとをのこして

奥やまのゆきはきえれとさとちかき　岡山　日下萬鶴子
野邊のわか菜はもえそめにけり

うくひすのなくれたつれて朝またき　東京　秋山きやう子
むかひの野へにわかなつみけり

かすみたつはる野のわかなつむ時は　東京　椎野蘭子
おひもわするゝこゝちこそせめ

うくひすのこゑ聞きなから春の野に　岩代　田中二三子
わか菜つむこそたのしかりけれ

春かせものとかにふきてをちこちの　廣島　小谷治子
のへのわかなも萠えそめにけり

もろともに袖ふりはへてもえいてし　長門　紀まり子
のへのわかなをいさやつみてん

しろ妙のそてふりはへて行くひとは　下野　花方米子
はる野のわかなつむにやあるらん

ゆき消えてかすむ野末にわかなつむ　下野　和賀井花子
をと女のそてをはるかせのふく

かた岡の野邊のわかなはもえいてぬ　下野　芦谷隆子
いさやつみてむ今日のひと日を

つむこともおくれぬ御世と春の野の　山口　村上操子
ゆきまのわかなのこさゝりけり

思ふとちわかなつまむと野邊に出て　伊豫　竹村竹里子
またむらきえのゆきにぬれける

をとめ子の雪間あさりてつみはやす　和歌山　瀬戸樂子
わか菜や野邊にはるをつくらん

はるの野にまた消へやらぬ雪間より　横須賀　上田雪子
みとりにもゆるはつわかなかな

春かすみかなひく野へにおとめこか　相州　岩橋花子
たかいへつとのわかなつむらん

うなゐ子にうちましりつゝ春の野の　石狩　阪本榮子
若菜なつむ日はたのしかりけり

たてまつる君よろつ代と小まつ引く　東京　戸塚てつ子
の邊のわか菜をつむやみやひと

春の野にけふつみはやすはつわかな　東京　内田とく子
おひをは知らぬものになしつゝ

老といふこともわすれてうなゐらと　東京　吾妻ちか子
のへのわか菜をつむもたのしや

淺みとりいろにいてつゝかす日野の　東京　片山ふみ子
ゆき間にたれをまつわか菜そも

はるの日も峰のやなきはけふらねに　東京　片山あや子
野へはわか菜のもゆるなりけり

幾千とせつむともつきし新としの　東京　川瀬きせ子
きみか代いはふ野邊の若菜は

都人野もりを友とうちつれて　東京　川村松子
さむき雪間の若菜をそつむ

はるの日の長きいのちを野邊に來て　東京　矢野保子
千代のしるしのわか菜をそつむ

若なつみ野邊のたなはしおもむろに　東京　中野昌子
ひとり〳〵にわたるちこたち

あつさ弓はるまた寒き野へなから　東京　舘脇ますゝ子

歌の庭

千代のわか菜はもゑそめにけり

しら雪のまた降る野邊に分け入りて　大隅　宇都つれ子
千代のわかなをつみてけるかな

あつさ弓はるの野に出ておひの身も　札幌　山田靜子
わかかへりつゝわか菜つむなり

せりあらふのかはに誰かあととめて　秋田　三浦さわ子
われよりさきにこしそめけん

名にしあふ春日の野邊のはつわかな　東京　永井さき子
ゆきまなからにもゑそめにけり

たらちめのゆるしうけゐて春の野に　日向　桑原あや子
わかなつみけり子もりなしつゝ

さほ姫のうゑし野さわのはつわかな　東京　山本茂子
つむ手に千代のいろ見ゐにけり

かすか野は若菜つむへくなりぬらし　東京　山本梓子
野もりもさとにたちかへりきぬ

かけろふのもゆる春野のはつわかな　東京　敷島うた子
われよりさきにつむひとやたれ

しら雪のふりにしのへのけさはれて　埼玉　前野齋賀子
はるのひかりにわかなつみてん

野の若菜つみてあそへるをとめらは　伊豫　山本里美子
うれしさかこにみちあまるらむ

おもふとち淺さは小野につむわかな　岩手　藤澤もと子
かたまにみてゝいへつとにせん

きゐのころ雪のまに〳〵をとめらか　岩手　藤澤みつほ子
野邊にうちむれわか菜つみけり

我背子にはるのいろをは見せてやと　東京　福原貞子
ゆきふるのへにわかなつみけり

かすみ立つ春野にいてゝきみか代の　東京　椎野銳子
千代のわかなをつみはやしてん

乙女子のいさのふまゝにおいの身も　東京　椎野ぬき子
わすれてのへのわかなつむなり

年と共にのへのわかなをつみそゐて　東京　椎野淸子
しめりかちなるわかたもとかな

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

始めて鶯を聞く

天　伊豫國松山市一番町　宇高松子

去年は口惜しく友にさきがけせられたれば、いかで今年の初音は我こそと、年立つ朝より朝ゐの枕も心して、待ち渡りけるに、打絶えて音だにせず、いと心もとなきに、ひもどきそめし、軒端の梅の、主まちがほなるも哀れなれば、いでや今日は身を春風ともなして、谷の住家を尋ねばやと、空晴れ渡る日曜日の朝とく弟と共に家をいづ、田舍道の心易く高らかに歌ふ弟の散歩、唱歌の聲を先だてゝゆく程に、とある籔の蔭より、さと吹き來る風のえならぬ匂ひに、心ときめき、若しやと耳そば

だつれは、うれしやなつかしき二聲三聲、靜かに來よと弟を制して、あせ路づたひ籔の後にいづれば、淸き小川の流れに餘念もなく、菜洗ふ少女の側に、いと古りたる紅梅の半はゝゑみ初めたる花の枝木傳ひて、時を得顔に鳴きしきるなりけり、其聲のいともめでたく、わたりの景色の繪にもかかまほしう美しきに、我を忘れてしばしたゝずみて、聞き居けるに、鶯も花にやあきけん、はた他の宿りを尋ねんとてにや、つと彼方に飛び去りたるを見て、弟の思はずアッ飛んたつとさけびたるに驚きて、少女の後ふりむき、我等のあるを見て、にこやかに會釋するに、おのれも禮をかへしつゝ、今の鶯は日毎にこの宿りをとひ侍べるにやと問へば、然なん、人氣少なき朝のほどは必ず來鳴き侍ると答ふるに、おのれ又かばかり世になくめでたき紅梅の、都にもあらば如何に人にめでられんをといへば、然るに侍り、先つ年も、都の商人のしば〳〵買はんといひこし侍りしかど、祖母なる人のいとほしがりて、敕なればと歌ひけん人さへあるを、よしやこのまゝ人しらぬ籔蔭に、くちはつるとも、黄金にかへて、哀れしらぬ商人の手にはまかせじとてなん、かくは來る春毎に我等を慰めくれ侍るなりといふ、面わの何となく氣高く、其言葉の優にやさしきは、如何なる人の末ならんと、いとゞ床しく、祖母なる人にも會ひ見まほしく、覺ゆれど、この由早く父上にも告げまゐらせたく、且つは友にもほこらばやと、思ふものから、次の日をちぎりて、名殘惜しくも立ち別れぬ。

地

横須賀逸見九七安西方　名木山勝子

朝日影長閑に柴垣の破間より、ほろ〳〵とこぼれたる山茶花の一ひら二ひら。何となう懷かしうて。蹲の中垣におり立ちて、しばし眺めやりつ。柳の糸のいと長う萌えいでたるが、いさゝ水に影映したるらうたさ、高さ僅に振分髮の少女子も紅葉の如き手や屆くらんと覺えたる。古、小野の道風ぬしの蛙に心奪はれけんも、斯かる處なめりと思ひやられて。そゞろに昔床しうなむ。小雀の我が物顔に二羽三羽、遊び廻りたる庭の面の靜けさ。折からあはたゞしう馳來りたるは、日當りよき南の椽側に、春の夢貪り居し玉(猫)にぞありける。汝は、此罪なき小鳥を捕へんとてか、玉よ。玉よ〳〵早

々あなたに行きね。雀は痛く打驚きたるけはひにて、あなた草ぶきの庵にと飛去りて、稚な兒の歌ふ聲かすかに「霞を隔てゝ聞くが如くに洩れぬ。かげろうもゆる野づらこひしみ」をちの友垣が許に、思をやりつゝ我れにもあらでふし沈めば、何處ともなく床しき音の聞えたる。あやぶみて猶も心押靜むれば、まがふ方なき、まこと鶯の初音なり。姿見えねがいとゞ奥床しう思はれて聲をしるべにたどり行けば、やがて裏の花ぞのより傳ふるなりけり。そこゝゝ見廻し行くまゝに、聲はやう／＼あらはなり。いと嬉しうてかしこの枝か、こゝの梢かと、そこら求むれどもはや影だに見えず。あつかしき聲もはた聞えず。いづこぞ／＼とひたすらに、心のみはいらてども、いかにせん。げに、心にくゝもくちをしかりな。

人

伊豫西宇和郡宮内村　浦尾やすを子

窓の梅の綻びそめしは、はや一月もあとになりぬるを、など鶯の來なかぬかと、朝なゆふな、心もとなう戀ひぬるに、未だおとづれてぬは、我宿や忘れたりけむ。己れをやいとふらむ、などかこちつゝ、をり／＼に口ずさみて　三十一文字五十首にあまれるを、かねて紙にかいつけたりけり。けふは得たへやらぬ心地して、いさゝか心やりにもと、文机の抽斗より、そを取出でゝ、うちひろげたるに、あやしや何處ともなう、初音きこえつ、こはまさしく、空きゝならん　、靜に耳を聳つれば又もきこえつ。今は何をか手につくべき、そがありかを、とめばやと、やをら身を起しつ、ひたばしりに庭におりたゝんとすれば、前栽の梅の梢に、そのろうたき姿は、うるはしき初音と共に見えつ聞えつ。あなうれし、などてことしは、かくも遲く音信しや、谷にも春は通ひけむものをと、恨みつゝ迯げん事をおそるれば、口にはいださずて、しばし忍びやかに、妻戸のひまより見てありつれば、上枝より中枝下枝と飛びうつり、さながら杼の動くがごときさまにて、ホーホケキヨ―ケキヨ／＼となく其聲、のどけしとものどけし、さきにたちこめし心の霞はうちひらけて、いとをかしくなりぬ、身の塵の世にあるをも忘れ、心はとみにすが／＼しくなり、樂しさいはんかたなし。何時迄もさらで我宿にあれかし、といのる心をく

いいいいいいいいいいいいいいいいい
みとりしか、くりかへし〱幾度となく、なきし
いいいいいいいいいいいいいいいい
うつくしき音の、今もなほ耳に殘れる事の、うれ
いいい
しきや。

ささにふそのふのうめにのとけくも
はつうくひすのこゑそきこゆる

（以下原稿到着順）

安藝　和住千鶴子

久方の光のどけき春の日に、心もうきたち、さうじ開きて立ち出づれば、きのふけふ、天津日影の、うらゝかなるに春まだ淺き、山里の、まがきに二つ三つほころびそめたる、しら梅の花、折しも吹きくる春風に、ねならぬかなり、ゆかしきに、あかず眺め居たるに、この匂ひや通ひたりけん、長き眠りのさめつらむ、谷間を出づる鶯の一聲いと淸らかに春つげわたりぬ。あなうれし、待ちわびしこゑきゝて、心の曇りもはれつるよ、いま一とたび梅が枝に、きなけ、うぐひす、やよ〱と呼べども、いらへは春風のみ、うれしと思ふひまもなく、はや飛び行きて影だになし。さるにても、とくさほひめのおりなす閨に朝な夕な、うつくしき聲してなのれかし。

長崎　八尾いへ子

軒端の梅やう〱ほころび初めたれは、なかぬ限りはなどかこたるゝに、うちつけに鶯の來鳴きたる、春またき聲の珍らしう新らしきなきゝ、殘る雪に一入の興を添へたれば、かき合せたる袖の寒さもわすれつべう覺ねぬ。鶯も谷深き雪にこもりて、寒さにたへたるふるものに困し、ちひさなる身に、おほきやかなる心の匂ひ出でゝ、かはかり長閑なる初音なきこゆるにや、されば學の校深くこもりて、師の敎にしたがはず、いたづらならんには此鳥にも恥ぬべし。春の長閑さな雪の中に學び、面白きしらべのふしく〱あかるく、谷の戸の氷なとかざらは、梅が香にほふ大御代の、春の景色を、いかでか歌ひいでざらんなど、おもひつゞけて、鶯の初音のあるししたるも、梅の花はひとり笑みてきゝぬ顏なるいとをかし。

東京　山本梓子

有明月の影ふみてやいでまつらむ、山里なるおきなの、今朝いとくまうでゝ、其わたり梅いと多きところなむありと云ふに、いかにぞ花はまたしきにやと問へは、南のさし枝はほゝゑみて侍り、かへりてみところ侍るべくや、下ゆく野川水も淺みどりになりもてはへるなど、ゆかしからするに、霞ならぬ心も浮き立ちつ、あすはものすべく思ひなりぬ、へだてぬ友やさそひおかむと友がりとへは、朝日の光うらゝかなる窓の内に、文よみ居たるけしきなり。思ひ立ちにし事いかにぞやとうちそゝのかせば、いとよからむとて出たつ時なと掟さだめて、はては今昔の物語聞ねいづる折しも、軒近き竹に、にほひやかになのりたるは、年たちかへるあしたより、待ちにまちたる鶯の初音なりけり。あなめでたと、人も我も、いひし言葉の、あまり大きやかなりしにや、今一聲は、遙かなる方に枝うつりして、なくも又いといひしらすゆかし。調ぶるふしの、うゐうゐしう、谷の古巣はいま出でつらむとおぼゆ、佳人からこそ、よそにまたしきはつれなれば、もらしけれといへば、梅が香のたよりもたらす、君なくば、とはれまじものか、宿のうぐひすと、かき出だされげる心ばへ、鶯のはつれと、さしならべ、いとめでたくおぼねしか。

大阪　白梅

昨夜よりふきつゞきたる風は、やむべうもあらで、雲のゆきかひあやしう、やゝともすれば、六の花の散り初むべうおもはるゝに、ひとしほ寒さの、まさりぬる心地して、埋火かきたつるにも、心せかれつ。されど文よむまど近う、かげうつす、梅が枝に、三つふたつ小さき花の、ほころびて見ゆるに、何となうのどかに、おぼゆるもをかしや。

去年梅咲くころは、東都のかりすまひに、いく度か西なる家郷をしたひつらん、あゝされど、花の都をあとに、「山川幾十里を隔てし此處にきてみれば、おなじ心にながめらるゝ東のそら。あゝなつかしき友はいかにしつらん。

心ゆくかたもやと、まどすこしばかりおしひらけば、風はいつしかたゐはてゝ、あやしき雲はかげだになく、かすかにゝほふは梅が香か。あはれ、光ある春はきにけるよ。袖ふりはへて、若菜つみつゝ、鶯の音に、共に歌ひし人やいづこ。

こし方のいよ／＼しのばれて、はてもなきに、筆とりて紙のはしによしなしごとども、心のまゝに、書きもてゆけば、たがために歌ふか、法華經の一聲。

去年はわが苦しき病床を訪ひ、今日又此處に、淋しき心を、なぐさめんとするか。可愛の鳥よ、しばしはそこを、去らであれよ。あしたの花、夕の月ならで、友なき身の、此一聲の如何にうれしかりしよ。

肥後　佐々有鄰子

朝ぼらけ起き出でみれは、梅花三つ四つ二つ、雪のうちよりほゝと笑みそめぬ。何がしの軒ばのにほひもかくやあらんとなつかしうなん。都人は音だにまれなる片山かげのふせ庵なれば、音信たゆるもうべなりけりな。梓弓春は立かへれども、新玉の年はきぬれども、若駒の足がきはやめて、音なふ若人もなく、さゞなみの隣をしめて。くれくれしき嫗のしわがれこゑのみ、戸のすきもれてきこゆるものか。あなくるしあなさびしと。なげきの音にいでゝしばしたゝずめば、いとうれしくいとなつかしく、ほゝと轉る鶯のはつれは、千金の價にも、かへがたうなん。

伊豫　山本里美子

眺め淋しき冬枯れの昨日けふは、見ぬ世の人の殘し文こそ、またなき朝夕の友なれ、今朝しも例の窓に文の林をたどり居し時しも、さと吹き込む風のまに／＼ゆかしき香り、あな嬉しと仰ぐ軒端に、古木の梅二つ三つほゝゑめるうれしとも／＼、さるにても、年毎によそよりはとく訪れくる鶯の、今年は如何にしけむ、あはれさいつ日より降りつゞきし深雪に、もしも老い過ぎしなれ、谷間に死せしにはあらずや、あなふびんと思はずうなだれし折から、一聲ゆかしともなつかしとも、云ひしらぬ心地せられて、今一度名のれよと見れど、まてども、聲のみかは姿もなし、聞きし初音は夢にもあらずうつゝにもあらじ、たしかに耳に殘れる物を、いつの間に飛びや去りけむ、名殘をし云はむ方なく、罪なき梅さへ、今はなか／＼に恨めしう覺ゆし、さりとて幾年のちぎりたがへず、老いても尚鳴くを思へば、哀れも深く、げになつかしきよ。

梅が香のしるべしなくばなか／＼に
　ゆかしき初音聞かれさらまし

日向　桑原あや子

家の童の馬かふに目さめて起き出でぬ、妻なる人、今朝は常になう心地よき晴日なれば近き野山のあたりにも行きたまへや、家みのは身に惡かりなん、娘を供にすべければ早く早くとて、誠や飾りなき田舎人の親切、かくてはいなむ勇氣もなくて、十歳ばかりなる乙女子と共に後なる赤土の坂を降り、右にそひて山根を行くに、枯葉をとぢ居し流れの水も、今はやさしき小川となり。やう

やう木がらしをのがれし木々の、温たかき朝日に映ずる樣、いとものどかになつかし、木の根に寄りていこふに、乙女子は田に降りて、幼き芹をあさりつゝ餘念なし、折しもいづくともなうほのかに愛らしき鶯の一聲聞ゆるに、われにもあらで立上りぬ、風かあらぬか木の葉二ッ三ッ散ると共に、またも鳴く一聲に、乙女子は土ばかりなる指もてさしつ打笑みぬ。あなやさしき鶯よ、汝はいつのほどにか谷の戸出でにけん。あはれなが初聲きゝしはわれと乙女子の二人のみにか、なつかしの聲、今一どはもらさずや、と、そと枯し葉に寄れば、驚きやしけん、木の間を渡り行く羽音のみきこゆ。

乙女子の家にとそゝのかすに、なつかしき初音を後に、又翌日もとはんと樂しみつ。小川によりて根芹すゝぎて歸りぬ、嬉しき事どもつぐるに今より我庭は、鶯のやどなれば、思ふ限りきゝ給ふべしなどいふに、いとゞ嬉しうて、朝食もそこそこに、ふるさと人、或は友にふみしたゝめぬ。常のそなたこひしき我心は書かで、今朝初音きゝし我よろこびを繰返しつ、それと共に靜けき山家にて、迎ふる春のたのしさ、身もほどなくいなん心地すとかきそへて。

散文は最良の順序に於て言語を排列したるものにして詩は最良の順序に於て最良の言語を排列したものなり

コルリッヂ



○歌御會始

豫ねて仰出されたる如く本月十九日午前十時兩陛下鳳凰の間に出御あらせられ三十六年歌御會始めて式を行はせられたり當日の所役左の如し

題者點者　御歌所長男爵　高崎正風
讀師　公爵　二條基弘
講師　從五位　滋野井實麗
發聲　子爵　綾小路有良
講頌　伯爵　大原重朝
同　伯爵　室町公大
同　男爵　西五辻文仲
同　男爵　金子有卿
奉行　子爵　前田利鬯
同　正八位　大口鯛二

兩陛下には德大寺侍從長、田中宮内大臣、香川皇后宮大夫、岩倉侍從職幹事、岡澤侍從武官長、花房宮内次官、山内皇后宮亮、北條、日野西、澤各侍從、井上、鷹司、伊藤各侍從武官、姉小路、園權典侍、小池掌侍、北島權掌侍、三上命婦等に從へさせられ出御

聖上は右に　皇后宮は左に御著座あらせられ聖上の御側には侍從長以下著床　皇后宮の御側には皇后宮大夫以下吉田、栗原兩書記官及び女官著床し軈て讀師は披講の床に進み著き次で講師、初聲、講頌の諸員進みて著床し題者點者及び奉行は講師の後方適宜の所に著床し場外御廂には讀師控所久世伯、御歌所主事近藤久敬氏、非番參候松浦伯、入江子、宮地嚴夫、萩原嚴雄、小杉榲邨諸氏、寄人坂正臣氏、拜觀者谷子、谷森錦鷄間祗候、工藤文事秘書官、日高内大臣秘書官、松井學習院教授及び西三條實義諸氏列席せり斯くて讀師二條公は懷紙を引き延べ下﨟より始め御前に向けて硯蓋の上に置けば講師滋野井從五位は先づ『年の始めに新年海と云へることを仰せ言によりて讀める歌』と高らかに述べ句讀明白に其歌を讀み次で發聲綾小路子其の初句を朗詠すれば講頌の諸員同音に第二句より朗詠し此の如きこと各一反にして漸次上﨟に至り親王同妃殿下の御詠進は二反して東宮兩殿下に及ぶ東宮兩殿下の御歌は別に案上に置かれたるを讀師承はりて講せしむ

次て讀師二條公は　皇后宮御前に參進して御懷紙を賜はり復床して御硯蓋の上に置き講師起立して之を奉讀し發聲及び講頌の諸員起立して講ずること三反にして讀師之を返上し次て聖上御前に參進して御懷紙を賜はり復床して御硯蓋の上に置き講師起立して之を奉讀し發聲及び講頌の諸員起立して講ずること五反にして讀師之を返上し式を終ら

せられ　兩陛下には十二時頃入御あらせられ親王殿下以下各員退出せりと承はる式後所役に酒饌を賜はりたること例の如し御製を始め奉り披講の歌左の如し

御製

新年海

あつさゆみ八洲の外もなみかせの
しつかなる世のとしたちにけり

皇后宮御歌

いくさふねいかりおろして
おとせぬ御代のあた浪も
年いはふらし

東宮御歌

ふねことにしるしの旗手
うらにきはしくうちなひき
年たちにけり

東宮妃御歌

年浪のたてるあしたは
あらたまりぬるうなはらも
こゝちこそすれ

海軍中將大勳位功四級　威仁親王

時しらぬわをうなはらも君が代と
ともにかはらぬとしたちにけり

勳一等　慰子

侍從長從一位勳一等侯爵　臣藤原朝臣實則上　德大寺

うら〳〵と朝日にはへり和田の原
いかにのとけきとしのたつらむ

宮內大臣從二位勳一等子爵　臣藤原朝臣光顯上　田中

わたのはらとしたつらしもおきつ浪
あらふあさ日の影あらたなり

よもの海なみのさわきのおともなし
御代のとかなる年やたつらん
題者點者樞密顧問官兼御歌所長正三位勳一等男爵臣藤原朝臣正風上　高崎

わふきみぬ國やなからむひむかしの
海よりのはるとしのはつ日を
讀師　従二位公爵臣藤原朝臣基弘上　二條

よものうみあみかせたゝて君か代の
千とせをいはふとしたちにけり
講頌　正三位伯爵臣源朝臣重朝上　大原

としなみのたつ音はかりきこゆあり
よものうな原しつかなる世は
講頌　正四位伯爵臣藤原朝臣公大上　室町

君か代のとしのはしめをわたつみの
神もいはふかなみしつかなり
發聲　御歌所參候雅樂部長正三位勳五等子爵臣源朝臣有良上　綾小路

よものうみなみしつかなる御代にあひて
わまもゆたかに年迎ふ覧
奉行　御歌所參候正三位子爵臣菅原朝臣利鬯上　前田

浪風もなきうなはらにたつものは
ふねのけふりとしとありけり
講頌　正四位子爵臣藤原朝臣以季上　大宮

おさ日かけまたかすまねとあらたまの
年たつ海ののとかなるかな
講頌　正四位男爵臣源朝臣文仲上　西五辻

わたのはらやそしまかけてのとかにも
年の初日そさしわたりける
撰歌　權命婦従六位中原三枝上　平田

みめくみのなみをかつきてあまの子も
年のほき言いひかはすらし
奉行　御歌所參候正八位臣良岑朝臣鯛二上　大口

大君のちよをかそふるとしなみは
みめくみひろきうみにこそたて
講師　従五位臣藤原朝臣實麗上　滋野井

あまの子もふなうたうたひ海幸の
ゆたかなるへきとしいはふらむ
撰歌　京都府平民正七位則武正副上

ゆたかにもあさしほみてりわたの原
年のはつ日のかけをうかへて
東京府士族根岸敬女　江澄上

選歌

あらたまの年のはしめのよろこひを
たゝへたりともみゆる海かな
愛知縣士族中野知佳上

撰歌

ふしのねの雪のひかりにわけそめて
年たちかへる田子のうらなみ
兵庫縣平民大日本女學會會員　小出梢子上

撰歌

うらなみにあまのよひこゑとよむなり
年のはつ網幸こそあるらし
岐阜縣平民西村孝之助上

撰歌

のとかにもとしたつ浦のはつあひき
おものゝ鯛やまつかゝるらむ
熊本縣平民北里直樹上

撰歌

ふねはみなみなとに入りて年のたつ
あしたしつけき海のおもかな

○詠進歌數　十九日宮中に於て行はせられたる歌御會始に皇族の御詠進臣民の詠進に係る懷紙堅詠草の總數左の如し

皇族御詠進

懷紙	八
計	八

臣民詠進懷紙

御前披講	二一
高等官	一四
華族	一九
女官	一五
御歌所	一七
神宮職員	二八
華族女學校職員生徒	二六
向陽會々員	二〇
有位者及判任官	六
計	一六六

臣民詠進堅詠草

高等官	一七六
華族	三三
華族女學校生徒	六二
女子高等師範學校生徒	二四
京都高等女學校職員生徒	八五
大日本女會々員	二五〇
東京女學館生徒	六六
東京府	八六六
京都府	五四二
大阪府	五〇五
神奈川縣	一三九
兵庫	二六二
長崎	二六七
新潟	三三四
埼玉	二三七
群馬	二〇二
千葉	三〇七
茨城	二四八
栃木	一二八
奈良	一〇八
三重	四四五
愛知	一、二一七
靜岡	二七五
山梨	二四七
滋賀	二三六
岐阜	三三四
長野	六三二
宮城	二七九
福島	三〇二
岩手	一六四
青森	二〇〇
山形	三六五
秋田	三五一

福井	九七
石川	一三九
富山	一四一
鳥取	五三
島根	一三七
岡山	二四一
廣島	二四二
山口	三五一
和歌山	九七
德島	一一三
香川	一一八
愛媛	一四五
高知	八〇
福岡	一七六
大分	一七〇
佐賀	一三四
熊本	四五八
宮崎	八七
鹿兒島	二四五
沖繩	四〇一
北海道	一五八
臺灣	三四
露國在住者	一
米國在住者	一
清國在住者	二
韓國在住者	四
計	一三、四五二
外	
違式	五三一
期日後到着	二九三
計	八二四
總計	一四、四五〇

以上を一昨年の一萬二千三百五十七枚、昨年の一萬四千〇十八に比して年々の增加を見るべし

○御會始預撰者　一萬四千餘の詠進者中御前披講の榮を得たる七首は別項記載の如くなるが此の榮譽ある預撰者の氏名宿所を詳記すれば左如

宮城内　平田三枝
京都府上京區岡崎町　剛武正副
東京府豊多摩郡澁谷村根岸敬方　根岸澄江
愛知縣尾張國丹羽郡今井村　中野知佳
兵庫縣但馬國養父郡伊佐村　小出梢子
岐阜縣武儀郡關町二百番戸　西村孝之助
熊本縣肥後國阿蘇郡北小國村　北里直樹

○詠進者の注意

△宮中歌御會始めに一般臣民の詠進を許さるゝのみならず其の詠進を總て乙夜の覽に供せらるゝは詠進者に取りて無上の榮譽なるに向は聖意の忝なき程を充分に辨まへずして違式の詠進をなすもの尠なからざるは歎かはしき事と云ふべし現に今年の如きも詠進總計一萬四千四百五十の内違式のもの五百三十一(外に期日後到着二百九十三)あり之を昨年の總數一萬四千十八の内違式(四百十八外に期日後到着三百九十三)に比すれば一層の多きを加へたるなり

△今年違式の最とも甚だしさは御題を聞き誤まり「新年海」を「新年梅」としたるにありと「新年梅」は昨年の御題ありしを都鄙の或る新聞にて多分は校正の粗漏より今年の御題をも「新年梅」と記載したるものありしより傳へ誤り聞き誤りて斯くは大なる誤りをなしたるものあるが如しと

△違式の多きは書きさまの如何にも粗末なるにあり或は名を署して『上』と書くべきを『名上』と書したるあり或は歌の次に『宮内省御歌所御中』など書したるあり違式とも非禮とも云はん方なく往々掛員をして抱腹絶倒せしむるものもありと云ふ

△用紙の違式なるも亦た多し薄葉、半紙なるは尚は忍ぶべきも中には卷紙を繼ぎ合はして長々と認めたるさへあり此等は合本として叡覽に供せんとすれば全部の體裁を損するが故に違式として排せらるゝなりと薄葉なども合本とするに如何にも見すぼらしければ式に定められたる如く美濃以上の紙を用ゆべしとなり

△さるを又美濃以上善き限りの紙を用ゐんとて大高擅紙を其のまゝに用ゆるものもあり元來大高擅紙を其のまゝに用ゐさせらるゝは 陛下のみにして皇族と雖も其の寸尺を特に縮めて用ゐらるゝものなれば善きが上にも善きを欲して大高擅紙を其まゝに用ゆるは潜越の嫌なきにあらず最も心得ゆべきことなり

△詠進者の最も心に銘ずべきは貴賤貧富を問はず何人の詠進も其の歌の調ひたると調はざるも總て其筆のまゝ其紙のまゝ 兩陛下の御覽に供せらるゝことなり撰に預りたる歌が御前に於て披講せらるゝ榮譽は云ふまでもなく而も撰に預らざるものも違式ならざる限りは竪詠草のまゝ各府縣に區別して製本し御會始めの當日を以て獻覽に供へ

陛下には御手許に留め置かせられて一々御目を通させ給ふことなれば詠進者たるものは之を以て無上の光榮となすべく苟も式に違ふ如きの粗略あるべからざると共に總ての用意に於て謹嚴を旨とせざるべからず

○第一高等女學校　淺草七軒町に新設せし同校は愈よ四月より開校始業の運びに至りたるが募集人員は一年級に百二十八二年三年の兩級に各八十人宛とし三月三十一日より向三日間神田橋の女學校に於て試驗施行の由入學願書の受附は二月二十五日限りとの事なり。

○高山盈子女史の逝去　日本赤十字社病院看護婦取締看護婦養成所監督勳六等高山盈子女史は昨秋より腦神經衰弱に罹り靜養中の處去月八日頃より丹毒を併發し藥石効なく廿一日終に逝去せしが病革まるに及び陸軍大臣より内閣を經て特旨賜位記の奏請に及ばれ從七位に叙せられたりといふ女史は舊伊勢國津藤堂藩士吉岡堅兵衛の長女にして十九歳の時福山藩士高山宣直に嫁し明治十四年より二十年迄は學習院華族女學校教師をつとめ二十一年聘せられて宮城縣師範學校女子部舍監と爲り躬行實踐能く生徒を薫陶し二十七年日本赤十字社病院看護婦取締及び同生徒監督と爲り二十七八年戰役に際しては廣島病院に出張し病傷兵士の看護に從事し功を以て勳七等寶冠章を授けられ三十三年北清事變の時又救護員幷に看護婦取締として廣島に出張して好成績を顯はし勳六等寶冠章を授けられ猶法朗西共和國政府より「オフヒシエー、ド、ランストリユクシヨン、ピブリツク」勳章を贈與せられたるが常に報國恤兵の主旨を體認して看護婦の操行を督勵し多年一身を軍人救護に委ね且教育上にも亦見るべきの實績鮮なしとせず

現に宮城縣地方の父母子女の如きは今猶慕ひ居れりといふ享年六十二歳

○學生の龜鑑（納豆賣と牛乳配達）

苦學力行克く其業を遂ぐるもの鮮なき當世の學生に比し眞に死中の璧と稱へつべき篤學家孫車の輩に對しても尚慚るなけん其學生は目下麻布區山元町二番地小澤章平方に寓する熊本縣鹿本郡山鹿町竹内八百吉同縣天草郡比島村高橋義人の兩名にて貧家の出素より父兄に學資を仰ぐ能はず昨年九月上京以來修業の爲めには恥を捨て身を苦しめて獨立獨行其の志しを貫かんと欲し健氣にも八百吉は納豆賣となり義人は牛乳配達となりて朝風寒き冬の日の霜を踏み互ひに劣らず業を勵み僅かに得たる利潤を以て神田錦町なる國民英語學會へ通學し孜々吃々一日も怠らず兩人ともに成績頗る優等にして苦學の効空しからず講師諸氏の常に嘆賞する所なりと斯くと聞きたる同區永坂町の謡曲家牧原源五郎、一本松町千野利之助芝新堀町小川牛乳店其他の人々感じ入り當今學生の龜鑑なりと　此程多少金圓を集めて之を兩人に贈りしが固辭して受けず人々の切なる義心に動かされて漸く受納したりと云ふが飯倉五丁目の遊人長谷川源三郎と云ふが是を聞き日々の晩酌三合を廢して其費用を自今二學生に寄贈する旨申來れりとは是また業體に似合はぬ奇特なる男といふべし

○宮城縣の孝女

宮城縣宮城郡原町字小田原安養寺山平民農渡邊まつ（十八）とて母よね（四十）兄子之助（二十）弟三左衛門（十六）妹はる（十五）の五人家族にて戸主なる子之助は實父梅藏（七年前に死去す）存生中金二十圓を村内なる木皿勘兵衛より前借して其雇人となり母よねは明治二十九年より眼病に罹り殆ど失明する程の重症となりかてゝ加へて末弟七

古衛門(生存し居れば本年八歳の筈)も病氣に罹り立働くものとては其頃十三歳のなつ一人なりしがなつは殊勝にも病る末弟を負ひ手當をなしつゝ薪など取りては仙臺市に持來りて賣り幾かの錢を得て米味噌をとゝのへ又鰌、鰻、山芋などいふ滋養物を買求め、之を母と病弟に薦め夜の目も眠らず六年餘の歳月一日の如く働きしが不幸にして末弟は死亡したれど孝心天にや通じけん母は失明に至らずして治療に赴きたる故、只管に喜び勵み自分の手一つにて家内五口を糊し居る至孝の擧動感心なりとて原町役場より其筋へ上申したる由なれば不日表彰の沙汰あるべしといへり、喜ばしき話しにこそ

○名古屋の燒餅會　同市東北部の有志婦人間重に有夫者の間に昨今男子の寶婦に戯るゝ弊風一層甚しきを慨し今や古風の庭訓位にて我慢すべきに非ずとて、燒餅會(一名)なるものを組織するの計畫ありと聞くこそ面白けれ同會の目的は夫の浮氣を防遏するに在り其の方法は聯合組織を以てし毎月一回會合し各會員が知り得たる限りの亭主連の浮氣談を遠慮なく報告し、之を材料として當事會員は歸宅後徐むろに亭主を攻め付け又緊急を要すべき亭主連の浮氣話を聞き得たる會員は直ちに電話或は急使を走らせて當事會員に通報する事等にして其他外交官設備ありて茶屋の女中仲居と結托して各亭主の浮氣を調査する事の項目もありといふ但し其燒餅會は會の精神より一名を附したるものにて表面は婦人何々會と表面を飾り大看板を上るとの事なり

○露國婦人の位置　專制なる國態とて露國の婦人の位置は亦甚だ低かる可しと考へられるれど實は却つて意外に好位置を占め居れりといふ之に付

きて巴里レビユー、デ、デユー、モンドの記す所によれば露國は事實豫想外にも專制なる國柄なりと雖も露國各派社會の婦人の位置は佛國に於てすら見るを得ざる特權を有せり例へば財産の占有自由處分夫權の外に自由に行動す可きこと等なり而して露國に於ける結婚は宗教上の支配により離婚共夫婦全く同權を有し決して其間に差等なし彼の泰西以外なる米國に於て女子若くは男女混合の大學を設立せるは實に若き露國女子の最も羨望せる所なりとす然るに露國の教育制度は其出生の階級により大に異なり富家の子は皆家庭教師の手に教育され又特に此上流の女子の爲主要なる都府に女學校を設け之によりて十分丁寧なる教育を受け其他は痛く之に劣れるを見る親なるものも昔日と異なりて大に優さしく女子の行爲を重んずることとなり聖彼得斯堡の醫學校の如き殆んど五百人を收容して盛んに教育せらるゝを見る然も今後尚愈よ進んで益々盛んなるの傾向なりといふ露國婦人の將來は大に眼を刮して見る可きものあらんと

○米國閨秀文學者の作　往時米國の文學は英國に於て之を顧みるものなかりしが近來は之に反して米國の文學を稱揚すること寧ろ其度に過ぐるものあり此程一米國婦人の著したる小說は英國の諸新聞紙に於て天才の作なりとまでに賞贊せられ居るが其書の中に「妾の靜なる美はしき胃は妾の步むに隨ひて平和の歌を奏す」と云へる句あり實に驚く可き天才ならずや而して此書の原稿料は四萬圓なりと云ふ

○最高價の書　此程阿富汗王より波斯皇帝に贈りたるコーラン（回教徒の經典）は黃金の板を以て表紙とし眞珠、ルビー、ダイアモンド等の寶石を鏤めたるものにして其製本費は凡そ八十萬圓を

要したる由なり恐らく世界中最も高價の書なるべしと云ふ

○小供の睡眠時間　近頃瑞典國政府は小兒に適當に學習することを得る爲めに毎日幾時間睡眠すべきやを研究するの目的にて委員會を組織せるが同委員會より文部大臣に提出したる報告に四歳の小兒は十二時間七歳は十一時間、九歳は十時間十二歳以上十四歳までは九時間乃至十時間十四歳以上二十一歳までは八時間乃至九時間睡眠せざるべからず貧血症及び孱弱は睡眠の不足に原因すること多しと云々

○獨逸の長命者　伯林ターグブラットの報ずる所に據れば一昨年普魯西に百歳以上の人三十五人ありたる由にて其内男子二人女子十六人は僅に百歳を超えたるのみ四人の女子は百一歳一人の男子及び四人の女子は百二歳二人の女子及び二人の男子は百三歳一人の女子は百四歳一人の女子は百七歳尚一人の女子は百十一歳にして總て女子に長命者多きことを示すと云ふ

○女子銀行事務實地練習　神田區裏猿樂町なる女子計算員養成所にては去る一月廿五日午前十時より女學記者紳士等を招待して銀行事務實地練習を催ふしたるが執務熟練且つ敏捷にして成績甚だ佳良なりしといふ其の景況は次號に詳記すべし因に云ふ同所は是まで銀行事務員養成所と稱へ來りしが今回都合により改稱したるものなり

○世界第一の芽出度き家　瑞典國ハンマーデル市のリスベス、エリアスドターといふ同國で無類の長壽な老婦人は此程自分の子孫を集めて家族的園遊會を開いたが、其の招きに應じて集つて來た者は頗る多く、老婦人の娘は最早一廉のお婆ァさんになつて其子女（即ち老婦人の孫）の手に助け

られ、老婦人の孫はまた大勢の子女（即ち老婦人の曾孫）に取捲かれ、而かも此連中のうちにも早く既に結婚して子女（即ち老婦人の玄孫）を引連れたるものもありて、一家の繁昌實に芽出度限りを盡して居つたが、此興味ある集會の主人公たる老婦人の年齡と此時集つた、家族の數とを聞き洩したのは遺憾であるとダグブラペットといふ新聞は記して居る。

○寄贈雜誌及書目

婦人と子供	第三卷第壹號	フレーベル會
女學世界	第三卷第壹號	博文館
料理法講義	前期第八號	大日本割烹學會
家庭	第三卷第一號	家庭發行所
商家之友	第十號	時事新報社
小天地	第三卷第一號	金尾文淵堂
成功	第二卷第一號	成功雜誌社
愛媛敎育雜誌	第百八十六號	愛媛縣敎育會
音樂之友	第三卷三號	樂友社
下野敎育	第百八十五號	同敎育會
小學界	第三卷第一號	秀英舍
新衣裳	第十一號	吉田耕
婦女新聞	第百三十九、四十號	婦女新聞社
女子新聞	第十四號	女子新聞社
春潮	第九編第一號	新聲社
中學世界	第六卷第一號	博文館
武藏野	第二卷第一號	東洋文學會
をんな	第三卷第一號	大日本女學會
婦人	第四號	婦人協會
才媛詞藻	第七	東洋社
文庫	第一	內外出版協會
卯禮誌	第二十六號	福井工業新報社
通商月報	第八十號	府立大阪商品陳列所
偕行社記事	第三百五號	偕行社
國學院雜誌	第九卷一號	國學院
東京經濟雜誌	第一千百六十六號	經濟雜誌社
實業評論	第四十九號	實業評論社
オルガン使用法及修理法		東洋社

歌文月並兼題豫告

撰者

○歌　樞密顧問官 正三位子爵　黒田清綱先生

○文　華族女學校 教授　井上頼圀先生

		歌	文
二月	十五日	晨鶏	若菜を送る
三月	一日	柳間鶯	春日古都を過ぐ
	十五日	春雨	音樂會の記

投稿締切期限は總て發兌日の十日前、則一日分は前月の二十日、十五日分は其月五日とす

投稿心得

○兼題歌文は、女子は、何人にても隨意投稿することを得。

○投稿用紙は半紙(歌は半截文は全紙二つ折)の事。

○歌は題毎に用紙を別にし、一題には、一人一首若しくは二首を限りとす。上句の中に、二音の漢字を一字入れ、其の他は、悉く、平假名若しくは、一音の漢字にて認むべし。

○文は、毎行字數を一定し、且、句讀點を施すべし。

○右歌文とも、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して、分明に認め、住所姓名は、題目の下に明記すべし。

○投稿宛名は、國光社女鑑編輯局とすべし。

○總て書式に、違ひたるもの、及び、期日に後るゝものは採らず。

○投稿題文中、天地人を撰び、天には壹圓、地には五十錢、人には三十錢以下の書籍を贈呈す

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

在法科大學 矢田七太郎著

幕末之偉人 江川坦庵

全壹册 新刊

和製美本 寫眞銅版數葉 壹部定價金參拾錢 郵稅四錢

著者は曾て「帝國文學」に「岳南の奇才」と歌はれし狩水生。主人公は幕末の碩儒安積艮齋をして「文武兼備勇略超倫」と驚嘆せしめし徳川武士。雖然彼は近世史中最も興味饒き安政嘉永の幕府時代瀟灑の文、警拔の識、韮山代官の傳記として讀むも可一部の幕末として見るも可、新文明の發達史として見るも亦た可なり、道義頽敗して士氣を挑へる今日世人若し武士道の理想的人物を知らんと欲せば——學生若し日本固有の模範的武士に泰西的紳士の品格を加味したる崇拜者を求めんと欲せば——婦人若し徳川武士の理想的家庭を知らんと欲せば——此の書は決してパンを求むるものに小石を與ふるものにあらざる也

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

株式會社 國光社

發行所

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿著　飯沼珠城畫

山崎合戰

菊版　洋装美本

定價金參拾九錢

郵税金六錢

毛利征伐、高松水攻、中國引返、山崎大合戰、是れ我神州空前絶後の英雄豊臣秀吉があらん限りの智恵と力とを振ひし花も實もある大戰爭なり。之を例の戰鬪小説に獨特の妙ある塚原澁柿先生が江戸紫の粹且つ高尚にして押出よく、色も艶も古今獨歩の彩筆を執て叙述されたるものなれば、猿面重瞳の羽柴筑前、虎領狼顧の惟任將軍を始め敵には吉川小早川齋藤四王天味方には堀尾蜂須賀加藤木村の豪傑ども入り代り立代り眼前に來て各自得意の技倆を演ずるが如く、雲漠々、鼙鼓々々、砲火閃き、劍光迸る。舞臺一轉すれば衣冠束帶の豊臣秀吉悠然として現れ來る、實に是れ山崎大合戰のパノラマ、大徳寺燒香塲の活動寫眞。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
(電話新橋特八八番)
(電話新橋二六九三番)
發兌元　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

藤野天城著

女子小觀

新刊

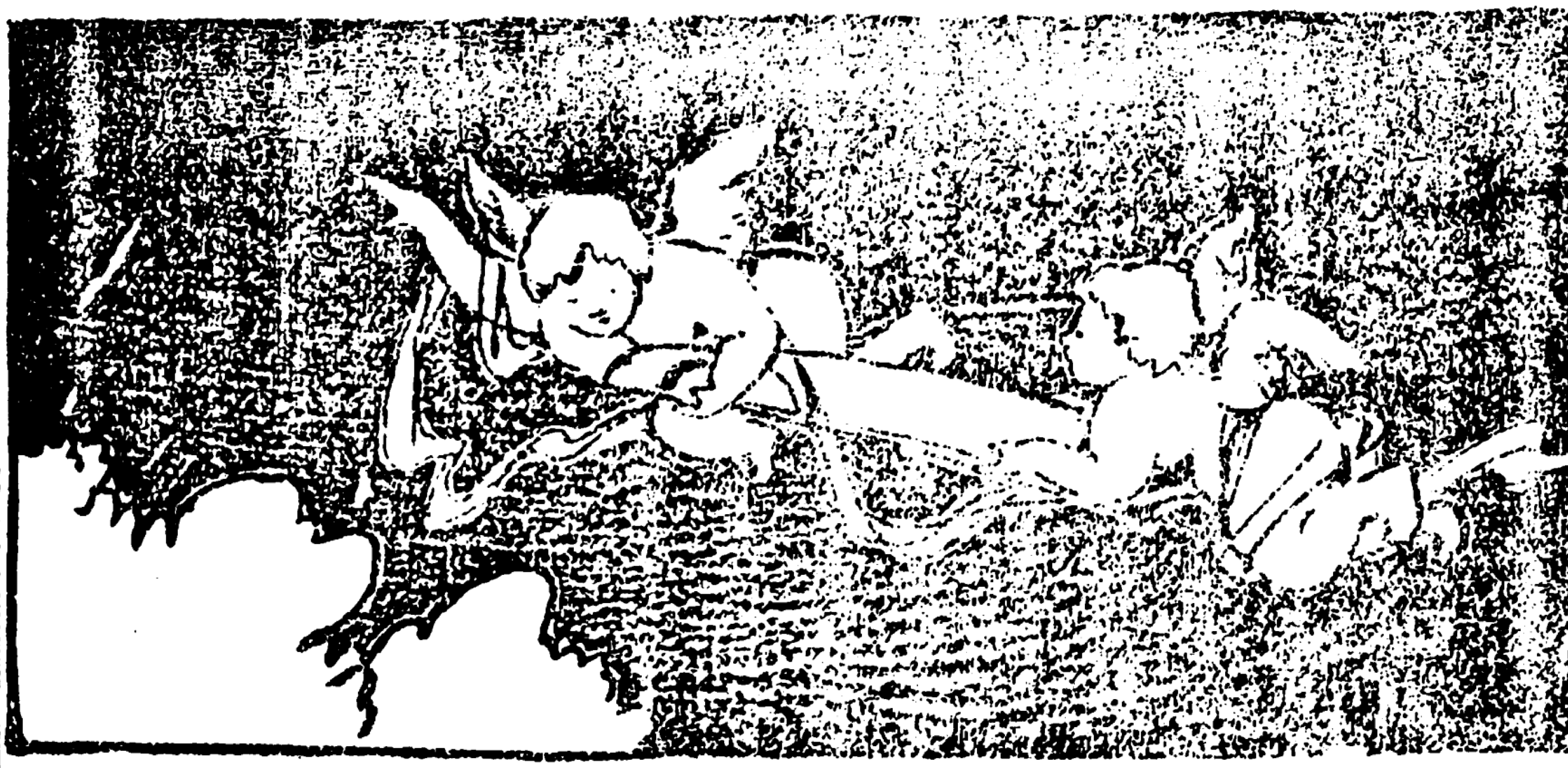
壹部定價二十錢
郵税金四錢

著者一種犀利の筆を以て、女性を觀察し、解剖して、縱横自在に之を論斷するや、恰もエックス光線を以て、明々地他の腹中を窺ふが如し。可憐の小女は之に依り、懲誡を得て欣々自得すべく、墮落淫靡浮萍の如く斷蓬の如き妖婦淫婦の徒に至つては、惴々焉恐れ且つ自ら戒めざるを得ざるべし。加ふるに文章流麗にして、詞藻湧くが如くなるを以て、讀了の間興味吻を突いて出で、全文を卒讀せずんば已む能はざるなり。

發行所 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

堀内新泉子著



家庭小説 女樂師 再版

一個の美人身は良家に生れ姿麗はしく才かしこく廣く中外の音樂を研究して其蘊奥を極めしが月下氷人の媒妁にて一個の青年と赤縄を結び、音樂の効により陰鬱柔儒なる良人の心機を一轉して勇進敢爲の、丈夫となし、遂に或る一大事業を成功せしむると云ふ趣向新新の家庭小説にて、春宵孤閨に泣くの新婦、秋夜明月に歌ふの夫妻、一面出産の歡樂、他面洋行の別離、と悲喜忽ち變じ、哀樂俄に移り、讀者をして應接に暇あらざらしむ、而も主要は一家を輯睦して子孫の繁昌を圖るに歸せり、著者が家庭小説に別才あるは、大方讀者の知らせ玉ふ所、一本を座右に置かれなば、特り秋夜の幽寂を慰むるのみならで、家庭教育を裨益すること疑ひなし

壹部定價參拾五錢　郵税六錢

發行所　東京　株式會社國光社

和軒梅澤精一著

清少納言と紫式部

四六判
紙數三百頁
定價三十五錢
郵稅六錢

本書は著者が精研細閲の餘に成りし者なり清女の傳記に於いて歌仙元輔が交際の範圍に因つて清女が宮仕の動機を論じ中關白派と御堂關白派との勢力の消長よりして椒房の光景を叙し美的皇后を描き李義山を論じ枕草子の文章を内外二方面より觀察し最後に歌人としての清女に及び又後者にありても父が交際範圍夫の逝去等より紫女が宮仕源語製作の動機に及び往生要集によりて時代精神を陳べ天臺宗と源語との關係に及び紫女が人生觀女性觀を叙し又小說としての源語を評し兼ねて古今東西の源語論を批判し最後にダンテが神劇と紫女が源語とを比較せり製本高雅、考證正確文學的哲學的眼光を以て當代の宗教と文學とを品隲せる者也所論斬新文章宏麗王朝文學の代表的製作と人物とに關する幾多の疑團は本書に於いて殆んど遺憾なく解決せられたるに近し大方の士女幸に一本を座右に備へて研鑽娛樂の資料とせよ

發行所
東京々橋區築地二丁目廿一番地
株式會社 國光社

東京築地株式會社國光社印刷部印刷